和文独訳のサスペンス

翻訳の考え方

田中 敏
W.E.シュレヒト［共著］

Japanisch-deutsche Übersetzung aus zwei Perspektiven

時事文・エッセイ・小説の独訳に著者がそれぞれ挑戦．その結果の照合や相互分析を通して，独文の仕組みや発想を学ぶユニーク翻訳術！

白水社

和文独訳のサスペンス

——翻訳の考え方——

田　中　　敏
W．E．シュレヒト
共著

Japanisch-deutsche Übersetzung
aus zwei Perspektiven

白　水　社

装幀——ローテ・リニエ

はじめに

白水社から毎月送られてくる「出版ダイジェスト」に『和文仏訳のサスペンス』の出版案内が載っていたのは，三年ほど前だったろうか。その内容の紹介記事を読んで私は，してやられたと思った。大賀正喜氏とG．メランベルジェ氏の共著，大阪日仏センター編によるこの『和文仏訳のサスペンス』は，日本文のテキストをお二人がそれぞれ別々にフランス語に訳して，それを比較討論するというものであるが，実はこれと同じことをドイツ語でやってみたいと，私はかねがね考えていたからである。

昭和40年初めてドイツに留学した折，ドイツ人から日本や日本人についてよく質問を受けた。しかし，私はいつも，彼等が理解し納得出来るような答えをすることが出来なかった。その度に私が痛感したのは，自分の語学力の不足と，いかに自分が日本のことについて知らないかということであったが，やがて，狼狽，困惑を繰り返しながら私は，自分が答えといえるような答えが出来ない最大の原因は，一般にわれわれ日本人が自分を外に向って説明するという習慣を持っていないことに依るのだ，ということに気付いた。われわれにそういう習慣がないのは，われわれが自分を相手に説明する必要のない以心伝心の社会に生きてきたからであろう。われわれにとって自己主張は野暮な，見苦しいことであった。そういう社会に生きてきたわれわれの外国語の勉強は，したがって相手を理解するためのもの以上のなにものでもなかった。つねに異文化とのせめぎ合いのなかで生きてきた民族の人たちが，不十分な語学力を十二分に駆使して，自己を主張し，自分を説明している光景を私は羨望の眼差しで横目で見ながら，ドイツでの二年間を過ごしたのであった。

帰国後もドイツ人とのお付き合いのなかで，自分を十二分に語れ

ないもどかしさはいや増すばかりで，やや偏執狂的に私はこのことに拘り続けた。語学力が十分でなくても自己表現は可能であるという，見聞した事実に励まされて，私はドイツ語の教鞭をとる傍ら，私たち日本人の考え方，生き方をドイツ人に説明するという課題を自分に課し，日本の現代の思想家の評論文，講演原稿などをドイツ語に翻訳するということを試みてきた。

しかし，そもそもドイツ語のネイティブ・スピーカーでない私が日本語をドイツ語に訳すということは，やはり無謀な試みであると言わねばならない。当然ドイツ人の協力が必要である。幸い，今までたくさんのドイツ人の熱心な協力を得ることが出来た。そのなかには，全く日本語の分からないドイツ人もいたし，少し日本語が出来る人もいた。また，完璧に日本語を習得したドイツ人にも巡り会えた。その一人が本書の共著者のシュレヒトさんである。それらの人々との共同作業はそれぞれ私にとってまことに貴重な体験であって，得るところ実に大であった。そこで学んだ最も重要なことは，異なった文化の相手に，自分はこういう考え方をしているということを説明する場合，あくまで相手の言葉で言わなくてはならないということである。そうしないと相手は理解出来ない。ここでいう相手の言葉とは，「相手の使っている言葉」，すなわち，「相手の考え方」ということである。これは簡単なようで，実は大変難しい。

ドイツ人との共同作業で私が学んだこういったことを私だけのものにしておくのはまことに勿体ないと思い，なにか形あるものにしたいという考えが頭から離れなかった。そして，その形あるものにする方法として私が考えていたのが，日本文のテキストを日本語のよく出来るドイツ人と私とがそれぞれ独自にドイツ語に訳して，それを比較討論するというやり方であったのである。が，それが『和文仏訳のサスペンス』によって先を越されてしまったというわけである。同じことをドイツ語でやっても二番煎じで，場合によっては盗作の非難も免れない。この際は先見の明のあった大賀，ネランベ

ルジェ両氏に敬意を表しつつ潔く引き下がることにして，この件はしばらく忘れていた。

天の声とでもいうのだろうか，あるときふと，二番煎じでもいいではないか，堂々と二番煎じに甘んじて，同じ形式で，そのタイトルも『和文独訳のサスペンス』として，同じ出版社から出してもらえばよいのではないか，という考えが浮かんだ。まず，最近の私の翻訳の仕事で専らお世話になっているシュレヒトさんに協力をお願いすると，喜んで引き受けてくださった。次に，恐る恐る白水社にお伺いをたてたところ，快諾を得たのである。また，大賀，メランベルジェ両氏及び大阪日仏センターの横山理氏も，私たちが同じ形式でドイツ版を出版することを快く了解してくださった。ここに心からの御礼を申しあげる次第である。

私たちの作業は，まず日本語のテキスト選びからはじまった。これは思ったよりも難航した。私が訳してみたいと考えるものと，シュレヒトさんが訳したいと思うものとがかなり違ったからである。私は，日本人の考え方，または「日本」を説明したもの，あるいは日本人の主張などを多く取り上げたいと考えたが，シュレヒトさんは内容よりもむしろ語学的な見地から興味あるテキストを選ぶという方向に固執した。話し合いの結果，12 編が選ばれたわけであるが，念のため記しておくと，課題 1 から課題 6 までの新聞記事（1～3 の新聞社名および日付は不詳）と課題 12 の計 7 編がシュレヒトさんの選んだもので，課題 7 から課題 11 までの 5 編は私が選んだ。本書のために翻訳課題として著書の一部を使わせてくださった方々とその日本文を使わせてくださった出版社，新聞社に対し，ここに厚く御礼を申し上げる。

テキストが決まってからの進行は，本書の趣旨どおり，各自が翻訳し，それについて討論をした。討論は日本語とドイツ語の両方で行なわれ，テープおこしは私が担当した。蛇足ではあるが，一言弁解がましくいわせていただくなら，翻訳に関しては勝負あったりで，

ネイティブ・スピーカーにはかなわない。日本人の読者は私のドイツ語訳に共感と同情を覚えるであろう。シュレヒトさんのドイツ語と対応させるとき，まさにサスペンスを味わわれるだろうが，それが本書のねらいでもある。

昨今にわかに国際化ということが叫ばれるようになった。国際化とはわれわれの文化的規範を西欧化することではなく，われわれのそれを西欧人に説明し，以て相互理解を図ることであろう。相互理解とは，字句どおりお互いに理解し合うことで，それは双方の側で，相手を理解する努力と，自分を相手に理解させる努力とが両々相俟ってはじめて成り立つものである。その意味において西欧とわれわれとの間には相互理解はまだない。なぜならば，西欧人は相手を理解する努力を全くしてこなかったし，一方われわれは相手を理解する努力はおさおさ怠りなかったが，自分を相手に理解させる努力はほとんどしていないからである。今，われわれ日本人は自分を他国民に説明することを要請されていると私には思われる。本書がそういった意味において，西欧との相互理解を促進していくための一助ともなれば，望外の喜びである。

最後に，本書の企画をご採用くださり，出版を快諾くださった白水社の藤原一晃氏，作成に当たって終始お世話になった編集の稲井洋介氏に厚く御礼を申し上げる。

平成３年 春

田中　敏

目　次

課題 1　東京の家賃

東京の家賃がますます上がってしまったので，多くの人は郊外に引っ越しするしかない。会社まで一時間半以上もかけて通勤するサラリーマンもまれではない。東京の高い家賃は，もう払えないし，自分の家を持つ夢はもうとっくに諦めている。

(田中) Die Miete in Tokyo ist immer höher gestiegen. Es bleibt daher vielen Leuten nichts anderes übrig, als in die Vorstadt umzuziehen. Ein Angestellter, der zum Arbeitsplatz mehr als anderthalb Stunden braucht, ist heute nicht selten. Die hohe Miete in Tokyo können wir nicht mehr bezahlen; unseren Traum, ein eigenes Haus in Tokyo zu besitzen, haben wir schon längst aufgegeben.

(W. Schlecht) Angesichts der immer höher gestiegenen Mieten in Tokyo bleibt vielen Leuten nichts anderes übrig, als in die Umgebung zu ziehen. Angestellte, die einen Arbeitsweg von über eineinhalb Stunden haben, sind keine Seltenheit. Sie können die hohen Mieten in Tokyo nicht mehr bezahlen, und den Traum vom eigenen Haus haben sie längst aufgegeben.

東京の家賃がますます上がってしまったので，多くの人は郊外に引っ越しするしかない。

（田） Die Miete in Tokyo ist immer höher gestiegen. Es bleibt daher vielen Leuten nichts anderes übrig, als in die Vorstadt umzuziehen.

（S） Angesichts der immer höher gestiegenen Mieten in Tokyo bleibt vielen Leuten nichts anderes übrig, als in die Umgebung zu ziehen.

▶ die Mieteとdie Mieten

田: 文章の形についてはあとで話し合うことにして，まず単語について検討してみたいと思います。「家賃」ですが，私は単数形にしたのですが，シュレヒトさんは複数形になっています。私は，「家賃」という概念と考えて，こうしたのですが。

S: ここでは，複数形がいいと思います。家賃といってもいろいろあるわけです。安いのもあれば，高い家賃もあるわけで，バリエイションがありますから，複数形がいいのです。単数の形はちょっと違うときに使います。例えば，ある人の給料からの支出には，家賃とか，食費とか，光熱費とかいろいろありますね。そういう全体のなかの一つの項目としていうような場合には，単数形を使います。

▶「郊外」は Vorstadt か

田:「郊外」を私は Vorstadt としましたが，シュレヒトさんは Umgebung と訳してます。私もドイツ語の Vorstadt は日本でいう「郊外」とは状況が違うという感じはしたのですが，他のドイツ語が思い浮かばなかったものですから，安易に Vorstadt を使ってしまいました。シュレヒトさんの Umgebung をみて，なるほどこれがぴったりだと思いました。

S: 少なくとも私には，Vorstadt は地域としての意味よりも，質的な意味を持っています。つまり，特別な雰囲気をもった所を想像するのです。静かな町並み，牧歌的な，多少ネガティブな言い方をすれば，眠ったような，活力のない所を思い浮かべるわけです。このテキストでいっているのは，東京でいえば，例えば所沢とか，浦和とか，千葉というような所をさしているのだと思いますから，Umgebung　がよいでしょう。私の知る限りでは，東京周辺には，Vorstadt に当たるような所はないのではないでしょうか。

田: Vorort はどうでしょう。

S: Vorort ならいいのです。ヨーロッパの Stadt は城壁に囲まれていますが，その城壁に隣接した外側の地域一体を Vorstadt というんです。Vorort は都会の周辺に位置した地域のことですから，Umgebung とだいたい同じと考えてよいと思います。

▶「引っ越しする」の umziehen と ziehen

田: 次は「引っ越しする」ですが，私は機械的に umziehen を使いました。シュレヒトさんは，ただ ziehen ですね。

S: umziehen でももちろんいいんです。ただ，umziehen はまず，必ずしも「どこそこへ ...」という場所を表す語を必要としません。例えば，Nächste Woche ziehe ich um. でいいわけです。一方 ziehen は，必ず「どこそこへ ...」がなければなりません。次に umziehen は，その行為というか，つまり，引っ越し屋さんが来て荷物を運んでといった，その過程を意味します。ここでは，そういう意味での引っ越しのことをいっているわけではありませんし，「郊外へ ...」という場所を示す語もありますから，umziehen は少しくどいように思います。ちなみに，ziehen と umziehen を使った次のような会話が考えられます。„Ich ziehe nach Osaka." — „Wirklich? Wann ziehen Sie denn um?"

▶「... ので」の weil など

田: 今度は，文の組み立て方についてですが，これは私の個人的

な好みなのですけれど，weil とか da を使った副文章はなるべく使いたくないのです。それで，「... しまったので，...」も意図的に従属接続詞を避けて，二つの主文章にして daher で繋ぎました。

S：私もここで da または weil を使うのは，あまり好ましくないと思います。文として，型どおりで面白味に欠けますし，だいたい da や weil で冒頭の文章が始まるのは，文体的に美しくありません。また，weil はここでは強すぎます。

田：そこでシュレヒトさんは，私が思いつかなかった angesichts を使って一つの文章にしていますが，ただ，angesichts は，厳密に言うと因果を意味しませんね。

S：おっしゃる通りです。しかし，ここの「... ので」は，「そういう現実に直面して」という意味に解釈してむしろいいわけで，私は，この angesichts は適切だと思います。それにまた，後に続く「... するしかない」と旨く照応するのです。もちろんいろいろな言い方があるでしょう。例えば，次のようなものが考えられます。

Bei den immer höher gestiegenen Mieten ...
Aufgrund der stetig gestiegenen Mieten ...
... haben viele Leute keine ［andere］ Wahl (Möglichkeit) ...
... bleibt vielen Leute keine andere Wahl ...

▶ viel と manch

田：viel で今ちょっと思いついたのですが，「多くの人」は，まずわれわれは間違いなく viele Leute と viel を使います。それはいいのですが，manch の使い方がわれわれには，よく分からないように思えるのです。辞書には，einige と viel の中間の数を示す，などと解説してありますが，必ずしもそれだけでは解決出来ないような気がするのですが。

S：その解説は間違いではありませんが，manch は，「ある特定の数のなかの多く」という意味と考えて使えば，正しく使えると思

います。

田: 例をあげていただけますか。

S: In dieser Stadt gibt es noch manche Häuser, die aus dem Mittelalter stammen. などです。この場合，manches Haus と単数にすると，「多く」という感じがもっと出ます。

> **会社まで一時間半以上もかけて通勤するサラリーマンもまれではない。東京の高い家賃は，もう払えないし，自分の家を持つ夢はもうとっくに諦めている。**
>
> (田) Ein Angestellter, der zum Arbeitsplatz mehr als anderthalb Stunden braucht, ist nicht selten. Die hohe Miete in Tokyo können wir nicht mehr bezahlen; unseren Traum, ein eigenes Haus in Tokyo zu besitzen, haben wir schon längst aufgegeben.
>
> (S) Angestellte, die einen Arbeitsweg von über eineinhalb Stunden haben, sind keine Seltenheit. Sie können die hohen Mieten nicht mehr bezahlen, und den Traum vom eigenen Haus haben sie längst aufgegeben.

▶ ein Angestellter と Angestellte

田: われわれ日本人にとって，冠詞の使い方は永遠の課題です。私もここの「サラリーマン」は無冠詞の複数形が常套だろうとは思ったのですが，敢えて不定冠詞の単数形にしたのは，「どういうサラリーマンがかというと」「一時間以上も通勤にかかるサラリーマンが」というふうに考えられないこともないと思いまして，ein Angestellter としてみたのです。ein Angestellter といったら，ドイツ人はどんなふうに理解するのですか。

S: ein Angestellter というと，限定された意味になるのです。これだけを日本語に訳すことは難しいですが，こんな説明でどうでしょう。ein Angestellter という主語で文章が始まったら，サラリーマン以外にもいろいろな職業があるが，「その中でサラリーマンは」というふうに理解して，そういう意味合いで文が続くであろうと考えるのです。というわけで，例えば，「サラリーマンなら月にいくらいくら稼ぐ」という日本文でしたら，Ein Angestellter verdient monatlich soundso viel. となって，ein Angestellter がぴったりというわけです。ですから，ドイツ語を日本語に訳す場合，Ein Angestellter tut so etwas nicht. でしたら，「サラリーマンならそんなことはしない」という訳がいいわけです。いつもそうだとはもちろんいい切れませんが，「... なら」という日本語が，不定冠詞に当たることがよくあるといえます。

田: なるほど，よく分かりました。すると，やはりここでは無冠詞の複数形がいいわけですね。

S: はい。ですが，今の説明は一つの可能性ですから，冠詞の使い方については，別の機会にたくさんの例を集めてリストアップして，その多様な用法を実用的に整理してみたいと思っています。

▶ 内容に即した文体を選ぶ

田: Angestellte につづく関係文はそれぞれ表現は違いますが，そう大きな問題はないと思います。私は，Arbeitsweg という言い方を知りませんでした。知っていたら，私もシュレヒトさんのと同じ文が作れたかと思います。nicht selten と keine Seltenheit はわれわれにも周知の二つの言い方ですが，シュレヒトさんが，keine Seltenheit のほうを使ったのは，何か理由があってのことでしょうか。

S: 意味は同じですね。keine Seltenheit の方がやや形式ばった言い方です。洒落た言い方ともいえるかもしれません。私がここで keine Seltenheit を使ったのは，このテキストは即物的で実際的な，

そして情報的な内容ですから，文体としてこの言い方の方が適切だと思ったからです。翻訳するとき，まず気をつけなければならないことは，内容に即した文体を選ぶということです。

▶ der Traum von ...

田: その辺のところも，われわれにとって難しい課題の一つです。次の文では，私は Traum の後を zu 不定句にしましたが，シュレヒトさんは von を使って Traum を説明しています。

S: 私は，zu-不定句は全く考えませんでした。私たちはTraumといったら，自動的に von なんです。

田: その方が簡潔ですね。あとは，全体的にいって，そう変わりはありませんが，私は，「もう払えないし，... 諦めている」という文の流れをなんとか出そうと思い，二つの文章とも目的語を文頭に置いて，セミコロンで繋いでみました。シュレヒトさんは，簡単に und で処理していますけれど，音読してみると，これで十分ですね。

それから，これは解釈の問題ですが，私は主語を，前文と関係なく一般的に取って，wir にしましたが，シュレヒトさんは前文の Angestellte を受けて sie にしています。

S: そんなところが，言ってみれば翻訳の面白さではないでしょうか。演奏家が楽譜を読んで，独自の解釈をするように，翻訳もまたそれと同じだと思います。それがまた翻訳の楽しさでもあるのです。

課題 2　ヘッドホンステレオ

初めは若者向けのファッション商品ぐらいに考えられていたヘッドホンステレオが開発から十年目に入り，ユーザーの幅も広がってすっかり定着してきた。歩きながら音楽を聴くだけでなく，電車の中で語学学習テープやカセットブックを聴いている人。それにラジオやテレビの音声に切り替えて，情報源としている人もあるらしい。キャッシュカードやワープロと並んで，現代人の七つ道具になるかも知れない。

(田中) Es ist fast zehn Jahre her, daß Kassettenrecorder mit Kopfhörern, die man zunächst für nichts anderes als eine Modeware für junge Leute gehalten hat, entwickelt wurden. Sie fanden aber schnell in weiten Schichten ihre Verbraucher und haben sich heute weitgehend durchgesetzt. Man sieht nicht nur Leute, die beim Gehen mit diesen Geräten Musik hören, sondern auch Leute, die in der Bahn mit Tonbandkassetten

(W. Schlecht) Seit der Entwicklung des *Walkman*, von dem man anfangs der Meinung war, er sei nichts weiter als ein Modeartikel für junge Leute, sind fast zehn Jahre vergangen. Die Gruppe der *Walkman*-Fans ist stetig gewachsen, und inzwischen hat sich dieses Gerät einen festen Platz in unserem Alltagsleben erobert. Viele Leute hören damit nicht nur Musik im Gehen, sondern auch Kassetten zum Spra-

Fremdsprachen lernen oder auf Band aufgenommene Literatur hören. Außerdem gibt es, wie man hört, auch Leute, die diese Recorder dazu benutzen, Informationen zu erhalten, indem sie sie auf Radio oder auf TV-Tonempfang umstellen. Diese Kassettenrecorder dürften wohl mit der Cash-Karte und dem Word-Processor zu den Siebensachen des modernen Menschen werden.

chenlernen und ‚Literatur auf Tonband', z. B. in der Bahn. Man kann den *Walkman* — wie es heißt — auch als Nachrichtenquelle verwenden, indem man auf Rundfunk- oder TV-Tonempfang umschaltet. Der *Walkman* hat gute Chancen, zusammen mit der Kreditkarte und dem Computer zu den ‚Siebensachen' des modernen Menschen zu werden.

初めは若者向けのファッション商品ぐらいに考えられていたヘッドホンステレオが開発から十年目に入り，ユーザーの幅も広がってすっかり定着してきた。

（田） Es ist fast zehn Jahre her, daß Kassettenrecorder mit Kopfhörern, die man zunächst für nichts anderes als eine Modeware für junge Leute gehalten hat, entwickelt wurden. Sie fanden aber schnell in weiten Schichten ihre Verbraucher und haben sich heute weitgehend durchgesetzt.

（S） Seit der Entwicklung des *Walkman,* von dem man anfangs der Meinung war, er sei nichts weiter als ein Modeartikel für junge Leute, sind fast zehn Jahre vergangen. Die Gruppe der *Walkman*-Fans ist stetig gewachsen, und inzwischen hat sich dieses Gerät einen festen Platz in unserem Alltagsleben erobert.

▶「十年目」

田: どうも私はハイテク関係に弱いので，ヘッドホンステレオというのが，ウォークマンのことだとは知らなかったのですが，そもそもウォークマンというのは商標名ではないのでしたっけ。

S: 再生専用のポータブル・ステレオ・カセットと小型ヘッドホンのコンビに対してソニーがつけた商標名です。正式な一般名は，ヘッドホンステレオなんですが，もうほとんど普通名詞として用いられているのではないでしょうか。ドイツでも普通名詞のように使われていますし，ドイツの辞書にも，普通名詞として出ています。英語の man が「男」という意味ですので，男性名詞です。

田: さて，文章ですが，「... 十年目に入っている」を，言い方は違っ

ていますが，二人とも「ほぼ十年経っている」というふうに訳しています。この「十年目に入り」を，この日本語のように，何年目という言い方ではいえないものでしょうか。das zehnte Jahr を使って。

S：いえないことはありませんが，ドイツ語として硬いというか，一般的ではありませんね。ここでは，「まる十年は経っていない」という意味ですから，fast を入れることによって，「十年目」を十分表現出来ていると思います。例えば，日本語で「私たちは結婚して十年目です」という場合，ドイツ語では普通 Wir sind nun zehn Jahre verheiratet. といいます。

田：ドイツ語では，こういう場合，Zeitdauer でいい表すのが一般のようですね。そして，そのドイツ語の文章を日本語に訳すとすれば，「結婚して十年目です」と訳して，「私たちは十年間結婚しています」とは訳しませんからね。

S：はい。しかし，例えば「ドイツへ来て十年目に彼と知り合った」というような場合は，もちろん im zehnten Jahr といいます。

田：その場合は，完全に Zeitpunkt を言っているわけですからね。

▶ es ist zehn Jahre her か es sind zehn Jahre her か

田：その「ほぼ十年経っている」の訳ですが，私は，es ist ... her, daß を用い，シュレヒトさんは，... sind vergangen を使っています。ここでちょっとお聞きしたいのは，es ist ... her, daß の場合，... のところが複数でも動詞は ist でいいと私は思っていたのですが，この間ある本のなかで，sind になっているのを見ました。どちらでもいいということでしょうか。

S：両方いいますね。それは，何を主語として受け取るか，ということだと思います。ist の場合は，daß 以下の「出来事が」十年前という受け取り方で，sind の場合は，「十年が」経過したという，受け取り方をしているということでしょう。

田: そういえば，私の見たその文では，Zehn Jahre sind es her, daß ... と，倒置というか，zehn Jahre が文頭に来ていました。

▶ nichts anderes als と nichts weiter als

S: 私がちょっと気がついたことを申しあげますと，「ファッション商品ぐらいに考えられていた ...」のところですが，田中さんは nichts anderes als を使っていますね。nichts anderes als は「以外のなにものでもない」という意味ですから，この場合いい過ぎというか，日本文と少しニュアンスが違うと思います。「ファッション商品程度のもの，それ以上のものではない」ということですから，それにいちばんぴったり当たるのは，nichts weiter als です。

田: なるほど。たしかにそうですね。後は，私の訳は「開発されてから」と動詞による表現になっているのに，シュレヒトさんのは「開発以来」という前置詞句になっていること，それから，「ファッション商品ぐらいに考えられていた」の「考えられていた」が，違った言い方になっている，ということですが，これらは表現方法の相違ということでよろしいのではないかと思いますが。

S: そう思います。

田: 「考えられていた」に der Meinung sein を使うというのは，思いつきませんでした。日本文は「十年目に入り，...」と文章は続いていますが，ドイツ語訳は二人ともそこで文を一応切っています。

S: 偶然ですね。

田: ドイツ語の文としてはここで完結させた方がすっきりします。日本語の文は，ただなんとなく言い切らないで，続ける傾向がありますから，敢えて独訳もそれに従う必要はないでしょう。さて，その後の訳ですが，二人の訳はかなり違います。しかし今度は，単なる表現方法の相違ということで，片付けるわけにはいかないようです。シュレヒトさんは，かなり自由に訳していますね。

▶「ユーザー」にあたるドイツ語はない

S: まず，「ユーザー」ですが，これは英語です。これをドイツ語

で Verbraucher とはいわないんです。なぜかといいますと，Verbraucher は verbrauchen という動詞からきているわけですが，verbrauchen は，その物が無くなってしまうまで使うということなんです。つまり「消費する」ということですので，この場合適当ではありません。ここでは「使う人」という意味ですが，ドイツ語には Gebraucher といった言葉はないのです。Anwender という言葉はありますが，これはまたちょっと意味が違います。

田: user という英語はドイツ語ではそのまま使うことはないのですか。

S: 使わないことはありませんが，あまり一般的ではありません。そこでまあ私は，*Walkman*-Fan と訳してみたわけです。

田: なるほど。そして，その前に die Gruppe をつけていますが，この Gruppe をつけないで，*Walkman*-Fan を主語にすることは出来ませんか。

▶ wachsen, zunehmen は要注意

S: それはちょっとまずいのです。つまりそうすると，ウォークマンのファンの背が伸びて成長したという意味になる可能性がありますから。

田: 辞書で wachsen を引くと，「成長する」の他に「ふえる，増大する」という訳語が載っていますが，主語が「ファン」というように人間を表すものだと，「背が伸びて成長する」という意味で理解されかねない。主語が，Gruppe というような数量概念になって初めて，間違いなく「ふえる」という意味で理解されるということですね。ドイツ語というのは，融通がきかないのだなあ。

S: zunehmen なら，*Walkman*-Fan を主語にして使えないこともありませんが，これも厳密にいうと，「体重がふえる」という意味にとれないこともないですから，やはり適切でないと思います。wachsen や zunehmen は，主語が人間の場合は要注意ということですね。

▶ **「定着する」の sich einen festen Platz erobern**

田: 次の「すっかり定着してきた」もシュレヒトさんは，かなり自由に訳していますね。

S: でも，この sich einen festen Platz erobern は慣用的な表現で，まさに「定着している」の意味ですから，そんなに自由な訳ではないと思います。

田: そして，この表現では，「どこに定着したか」をやはり明示する必要がありますから，日本文にはない in unserem Alltagsleben が入っているわけですね。

S: そうです。

田: 私の訳は，Verbraucher が適当でないことはさておいて，「ユーザーの幅も広がって」をだいたい日本文どうりに訳しました。ただそのとき，日本文にはない schnell を入れたのですが，どうもなにかないと，ドイツ語の文として落ち着かないというか，流れないような気がしたのです。

S: そうですね。たしかにあったほうがいいですね。

田: そして，「定着する」に，sich durchsetzen を使いました。

S: いいですね。weitgehend を入れたのもいいと思います。weitgehend は，「まだ完全でないが，十分に」という意味ですが，日本語の「すっかり」も，百パーセントではないというニュアンスがあると思いますから。

歩きながら音楽を聴くだけでなく，電車の中で語学学習テープやカセットブックを聴いている人。

(田) Man sieht nicht nur Leute, die beim Gehen mit diesen Geräten Musik hören, sondern auch Leute, die in der Bahn mit Tonbandkassetten Fremdsprachen lernen oder auf Band aufgenommene Literatur hören.

(S) Viele Leute hören damit nicht nur Musik im Gehen, sondern auch Kassetten zum Sprachenlernen und ‚Literatur auf Tonband', z. B. in der Bahn.

▶「... を聴いている人。」

田: まず，「... を聴いている人。」という，述部が欠けていて，体言で終わっているこの表現をどう処理するか。私は，man sieht を補って文章にしましたが，シュレヒトさんは，viele Leute を主語にした文にしました。

S: どう処理するかは，翻訳者の裁量に任されていいわけです。

田: viele Leute を主語にしたために，シュレヒトさんの文では，動詞は hören を一回使うだけですんで，ずっと短く簡潔になっています。ただ，これを文章にするとき日本人には多分，「... 聴いている人がいる」がいちばん自然に頭に浮かんでくる言い方で，「たくさんの人が ... 聴いている」という，単刀直入な文を考える日本人は少ないのではないかと思います。しかし，ドイツ文としては，きっとこの方がすっきりしているのでしょうね。

▶ beim Gehen, im Gehen, gehend

田: さて，「歩きながら」ですが，私は beim Gehen，シュレヒトさんは，im Gehen としました。アルタナティーフということでよいでしょうか。

S: そうですね。ほぼ同じと考えていいと思いますが，厳密にいえば，beim Gehen は「歩くときに」で，wenn man geht ということです。ここでは「歩きながら」ですから，im Gehen の方がより適切ですね。

田: 「... ながら」の言い方として，われわれは，現在分詞を使って表現出来るということを初級文法で習うわけですが，ここで gehend を用いるのはどうでしょうか。私は，なんとなく——理由はよく分

からないのですが——おかしいように思ったのですが。

S: gehend は，おっしゃる通り，ここでは具合が悪いですね。その理由は，gehend は，例えば Auf mich zugehend, streckte er mir die Hand entgegen. といったように，述語句の中では使いますが，単独では，im Gehen を使って，gehend が使われることはまずないといえます。

▶ **z. B. in der Bahn**

田: 私はシュレヒトさんの「電車の中で」の訳をみて，あっ，そうだった，しまったと思いました。in der Bahn の前に zum Beispiel を入れるべきでした。

S: ドイツ語の場合，zum Beispiel がないと，はっきり限定されてしまうんです。

田: 電車の中でだけ，ということになってしまうんですね。日本語では，「電車の中で」といっても，そこには，暗黙の内に「例えば」の意味は含まれているんですがね。

S: 日本語の場合は，ここに「例えば」を入れるのは，かえって不自然なのでしょうね。

▶ **学習テープを聴くために電車に乗るのではない**

S:「電車の中で語学学習テープを聴く」のところを，田中さんは，... in der Bahn mit Tonbandkassetten Fremdsprachen lernen. としましたね。

田: はい。シュレヒトさんは，日本語のとおり ... Kassetten zum Sprachenlernen hören ... になっています。私がこうしたのは，Man sieht nicht nur Leute ... と，この文を始めたためなんです。つまり，ここをシュレヒトさんのように日本文のとおりに訳しますと，hören を三回も使わなくてはならなくなるのです。それで，hören を一回避けるために，こうして lernen を使う文にしたのです。

S: なるほど。これでもちろんいいのですが，少し細かいことをいいますと，in der Bahn mit Tonbandkassetten Fremdsprachen

lernen としますと，語学の学習をするために電車に乗る，というようような感じがしないでもないのです。

田: いずれにせよ，先ほどもいいましたように，man sieht として，Leute を目的語にして関係文を続けたために，こういうことになってしまったわけです。

次の「カセットブック」ですが，これはドイツにもあるのでしょうか。その事情が分からなかったものですから，私は説明的な訳にしたのですが。

S: ドイツにもカセットブックは最近あることはあるのですが，あまり一般的ではないですね。Literatur auf Tonband という言い方を私は聞いた記憶がありますので，それを使いましたが，念のため引用符をつけておきました。田中さんの説明的な言い方ももちろん結構です。

それにラジオやテレビの音声に切り替えて，情報源としている人もあるらしい。

（田） Außerdem gibt es, wie man hört, auch Leute, die diese Recorder dazu benutzen, Informationen zu erhalten, indem sie sie auf Radio oder auf TV-Tonempfang umstellen.

（S） Man kann den *Walkman* — wie es heißt — auch als Nachrichtenquelle verwenden, indem man auf Rundfunk- oder TV-Tonempfang umschaltet.

▶ 一人の人がウォークマンをいろいろに使っている

田: ここでもまた私は，「…人もある（らしい)」という日本文をそのままに訳して，es gibt Leute を使っているわけですが，シュレヒトさんは man kann で，ウォークマンは「こういうふうに使うこ

とも出来る」という言い方で訳しているところが，大きな違いですね。

S: ここで言っているのは，ウォークマンの使い途についてと，人々が実際にウォークマンをどういうふうに使っているかの両方だと思いますが ……。

田: 私の場合は，前の文章が man sieht Leute ですので，それを受けて，außerdem gibt es auch Leute としたわけです。

S: そうですね。私がなぜこういう訳し方をしたかといいますと，außerdem gibt es auch Leute, die ... ですと，その人たちの使い方がそれに限定されてしまうのです。一人の人間もいろいろな使い方をしているわけで，ここではむしろ，ウォークマンの使い方のさまざまな可能性をいっていると解釈して，それを前面に出した表現にしたわけです。

田: 「情報源にしている云々」の個所は，シュレヒトさんの方が日本語のとおりですね。「ラジオやテレビの音声に切り替えて ...」は，全く同じ訳し方になっています。「音声」は，この場合もちろん「音声受信」，Tonempfang としなければならないことは当然ですね。

キャッシュカードやワープロと並んで，現代人の七つ道具になるかもしれない。

（田） Diese Kassettenrecorder dürften wohl mit der Cash-Karte und dem Word-Processor zu den Siebensachen des modernen Menschen werden.

（S） Der *Walkman* hat gute Chancen, zusammen mit der Kreditkarte und dem Computer zu den ‚Siebensachen' des modernen Menschen zu werden.

▶ キャッシュカード，ワープロはドイツ語では？

田: まず，キャッシュカードとワープロをドイツ語でどういえばいいかということですが，私は，キャッシュカードはよく耳にするドイツ語の Cash-Karte を使い——和独辞典にもこう出ていました——ワープロは英語をそのまま使いました。

S: ここでいっている「キャッシュカード」は，銀行でお金をおろしたり，あずけたりするときに使うカードのことでしょうから，そのドイツ語訳は Cash-Karte でいいのです。ですから，私の訳の Kreditkarte は違うかもしれません。Kreditkarte というのは，アメリカン・エクスプレスとか，ダイナース・クラブなどのカードのことですね。しかし，ドイツでは日本でいうキャッシュカードは日本ほど普及してないんです。ドイツでそれにあたるのは EURO-CARD ですが，これは Cash-Karte でもあり Kreditkarte でもあるんです。ですから，Cash-Karte といってもドイツ語としてはっきりしないんですね。ということで，ドイツ人には，「Kreditkarte が現代人の七つ道具になるでしょう」といったほうが分かりやすいので，敢えて Kreditkarte と訳したわけです。

ワープロですが，ドイツでは，いわゆるワープロ専用の器械は，Schreibautomat というのがあるにはありますが，あまり使われていません。タイプライターがありますからね。Word-Processor というと，ドイツでは，だいたいソフト・ウエアのことになります。ですからここでは，Computer か，PC (Personal Computer) とするのがいちばんいいのではないかと思います。

田: 「... なるかもしれない」は，私は，基本どうりといいましょうか，dürften wohl としましたが ......。

S: 私は，Der *Walkman* hat gute Chancen ... ですね。あるものの将来性についていうとき，よくこの etwas hat gute Chancen, ... zu werden という言い方をします。

▶ 前置詞 mit を使うときは親切に

田:「... と並んで」は，二人とも mit を使いましたが，シュレヒトさんは，その mit の前に zusammen を補っています。これはたしかにあった方がいいですね。

S: 文法的にいえば，必ずしも必要ではありませんが，mit という前置詞は——他の前置詞もそうですが——いろいろな用法があります。例えば，「... で」という道具，手段を表す mit があります。ここでは，mit der Kreditkarte ですから，「クレジットカードで」という，その意味にもとれるわけです。もちろん文章を最後まで読めば，ドイツ人はどの意味で使われているかは問題なく分かりますけれど，zusammen を付けておけば，読む人は，ここですぐこの mit が「... と並んで」の意味だと分かるわけです。いうなれば，zusammen があった方が親切だということです。

田:「七つ道具」ですが，これは，ドイツにも Siebensachen をいう表現があるんですね。日本では，盗人の七つ道具とか，弁慶の七つ道具とか，大名行列の七つ道具などかなり古くからこの言い方があるようですから，翻訳語ではないように思われますが，発祥はどこなのでしょうかねェ。


U-Bhf. Kurfürstendamm

課題 3　人生五十年

人生五十年，といわれた時代があった。村の渡しの船頭さんは，童謡によれば，「ことし六十のおじいさん」だった。いま，電車の中で，席をかわられたら恥ずかしがる六十歳が多いのではないだろうか。

scope 誌が，日本のお医者さん二千人あまりに質問している。「高齢者ということばからは，何歳くらいをイメージしますか」。いちばん多いこたえは「七十歳から」で，56.1%もある。「七十五歳から」は 19.3%，「八十歳以上」が 11.5%もあった。「六十歳から」というのは，2.0%にすぎない。

老年医学の専門家は，二十年前には，六十歳以上を老人とかんがえていたそうだ。たいへんな速度で長生きの社会になっている。

(田中)　Es gab einst eine Zeit, in der man sagte, die Lebenserwartung betrage nicht mehr als 50 Jahre. Der Führer des Fährbootes im Dorf war, nach einem Kinderlied, „ein alter Mann, der in diesem Jahr 60 Jahre alt wurde“. Die meisten Sechziger von heute werden sich wohl

(W. Schlecht)　Es gab eine Zeit, in der es hieß, die Lebensdauer eines Menschen betrage 50 Jahre. In einem Kinderlied etwa ist die Rede von dem Fährmann eines Dorfes als einem „alten Mann, der dieses Jahr 60 wurde“. Wie viele Sechzigjährige aber gibt es heute, die sich ge-

genieren, wenn man ihnen in der Bahn einen Platz anbietet.

Die Zeitschrift „SCOPE“ machte bei etwa 2000 japanischen Ärzten folgende Umfrage: „Welches Alter stellen Sie sich unter dem Begriff ‚Alte und Ältere‘ vor?“ Die Antwort „ab 70 Jahren“ war am häufigsten. Sie machte 56,1% der gesamten Antworten aus. Die Antwort „ab75“ wurde von 19,3% der Befragten gegeben, und 11,5 % der Ärzte gaben „über 80“ an. Die Antwort „ab 60“ machte nur 2,0% aus.

Vor 20 Jahren sollen die Fachleute der Gerontologie Menschen über 60 für alt gehalten haben. Es läßt sich sagen, daß wir uns sehr schnell einer Gesellschaft nähern, in der die Zahl der alten Leute einen hohen Prozentsatz einnehmen wird.

nieren, wenn ihnen im Zug ein Sitzplatz angeboten wird.

Die Zeitschrift SCOPE befragte 2000 Ärzte, welches Alter sie mit dem Begriff „alte bzw. ältere Menschen“ assoziierten. Die am häufigsten gegebene Antwort war mit 56,1% die Antwort „Menschen ab 70“, danach folgte mit 19,3% die Antwort „ab 75“und schließlich mit 11,5% die Antwort „ab 80“. Als „alt“ bezeichneten nur 2 % der befragten Ärzte einen Menschen, der das 60. Lebensjahr erreicht hatte.

Es heißt, daß noch vor 20 Jahren für die Gerontologen jemand alt war, der über 60 war. Dies zeigt: Wir bewegen uns mit schnellen Schritten auf eine Überalterungsgesellschaft zu.

人生五十年，といわれた時代があった。村の渡しの船頭さんは，童謡によれば，「ことし六十のおじいさん」だった。

(田) Es gab einst eine Zeit, in der man sagte, die Lebenserwartung betrage nicht mehr als 50 Jahre. Der Führer des Fährbootes im Dorf war, nach einem Kinderlied, „ein alter Mann, der in diesem Jahr 60 Jahre alt wurde".

(S) Es gab eine Zeit, in der es hieß, die Lebensdauer eines Menschen betrage 50 Jahre. In einem Kinderlied etwa ist die Rede von dem Fährmann eines Dorfes als einem „alten Mann, der dieses Jahr 60 wurde".

▶ es gab eine Zeit と es gab Zeiten

田: まずまた冠詞の問題ですが，ここの「時代」は，そう問題なくわれわれも eine Zeit と不定冠詞を使うということは分かります。いろいろな時代があるなかの或る一つの時代ということですから。

S: その通りです。ただ，ここでも，無冠詞の複数形 Zeiten を使うことも出来ます。つまり「時代」といっても，何年から何年までというように区分のはっきりしている歴史の年代ではなく，そういう「時期」があった，ということですから，Zeiten でもいいわけです。ですから，慣用句的に es gab Zeiten, in denen ... という言い方はよく使われます。

▶ man sagt と es heißt は同じではない

田: 次の man sagt は，私は機械的に使いましたが，これに代る es heißt も使えるようにならないといけませんね。

S: いや，これは必ずしも全く同じではないんです。es heißt には，「... とされている」という意味もあるんです。ですから，..., in der es hieß,... で「人生五十年とされた時代」という含みもあって，

少し意味が違うのです。

▶ 人生わずか五十年

田: 日本文は「人生五十年」ですから, die Lebenserwartung beträgt 50 Jahre で十分なんですが, 私が nicht mehr als を入れてしまったのは,「人生わずか五十年」という成句があるもんですから, うっかりそれで訳してしまったのです。それから, シュレヒトさんは「人生」を die Lebensdauer eines Menschen と eines Menschen をつけていますが, これは必要なのでしょうか。確かに, Lebensdauer は単に寿命というだけの意味ですから。

S: もちろん無くても意味はわかりますから, なくてもいいですが, まあ理屈を言えば ……。

田: 動物の寿命 ……。

S: 極端にいえばそうですが, そこまでいかなくても, 例えば die Lebensdauer (Lebenserwartung) eines Arbeiters とか, … eines in der Großstadt Lebenden などということも考えられるわけですから, はっきりさせたほうがいいかもしれません。

▶ 船頭さんは船長さんではない

田: 次の文はかなり違っていますね。まず「船頭さん」ですが, 私の der Führer des Fährbootes はちょっと大げさ過ぎますね。何人もの乗組員がいるわけではありませんから。せいぜい二人くらいでしょう。シュレヒトさんの Fährmann は思いつきませんでした。

S: Fährmann は童話などにもよく出てきます。雰囲気のある言葉です。

田: 私の訳は, 動詞は sein を使って, ほとんど日本文をそのままドイツ語に移したものです。

S: この nach einem Kinderlied はとてもいい訳し方だと思います。

▶ 童謡「村の渡しの船頭さん」の主役はだれ

田: シュレヒトさんは, es handelt sich um … と同じ意味の von

... die Rede sein を使っています。こういうのが，知っていて思いつかないんですね。

S：私が von ... die Rede sein を使ったのは，この童謡では，このおじいさんが主役ではないと推測したからです。この童謡のなかで，たまたまおじいさんに触れた個所があると考えて，von ... die Rede sein を使いました。

田：なるほど。因みに，はっきり覚えていませんが，たぶん船頭さんが主役だったと思います。

▶ 唐突さを和らげる etwa

田：それから，これはちょっとしたことなのですが，それ故にまた重要なんですが，われわれがなかなか使えないのが，in einem Kinderlied の後の etwa なんです。こうして読んでみると，あった方がいいということは分かるのですが，自分からは使えません。

S：なぜ etwa を入れたかといいますと，私の独文では，前文とのなんらの脈絡がなく唐突に「童謡」が出てきます。この etwa を入れることによってその唐突さが和らげられるのです。

田：それから einem „alten Mann, der ...“ の前の als も私にはなかなか使えない als です。次の，「ことし六十のおじいさん」なんですが，ここは，シュレヒトさんも私も同じで，関係文になっているわけですが，私ははじめ，簡単に ein sechzigjähriger alter Mann としてみたのですが，そうすると，「ことし」がどうしても入らないのです。童謡ですから，なるべく関係文にしたくなかったのですが，やはりこうする以外ないんでしょうね。

S：こうする他ないですね。まあここでは，引用符のなかに入れますからいいのですが，こういうこともいえないことはないんです。つまり，もし引用符がなければ，in diesem Jahr を入れないで，ein sechzigjähriger alter Mann だけでは，今，つまりこの小文が書かれた年に六十歳だったと解釈することも可能になるわけです。確かにおっしゃる通り，童謡ですから，関係文でないほうがいいのです

が ……。そこが，翻訳のつらいところですね。

> **いま，電車の中で，席をかわられたら恥ずかしがる六十歳が多いのではないだろうか。**
>
> (田) Die meisten Sechziger von heute werden sich wohl genieren, wenn man ihnen in der Bahn einen Platz anbietet.
>
> (S) Wie viele Sechzigjährige aber gibt es heute, die sich genieren, wenn ihnen im Zug ein Sitzplatz angeboten wird.

▶「... する人は多い」

田:「... する人は多い」という日本語の表現は，„Der Leute, die ..., sind viel.“ という主語を 2 格にした言い方がありますが，これは古い形で，今はまず使われませんね。ですから，だいたい私はいつも viele Leute ..., とか，es gibt viele Leute ... というような言い方でドイツ語にしていました。上の文章の場合も同様で，ただここでは，「大概の六十歳の人は」という意味ですから，die meisten Sechziger としましたが，シュレヒトさんの訳を拝見して，なるほどこういう方法もあるのだなあ，と感心しました。これは疑問文なんですか。

S: ええ ... これはまあいうなれば，修辞的疑問文というのでしょうか。当然 sehr viele という答えを予測しているわけです。日本文もそうですね。「多いのではないだろうか」といっても，「ええ，もちろん多いです」という答えを期待してます。

▶ 最近は感嘆符を付けない傾向がある

田: こだわるようですが，これは，感嘆文ともいえますか。

S: そうですね。それで，最近の傾向として，感嘆符を付けるこ

とを避けるようになりました。命令文でもそうです。感嘆符は軍国主義的な感じがするからです。例えば，Stehenbleiben! とか Halt! といったような場合にはつけますが，Bitte, kommen Sie morgen um fünf Uhr. などには，感嘆符をつけないことが多くなってきています。

田:「六十歳」を私は，「六十歳台」と広い範囲に解釈して Sechziger を使いました。シュレヒトさんは，そのまま Sechzigjährige としています。続く wenn- 文章ですが，シュレヒトさんは受動文に，私は能動文になっていますが……。

S: どちらでももちろんいいのですが，受動文のほうが，この場合，論理的といえるかもしれません。ついでにいえば，Platz でも Sitzplatz でもどちらでもいいです。

Bahn と Zug は，Bahn といえば，例えば東京でしたら，山の手線とか地下鉄などのことで，Zug は列車ですね。この場合は，Bahn の方がいいでしょう。

SCOPE誌が，日本のお医者さん二千人あまりに質問している。「高齢者ということばからは，何歳くらいをイメージしますか」。

(田) Die Zeitschrift „SCOPE“ machte bei etwa 2000 japanischen Ärzten folgende Umfrage: „Welches Alter stellen Sie sich unter dem Begriff ‚Alte und Ältere‘ vor?“

(S) Die Zeitschrift SCOPE befragte 2000 Ärzte, welches Alter sie mit dem Begriff „alte bzw. ältere Menschen“ assoziierten.

▶ eine Umfrage machen と befragen

田: ここで「質問する」といっているのは，アンケートのことで

すから，私は bei jm. eine Umfrage machen を使ったのですが，シュレヒトさんは befragen にしています。befragen にもそういった意味があるのですか。ほとんど fragen と同じ意味だと私は思っていました。befragen には，たしかに訊問するとか，照会するとかいう意味もあるようですが。

S: befragen もアンケートするという意味があります。eine Umfrage machen と全く同じなんですが，ただ eine Umfrage machen ですと，「アンケートをとる」という行為を表現するだけですから，それで文章は完結してしまうのです。„Was hat die Zeitschrift gemacht?“ — „Sie hat eine Umfrage gemacht.“ といった具合です。ですから，その内容が続かないのです。befragen を使うと副文章をそれに続けてその内容を説明することができます。田中さんは，folgende Umfrage として「：」で続けていますので，そういった意味で旨く処理しています。

田: 「イメージしますか」は，シュレヒトさんは assoziieren を使い，私は sich vorstellen を使いましたが，これは，いろいろ言い方があるでしょうね。

S: そうですね。例えば，私の文章に続けるとすれば，

... wie viele Jahre für sie ein als ‚alt‘ bezeichneter Mensch sei.

... ab welchem Alter jemand für sie ‚alt‘ sei.

などが考えられます。

▶「高齢者」ということばはドイツ語にはない

田: 「高齢者」は適切なドイツ語が思い浮かばなくて困りました。偶然同じようなドイツ語になっていますが。

S: 私も困りました。日本語では「高齢者」という概念があるんですが，ドイツ語には，それに当たる言葉はないのではないかと思います。ですから，この言い方でいいと思いますが，私が und にしないで beziehungsweise にしたのは，und にしますと，その区別がはっきりし過ぎると思ったからです。bzw. だと柔軟性があります。

田: これは，正書法のことですが，シュレヒトさんは，雑誌名に引用符をつけていません。これが一般的なのでしょうか。

S: いろいろな可能性があります。例えば，引用符，あるいは，アポストローフ（, ... ‘）といったものをつけたりすることも出来ますが，見にくいというか，ごちゃごちゃしますので，大文字で書くとか，イタリックとかボールドにすれば，分かります。最近の傾向としては，引用符なしが多いように思います。

いちばん多いこたえは「七十歳から」で，56.1%もある。「七十五歳から」は19.3%，「八十歳以上」が11.5%もあった。「六十歳から」というのは，2.0%にすぎない。

（田） Die Antwort „ab 70 Jahren“ war am häufigsten. Sie machte 56,1% der gesamten Antworten aus. Die Antwort „ab 75“ wurde von 19,3% der Befragten gegeben, und 11,5% der Ärzte gaben „über 80“ an. Die Antwort „ab 60“ machte nur 2,0% aus.

（S） Die am häufigsten gegebene Antwort war mit 56,1% die Antwort „Menschen ab 70“, danach folgte mit 19,3% die Antwort „ab 75“ und schließlich mit 11,5% die Antwort „ab 80“. Als „alt“ bezeichneten nur 2% der befragten Ärzte einen Menschen, der das 60. Lebensjahr erreicht hatte.

田: これはかなり苦労しました。何々は何パーセント，何々は何パーセントという羅列ですね。同じ言い方は避けたいと思ったものですから，その動詞の選択に困りました。シュレヒトさんもやはり全部表現を変えていますね。

S：はい。それは当然変えたほうがいいですね。

▶ die Antwort に betragen は使えない

田：数字を表すときは betragen という動詞をよく使いますが，die Antwort には betragen はおかしいですね。

S：そうですね。Antwort は数値や量を示す概念ではありませんから。田中さんの使った ausmachen はいいですよ。それから，受動を用いての geben も，医者を主語にした angeben も結構です。

田：シュレヒトさんは，mit という前置詞を使ったために，とても文章がすっきりしましたね。最初の文ですが，二度目の die Antwort，つまり，... mit 56.1% die Antwort ... は必要なのでしょうか。

S：いえ，これは省略できます。私も入れようか入れまいか考えたのですが，この方が分かりやすいということで，入れたわけですから。

田：その後の Menschen ab 70 の Menschen もどうでしょう。省略できますか。

S：ええーと，そうですね。これもなくてもいいですね。もちろん，あってもいいわけです。

▶「こたえ」は「多く」ない

田：「いちばん多いこたえ」ですが，われわれはうっかりすると，「多い」は viel ですから，その最上級の meist を使ってしまいがちですが，ここでは，ドイツ語は häufig でなくてはならないんですね。

S：はい。Die Antwort ist ... am meisten. は不可能です。先ほどもいったように，die Antwort は数値，数量概念ではありませんから。

田：シュレヒトさんは，動詞はまず sein を使って，その後に三つの答えを並べたわけですが，二つ目の答えを挙げる前に danach folgt(e) を置き，次に schließlich を入れて三つ目の答えを挙げる

といった具合に，三つを列挙していますね。

S：そうですね。それらは日本文にはないのですが，一般の人は数字に慣れてないので，順序をはっきりさせて，理解しやすくしてみたのです。

田：そうしておいて，最後に，「2.0%にすぎない」というところで，bezeichnen という動詞を使って締め括っているわけですね。

S：はい，そしてその最後の文を，Als „alt“ ... を文頭に置いて始めたのも意図的なんです。つまり，このアンケートは，一言でいってしまえば Wer ist alt? ということがテーマで，また全文は，六十歳という年齢が問題ですので，「六十歳を年寄りと考えている人」は僅かであるという興味深い結論を強調したほうが，効果的に文章を締め括れると思ったからです。

田：日本文もそういう感じで終わっています。

▶ 日本語の「... も」

田：それから，これは，シュレヒトさんの訳でも私のでもそうなのですが，最初の「七十歳から」のパーセントを紹介したところの，「56.1%もある」の「も」，それから，「八十歳以上」のところの「11.5%もあった」の「も」が訳出されていませんね ...

S：こういった「も」はよく日本語に出てくるのですが，必ずしも訳さなくてもいい場合が多いんです。ここでも数字を示すことで，十分解るわけです。場合によっては，immerhin とか，ganz などで言い表すことが出来ますが。

田：たしかにそうですが，この「も」は，強調といいましょうか，「なんとまあ」といった驚きの意味があるので，訳せたら訳したほうがいいと思いますが ...

S：その意味では，sage und schreibe という言い方があります。例えば「かれは私を一時間も待たせた」というとき，Er hat mich sage und schreibe eine Stunde warten lassen. といいます。

田：あっ，そういうイディオームがありましたね。まさに，ここ

でいう「… も」です。

S: 私の訳では，danach folgt(e) と schließlich とで多少この「… も」のニュアンスは出ていると思います。

老年医学の専門家は，二十年前には，六十歳以上を老人とかんがえていたそうだ。たいへんな速度で長生きの社会になっている。

（田） Vor 20 Jahren sollen die Fachleute der Gerontologie Menschen über 60 für alt gehalten haben. Es läßt sich sagen, daß wir uns sehr schnell einer Gesellschaft nähern, in der die Zahl der alten Leute einen hohen Prozentsatz einnehmen wird.

（S） Es heißt, daß noch vor 20 Jahren für die Gerontologen jemand alt war, der über 60 war. Dies zeigt: Wir bewegen uns mit schnellen Schritten auf eine Überalterungsgesellschaft zu.

▶「… だそうだ」の sollen

田: まず，「かんがえていたそうだ」の「そうだ」ですが，私は，いわゆる「噂の sollen」を使いましたが，シュレヒトさんは es heißt で訳しています。

S: sollen にはたしかにそういう意味があって，もちろんこれでいいのですが，私が sollen を使わなかったのは，sollen だと，その主張に対して話者は距離を置いていることになるのです。つまり，その主張になにがしかの不信感を持っている感じになります。この場合，筆者は，不信感を持っているわけではないですから，es heißt を私は使いました。あるいは，man sagt とか，wie man hört がい

いと思います。

田: 「老年医学の専門家」を私はその通りに訳しましたが，これは Gerontologe で十分ですね。

S: 一語ですむものは，なるべく一語ですませたほうがいいですね。

▶「... をと思う，と考える」の et. für et. halten

S: それから田中さんの使った「... と思う，... と考える」の et. für et. halten ですが，これはあまり確信がないときに用いることが多いのです。つまり，meiner Meinung nach ということで，主観的なんです。先ほどの sollen の場合と似ていて，あいまいなのです。ここでは，in den Augen der Gerontologen という意味ですから，適切な言い方ではありません。間違いとはいえませんが。

▶「二十年前には」の noch

S: それから，細かいことですけれど，私は——原文にはないんですが——vor 20 Jahren の前に noch を入れました。というのは，noch を入れることによってそれほど昔ではない，という気持ちが出るわけです。

田: そのニュアンスは原文でも読み取ることが出来ます。「二十年前に」ではなくて，「二十年前には」となっていますからね。そして，これも原文にはないのですが，二人共，次にシュレヒトさんは Dies zeigt: を，私は Es läßt sich sagen, ... を入れています。これがないと，ドイツ文の場合は繋がらないんですね。

S: ええ，流れないんです。

田: 日本文では，結論をこのように前文とちょっと距離をおいた言い方にした方が，締まった感じがして落ち着くのです。

最後の「長生きの社会」ですが，これはそういう一語での言い方がドイツ語にあるかどうか分からなかったし，こういう場合は説明的のほうがいいと思いましたので，こんなふうにしてみました。

S: これでいいと思います。私の使った Überalterungsgesell-

schaft がまさに「高齢化社会」のことです。

田: そして，シュレヒトさんのこの文の動詞は sich bewegen ですね。文末の zu は，Überalterungsgesellschaft の前の auf と結びついた，「何々の方へ向かって」の意味の auf ... zu の zu ですね。

S: そうです，そうです。分離前綴りの zu ではありません。

課題 4　ただの六畳じゃダメ

「ただの六畳じゃダメ。バス，トイレ付きでなければ」。アパート，マンション情報の発達につれ，学生さんの借間探しにも大きな変化が出てきた。新入生の下宿探しがピークを過ぎた今も，各大学の学生課や学徒援護会が衣替えした内外学生センターには，住み手の希望のない部屋がまだまだ数多く残っている。かつて学生下宿の主流だった「四畳半」はもちろん，六畳でもバスがなくて，トイレが共同となると人気薄。

地価高騰に伴う相続税対策や，低金利対策という家主側の事情もあって，新しい好みに合わせた学生向けアパートの建て替えラッシュが続いている。　（朝日新聞，1990 年 3 月 28 日）

（田中）,,Ein einfaches Sechs-Tatami-Zimmer geht nicht. Es muß mit Bad und Toilette versehen sein.“ In bezug auf die Zimmersuche der Studenten ist bei dem Überangebot an Informationen über Zimmer und Wohnungen inzwischen eine große Veränderung eingetreten. Auf den Listen im Studentenwerk jeder Universität und auch auf

(W. Schlecht) „Ein Sechs-Matten-Zimmer allein tut es nicht. Es muß schon Bad und Toilette haben.“ Diese Aussage reflektiert deutlich den Wandel, der sich mit der immer größer werdenden Informationsflut auf dem Wohnungsmarkt auch bei der Zimmersuche von Studenten vollzogen hat. Auch jetzt, nach Überschreiten des Höhe-

den Listen im ‚Naigai-Studentenzentrum'— aus dem früheren ‚Studentenhilfswerk' unterdiesemNamen neu organisiert— sind auch jetzt noch, nachdem der Höhepunkt bei der Zimmersuche der neuen Studenten bereits vorbei ist, viele Zimmer übrig, die keine Mieter finden. Selbst ein Sechs-Tatami-Zimmer, wenn es kein Bad hat und die Toilette von allen Mietern gemeinsam benutzt wird, ist bei Studenten wenig beliebt, geschweige denn ein einfaches Viereinhalb-Tatami-Zimmer, das einst als Zimmer für Studenten üblich war.

Der Umbauboom von Wohnungen, die den neuen Wohnwünschen der Studenten angepaßt sein sollen, dauert immer noch an. Diese Entwicklung aber resultiert auch aus der finanziellen Situation der Hausbesitzer, die sich veranlaßt sehen, bei den immerhöher gestiegenen Bodenpunkts bei der Zimmersuche von Erstsemestern, verfügen die Studentenbüros an den Universitäten und das aus der Student's Assistance Association hervorgegangene Naigai-Studentenzentrum noch immer über zahlreiche Zimmer in ihrem Angebot, die niemand haben will. Viereinhalb-Matten-Zimmer, früher die typische Studentenbude, sind längst aus dem Rennen ausgeschieden, und auch Sechs-Matten-Zimmer ohne Bad bzw. mit Gemeinschaftstoilette verlieren mehr und mehr an Beliebtheit.

Der Bauboom auf seiten der Hauseigentümer, Wohnungen für Studenten zu bauen, die diesem neuen Geschmack Rechnung tragen, hält weiterhin an. Unterstützt wird diese Entwicklung weiterhin durch erbschaftssteuerliche Gegenmaßnahmen angesichts der stark gestiegenen

preisen und den niedrigen Zinsen Maßnahmen gegen die Erbschaftssteuer zu treffen.

Bodenpreise und niedrigen Zinsen.

「ただの六畳じゃダメ。バス，トイレ付きでなければ」。アパート，マンション情報の発達につれ，学生さんの借間探しにも大きな変化が出てきた。

（田） „Ein einfaches Sechs-Tatami-Zimmer geht nicht. Es muß mit Bad und Toilette versehen sein.“ In bezug auf die Zimmersuche der Studenten ist bei dem Überangebot an Informationen über Zimmer und Wohnungen inzwischen eine große Veränderung eingetreten.

（S） „Ein Sechs-Matten-Zimmer allein tut es nicht. Es muß schon Bad und Toilette haben.“ Diese Aussage reflektiert deutlich den Wandel, der sich mit der immer größer werdenden Informationsflut auf dem Wohnungsmarkt auch bei der Zimmersuche von Studenten vollzogen hat.

▶「... はダメ」

田:「... はダメ」というのは，この場合 es geht nicht でいいかどうか，だいぶ考えたのですが，ほかに思い浮かばなかったので，これにしました。やはりシュレヒトさんは es geht nicht を使っていませんね。

S:「... は駄目だ」というとき，確かに das geht nicht といいますが，das geht nicht は，「そういうわけにはいかない，そういう可能性はない，そういうことは出来ない」という意味なんです。例えば，„Kann ich mit diesem Zug auch über Würzburg fahren?“ — „Nein, das geht nicht.“ という具合です。つまり，das ist nicht möglich. で，「それは出来ない，可能ではない」ということですね。しかし，ここでいっているのは，それでは十分ではない，物足りない，ということですから，... tut es nicht がそれに当たるのです。

ただ，この etwas tut es nicht は，やや俗調です。

田: 学生のいっている言葉をそのまま鉤括弧の中に入れたようになっているここでは，むしろ俗調のほうが合っているといえますね。

▶ 最近ドイツではジャポニズムが流行

田:「六畳」を私は Sechs-Tatami-Zimmer としましたけれど，Tatami は，日本のことを知っているドイツ人なら分かりますが，日本を知らないドイツ人を念頭におくべきですから，やはり Matten とした方がいいでしょうね。

S: いや，Tatami はいまドイツでもかなり一般的に理解されています。最近ドイツでも日本ブームで，ケルンやボンなどでは，畳を扱っているお店があるくらいですから。

田: そうですか。次の「バス，トイレ付き ...」は，私は mit etwas versehen sein を使いましたが，シュレヒトさんは，簡単に haben ですませています。

S: 前の文がやや俗調ですから，それに合わせて簡単な言い方にしたのです。

▶ 助勢詞 schon の効用

S: そして，schon を入れました。この schon も俗調ですが，助勢詞として，それなりの意味を持っているのです。「やっぱり」「... くらいは」という気持ちがこれで出るのです。そして，この schon があると，前の文と旨く対応するわけです。

田: この種の助勢詞はわれわれにとって，いちばん難しいんです。この schon を私の Es muß mit ... versehen sein. の中に入れてもいいでしょうか。

S: うーん，ちょっと合わないんですね。Sprachebene が違うんです。

▶「アパート」「マンション」はドイツ語では？

田: なるほど。次の「アパート，マンション情報の発達につれ ...」ですが，まず，「アパート」「マンション」をどう訳すか大いに悩み

ました。これに相当するものがドイツにはありませんからね。最新版の和独辞典を引いても，アパートは Mehrfamilienwohnung で，マンションは Etagenhaus, Eigentumswohnung で，ちょっと違いますね。さんざん考えたすえ，アパートは Zimmer，マンションは Wohnung にしました。

S: その訳がいちばん適切だと思います。

田: シュレヒトさんは，その「アパート」「マンション」を訳さないで，Wohnungsmarkt を使って旨く処理されましたね。

▶ 情報は発達するか

田: それから，「情報の発達につれ」もかなり悩みました。日本語ではごく一般的な言い方ですが，ドイツ語では Information が sich entwickeln というのはおかしいですね。情報の手段は発達しますが，情報そのものは発達しませんから。

S: 日本語では，なぜ「情報が発達する」といえるのでしょうか。

田: 日本語の場合，一つの単語が包含する意味の範囲が広いのと，臨機応変ということがあるのだと思います。ですから「情報」といっても，情報手段といったものまで含んで理解されるのです。そこで，これも大いに考えたすえ，「情報の過剰な供給」という言い方にしました。シュレヒトさんもやはり同じように，表現は違いますが，「情報の洪水」というドイツ語にしています。

▶ 脈絡をはっきりさせる「橋渡し」を

田: 文の組みたて方ですが，シュレヒトさんの訳を見て，印象的だったのは，Diese Aussage ... でこの文を始めたことです。つまり，「„ただの六畳じゃダメ。バス，トイレ付きでなければ“ という近頃の学生の声は」という具合に，前文との「橋渡し」を作って文を始めていることです。

S: 私たちドイツ人は，小学校の頃から，常に脈絡を保った作文をするように訓練されるのです。このテキストは，「ただの六畳じゃダメ，バス，トイレ付きでなければ」という最近の学生の声をまず

一種の Schlagwort のように挙げておいて，それから最近の学生の下宿の傾向についての本題に入っていくという手法ですが，ドイツ文にすると，やや唐突の感じがするんですね。

田：私も昔，ミュンヘンのゲーテ・インスティトゥートの師範科で勉強していたとき，作文の時間に，この「橋渡し」„Brücke“ということをよくいわれたんです。最近そのことを，日本の若い独文学者が書いたドイツ語の文章を添削するたびに思い出すのですが，彼等は必要以上に関係代名詞や，従属接続詞を使った副文章を使うのです。そのために，却って脈絡がはっきりしないんですね。むしろ，短い主文章を続けるようにして，それらを脈絡をはっきりさせる「橋渡し」を付けて結んでいくほうが，論旨も明快になりますし，めりはりがついて，文も流れます。

▶ 時間的経過を表す mit

S：そのとうりですね。「発達につれ」ですが，田中さんは bei dem Überangebot と，bei という前置詞を選びましたが，私は mit ... der Informationsflut と mit にしました。mit のほうが時間的経過が表現されるのです。bei は，結果ですから。

田：そしてシュレヒトさんは，更に，（mit）der immer größer werdenden (Informationsflut) という冠飾句を入れましたから，日本語の「発達につれ」の「つれ」がはっきりと訳出されていますね。「変化」をシュレヒトさんは Wandel としました。これは，日本語の訳語が「変遷」となっていますので，われわれは，ちょっと使いにくい単語なんですが，割合よく使いますね。もっと一般的に「変化，移りかわり」という意味に考えていいのですね。

S：そうですね。たとえば，「流行」などによく使います。そして，Wandel には sich vollziehen という動詞がよく結びつきます。

新入生の下宿探しがピークを過ぎた今も，各大学の学生課

や学徒援護会が衣替えした内外学生センターには，住み手の希望のない部屋がまだまだ数多く残っている。

(田) Auf den Listen im Studentenwerk jeder Universität und auch auf den Listen im ‚Naigai-Studentenzentrum' — aus dem früheren ‚Studentenhilfswerk' unter diesem Namen neu organisiert — sind auch jetzt noch, nachdem der Höhepunkt bei der Zimmersuche der neuen Studenten bereits vorbei ist, viele Zimmer übrig, die keine Mieter finden.

(S) Auch jetzt, nach Überschreiten des Höhepunkts bei der Zimmersuche von Erstsemestern, verfügen die Studentenbüros an den Universitäten und das aus der Student's Assistance Association hervorgegangene Naigai-Studentenzentrum noch immer über zahlreiche Zimmer in ihrem Angebot, die niemand haben will.

田: ここの訳もかなり苦労しました。

S: いろんな問題がありますね。

田: まず，単語ですが，学生課はともかくとして，学徒援護会，内外学生センター，それから新入生。それから，これはもちろんそのまま訳せないことは分かっていますが，「衣替えした」をどう訳すか。つまり，この「衣替えした」というのは，実際どういうことだったのかはっきりしないので，どう言い換えたらいいのか分からないのです。そんなところが，問題でした。

学徒援護会は，和独辞典に出ていましたので，それを使いました。内外学生センターは，始め，「内外」をドイツ語にしようかと思ったのですが，固有名詞と考えて，そのまま，Naigai- としました。

▶ **団体，会社等の正式欧文名は確認したほうがいい**

S：こういう呼称は，多くの場合，正式に登録されている欧文名がありますから，なんらかの方法で調べることが出来ます。私も翻訳の仕事をしていて，こういった名称が出てきたときは，電話をかけるなり，しかるべき本で調べるなりして，出来るだけ正式の欧文名を確認することにしています。

▶ **大学の「新一年生」は Studienanfänger**

田:「新入生」は，和独辞典には，ein neuer Schüler，大学の新入生は，der Erstimmatrikulierte と出ていましたが，日本には，immatrikulieren という制度がありませんから，neue Studenten としてみました。シュレヒトさんの訳は Erstsemester ですが，これが一般的ですか。

S：Erstsemester はやや俗調です。正式には，Studienanfänger といいます。neue Studenten でも分からないことはありませんが，neue Studenten 必ずしも「新一年生」とは限らないわけです。

田：なるほど。さて，文章についてですが，「学生課 ... には ... 部屋が残っている」は，このまま訳しますと，学生課に部屋があることになってしまいますから，なんとか別の言い方にしなくてはなりません。そこで私は，auf den Listen ... sind viele Zimmer übrig としました。ですがシュレヒトさんは，学生課を主語にして verfügen über を使ったので，余計な auf den Listen など入れないですんでいます。

S：この場合 verfügen über がいちばんいいでしょうね。

田:「学徒援護会が衣替えした」も私はずいぶん考えました。シュレヒトさんは，至極あっさり aus ... hervorgehen を使って，その過去分詞を基礎にした冠飾句で処理していますが，やはり私は，日本人として，「衣替え」という日本語のニュアンスに拘ってしまうのです。拘った結果，aus dem früheren ‚Studentenhilfswerk‘ unter diesem Namen neu organisiert という挿入句になったわけです。

拘り甲斐があったかどうか分かりませんが。翻訳でなかったら，おそらく私もシュレヒトさんのようにしたと思います。

S: 私から言えば，そこまで説明的にならなくても，という感じがします。そして，これは関係文にしてもいいですね。学徒援護会を，私は Student's Assistance Association と英語にしましたが，これは，さっきいいましたように，正式な欧文名で，調べたんです。

それから，verfügen über には「残っている」の意味はありませんから，noch immer を入れて，これで「まだまだ …」もいっしょに表現しました。そして，verfügen über zahlreiche Zimmer だけでももちろんいいのですが，in ihrem Angebot を更に付け加えました。この in ihrem Angebot は，田中さんの auf den Listen に当るわけですが，auf den Listen とすると，あまりに具体的過ぎるのです。はたしてリストの形なのか，コンピュータのデータベースとしてなのか分かりませんから，ごく一般的な言い方にしたわけです。

▶ 日本語の「各 …」は必ずしも jeder ではない

S: 田中さんの文で，ちょっと気がついたことなんですが，「各大学の学生課」のところで田中さんは，im Studentenwerk jeder Universität と訳しています。「各」大学のということで，… jeder Universität とされたのだと思います。jeder ですから，Universität が単数になるのは当然ですが，この場合の単数はあまり感心出来ません。… der Universitäten がよいのです。「それぞれの大学」ということをどうしても言いたいのなら … der einzelnen Universitäten で，どうしても複数形がほしいんです。

私の印象では，日本語の「各」は，必ずしも「各」でなければならない意味はないように思うんです。ですから，「各」即 jeder としないほうがいいと思います。日本語の「各」は，むしろ単に複数形にするか，あるいは，… der jeweiligen (od. einzelnen) ＋複数形としたほうがいい場合が多いというのが，私の経験から出た結論です。

田: それは，たいへん面白い指摘ですね。

S: 細かいことをいいますと，auf den Listen が具体的すぎるといいましたが，その具体的な表現が，田中さんの文では，念の入ったことに二度出て来るのですね。すごく強調された印象を与えてしまいます。

田: しかし，ここでは，文の組み立てからいって，もう一度言わないわけにはいかないのです。und auch auf denen とすれば，多少反復の感じは避けられるかな ......。

S: そうですね。それから，der Höhepunkt ist vorbei という言い方は，これでももちろんいいのですが，der Höhepunkt ist überschritten が，まあいちばん一般的な言い方です。私の場合は überschreiten を名詞に使っていますが。

かつて学生下宿の主流だった「四畳半」はもちろん，六畳でもバスがなくて，トイレが共同となると，人気薄。

(田) Selbst ein Sechs-Tatami-Zimmer, wenn es kein Bad hat, und die Toilette von allen Mietern gemeinsam benutzt wird, ist bei Studenten wenig beliebt, geschweige denn ein einfaches Viereinhalb-Tatami-Zimmer, das einst als Zimmer für Studenten üblich war.

(S) Viereinhalb-Matten-Zimmer, früher die typische Studentenbude, sind längst aus dem Rennen ausgeschieden, und auch Sechs-Matten-Zimmer ohne Bad bzw. mit Gemeinschaftstoilette verlieren mehr und mehr an Beliebtheit.

S: 「四畳半」，「六畳」のドイツ語での言い方の違いについては，すでに話し合いました。

田: はい。ここでの，二人の訳の大きな違いは，「かっての学生下宿の主流だった四畳半はもちろん」のところです。私は，「… は言うに及ばず」という geschweige denn を使って，その部分を最後にもってきました。シュレヒトさんは，「四畳半」については aus dem Rennen ausgeschieden sein を使って，「もう対象になっていない」といい切って，「六畳」もバスがなくてトイレが共同のものは，人気がなくなってきている，という訳になっています。私は，このシュレヒトさんの訳には，ちょっと納得出来ないのです。

S: 田中さんのいわれることはよく分かるのですが，私は，少し劇的に，といいましょうか，「四畳半」と「六畳」との差を強調してみたのです。

田: 日本語の文は，「四畳半」はもちろん人気薄，「六畳」もこうこうだと人気薄，という具合に，両方とも「人気薄」ということをいっているので，シュレヒトさんの訳は，少し意訳過ぎるのではないかと思うのです。そして，その「人気薄」のところも，「ますます人気がなくなっている」と，過程として訳していますが，日本文は，「人気薄」である，という状態を表す言い方になっているのです。

▶ **翻訳とは**

S: 結局，翻訳とは，という問題になるのですが，翻訳というのは，単に文字ずらだけを忠実に移せばよいということではないと思います。翻訳者の勝手な解釈はもちろん許されるべきではありませんが，原著者がいいたいことは何なのかを汲み取って，その真意が，その翻訳を読む側に最も的確に伝わるように，言語体系や文化の相違も考慮しながら，訳すべきだと思います。この個所も，田中さんの geschweige denn を使った訳は，原文に添ったよい訳だと思います。ただこの訳だと私には，あまりに単純というか，平板な感じがするのです。それで，先ほどもいいましたように，多少誇張して，起伏のある文にしてみたわけです。その方が，ドイツ人にはその状況がより明確に伝わるのです。

田: いま思ったのですが，われわれがここでやっている翻訳は，日本語からドイツ語への翻訳です。シュレヒトさんは Zielsprache (目標言語) のネイティブ・スピーカーで，私は Ausgangssprache (起点言語) のネイティブ・スピーカーです。この立場の違いが，自ずと，この翻訳に対する姿勢に現れてくるのではないか，と思ったわけです。目標言語のネイティブ・スピーカーであるシュレヒトさんは，目標言語に比重がかかり，私は，起点言語にどうしても拘泥してしまうのです。立場をかえてといいましょうか，もしわれわれ二人が，ドイツ語のテキストをこのようなやり方で，それぞれ日本語に訳したとしたら，恐らくシュレヒトさんの日本語訳は，起点言語のドイツ語に忠実な訳になり，私のそれは自由な，ドイツ語にあまり囚われない達意な訳になるのではないでしょうか。

S: 一般論としてはおっしゃる通りだと思いますが，ドイツ文学等の日本語訳を見るかぎり，実際には必ずしもそういえないような気が私はします。といいますのは，それらは，あまりにドイツ語法に忠実で，日本語を犠牲にしているからです。私は，そういった翻訳物を読んで，日本人の寛容なことに驚くと同時に，日本語の寛容さに驚嘆しているんです。

田: 確かにそれはいえるかも知れませんね。翻訳論については，またの機会に譲るとして，本題に戻りましょう。

▶「共同トイレ」は Gemeinschaftstoilette

田: 私は共同トイレを，ドイツ語で Gemeinschaftstoilette ということを知らなかったので，文章で説明しました。それから，「かつて学生下宿の主流であった ...」を üblich を使って関係文にしました。

S: 私は文章にしないで，簡潔に früher die typische Studentenbude として，「四畳半」と同格にしました。

田: 「主流」を typisch で表現されたわけですが，的確だと思います。üblich は「通例」ということですから，「主流」の訳としては弱

いかも知れません。Studentenbude は感じがよく出ていますね。

S: またここでも，「四畳半」を単数にするか，複数にするか，という問題がありますが——私は複数にしましたが——この場合は，どちらでなければならないということはないと思います。

地価の高騰に伴う相続税対策や，低金利対策という家主側の事情もあって，新しい好みにあわせた学生向けアパートの建て替えラッシュが続いている。

(田) Der Umbauboom von Wohnungen, die den neuen Wohnwünschen der Studenten angepaßt sein sollen, dauert immer noch an. Diese Entwicklung aber resultiert auch aus der finanziellen Situation der Hausbesitzer, die sich veranlaßt sehen, bei den immer höher gestiegenen Bodenpreisen und den niedrigen Zinsen Maßnahmen gegen die Erbschaftssteuer zu treffen.

(S) Der Bauboom auf seiten der Hauseigentümer, Wohnungen für Studenten zu bauen, die diesem neuen Geschmack Rechnung tragen, hält weiterhin an. Unterstützt wird diese Entwicklung weiterhin durch erbschaftssteuerliche Gegenmaßnahmen angesichts der stark gestiegenen Bodenpreise und niedrigen Zinsen.

田: この訳は私も苦労しましたが，シュレヒトさんも私とは別の意味で，苦労なさったように伺っていますが。

S: はい。「家主側の事情もあって」のところが，ちょっとはっきりしなかったんです。

田: 確かに，分かりにくいかもしれませんね。結局，最近の学生

の好みに合わせたアパートの建て替えラッシュが続いているが，その建て替えの要因には，もう一つ，家主側の別の事情も加わって，拍車をかけている，ということなんですね。ということで，ドイツ語にするときは，後半の部分を前にもってくる方がいいでしょうね。

S：そうですね。そして，二つの文章に分けた方がよいです。

田：その点では，二人のやり方は同じです。さて，前半の文ですが，「建て替えラッシュが続いている」という枠組みは，私のは Der Umbauboom, ... , dauert immer noch an. で，シュレヒトさんは Der Bauboom, ..., hält weiterhin an. ということで，比較検討するほどの問題はないと思います。

▶ **Umbau は「改築」か**

S：そうですね。ただ，「建て替え」ですが，田中さんは，Umbau にしましたね。Umbau は，部分的なんですが，日本語の「建て替え」は全部建て直すことですか。

田：そうですね。建て直すことです。

S：そうすると，Bau ですね。

田：ああそうですか。Umbau を独和で引きますと，「改築」と出ているんですが，「改築」というのは，えぇーと，どういうことなんですかね。ちょっと待ってください，広辞苑をひいてみますから。改築とは，「建物の全部または一部を建てかえること」と出ています。ということは，Umbau を「改築」とするのは，正しくもあり，正しくもない，ということになりますね。

S：ドイツでは，Umbau はよく行なわれます。家そのものはそのままで，内部を直すということはよくやるんです。私の両親が今住んでいる家は，1460 年代に建てられたものですが，外観や基礎はほぼそのままですが，内部は Umbau を何回もやっています。

田：シュレヒトさんのこの文には，Der Bauboom の後に，「家主側の」という意味の auf seiten der Hauseigentümer が入ってます。これはむしろ，後半の文に入れた方がいいのではないでしょうか。

S：本当はそうですね。なぜここに入れたかというと，誰が Bauboom を起こす契機をつくったかということをここではっきりさせようと思ったからなんですが，確かにそうですね。まあ，結局同じことになるわけですが。

田:「新しい好みに合わせた ...」を，..., die diesem neuen Geschmack Rechnung tragen と訳されていますが，こういう言い方は全く知りませんでした。

S：ちょっと難しい言い方ですね。einer Sache Rechnung tragen というのは，「対応する」ということですが，正しい対応をする，つまり，外界の変化に適応するという意味なんです。einer Sache gerecht werden ともいいます。

田: 後半の文は，単語の使い方は違いますが，基本的にはだいたい同じような組み立てになっていますね。

S：そうですね。出だしの部分を田中さんは，Diese Entwicklung resultiert aus ... としましたが，私は Unterstützt wird diese Entwicklung durch ... としたところが，まあ大きな違いというところでしょうね。unterstützt wird ... というのは，以下のことも大きな原因である，という意味です。この unterstützen は，zu et. beitragen（一役かっている）と同義の unterstützen です。

いずれにしても，難しい文章で，お互いに苦心しましたが，表現方法は違っても，内容はそれぞれきちんと正確に言い表わしていると思います。今回は，翻訳ということについても話題になりましたが，この問題については，またいずれ話し合わなければならない機会があるでしょう。

課題 5　隅田川のほとりを歩いた

隅田川のほとりを歩いた。春うらら，です。吾妻橋から桜橋までの両岸に，ざっと千本の桜。人もいっぱい。トウモロコシ，やきとりのにおいが風にのってくる。堤防にあぐらをかいて，コップ酒をグイとやっているおじさん。対岸の桜をめでているのか，頭上の桜を楽しむのか。

ひざまくらのカップルもいる。くつ下にせった，ステッキのおじいちゃんが，風にふかれてのんびり遊歩道を歩く。続々と繰り出してくる屋形船の間を荷役船が行き交う。総ガラス張りのデッキに，たくさんの人が立つ水上バスが滑るように進む。「セーヌ川みたいね」，そんなＯＬの会話が聞こえてくる。

（朝日新聞　1990 年 3 月 29 日）

（田中） Ich spazierte den Sumida-Fluß entlang. Ein freundlicher Frühlingstag. Auf den beiden Ufern von der Azuma- bis zur Sakura-Brücke stehen ungefähr 1000 Kirschbäume. Es sind auch viele Leute da. Der sanfte Wind bringt den Geruch von geröstetem Mais und Geflügel-Grillspießchen herüber. Auf dem

(W. Schlecht) Mein Spaziergang führt mich zum Ufer des Sumidagawa. Es ist ein herrlich warmer Frühlingstag. An beiden Ufern zwischen der Azuma- und der Sakura-Brücke stehen mehr als tausend Kirschbäume. Überall sieht man Menschen. Der Wind trägt den Geruch von gerösteten Maiskolben

Deich sitzt ein Mann im Schneidersitz und trinkt Sake aus einem Glas in einem Zug aus. Ob er die Kirschblüten auf dem anderen Ufer bewundert, oder ob er die Blüten über seinem Kopf genießt ?

Ein Liebespaar — einer hat den Kopf in den Schoß des anderen gelegt — ist auch zu sehen. Ein alter Mann in Socken und japanischen Sandalen mit Ledersohlen wandert gemächlich mit seinem Spazierstock im leisen Lüftchen die Promenade entlang. Unter den Vergnügungshausbooten, die eins nach dem anderen kommen, verkehren Frachtboote. Ein Rundfahrtschiff, auf dessen ganz mit Glas bedecktem Deck viele Leute stehen, fährt wie gleitend dahin. „Es sieht wie die Seine aus“, so ein Gespräch der Bürofräulein kommt mir zu Ohren.

und an kleinen Spießchen gebratenem Hühnerfleisch herüber. An der Ufermauer hat sich ein Mann im Schneidersitz niedergelassen und trinkt aus einem Glas genüßlich seinen Sake. Sind es die Kirschblüten am anderen Ufer, die er bewundert, oder die Blüten über ihm?

Auch ein Liebespärchen ist da. Der junge Mann hat den Kopf in den Schoß seines Mädchens gelegt. Ein alter Mann in Socken und Ledersandalen spaziert, von einem leichten Lüftchen umweht, mit seinem Stock gemächlich die Promenade entlang. Durch die Kette von Vergnügungshausbooten schieben sich immer wieder Lastkähne. Ein Ausflugsboot, auf dessen mit Glas überdachtem Deck zahlreiche Passagiere stehen, gleitet durch das Wasser. „Wie an der Seine“, höre ich von irgendwoher ein Büromädchen sagen.

隅田川のほとりを歩いた。春うらら，です。吾妻橋から桜橋までの両岸に，ざっと千本の桜。人もいっぱい。

（田） Ich spazierte den Sumida-Fluß entlang. Ein freundlicher Frühlingstag. Auf den beiden Ufern von der Azuma- bis zur Sakura-Brücke stehen ungefähr 1000 Kirschbäume. Es sind auch viele Leute da.

（S） Mein Spaziergang führt mich zum Ufer des Sumidagawa. Es ist ein herrlich warmer Frühlingstag. An beiden Ufern zwischen der Azuma- und der Sakura-Brücke stehen mehr als tausend Kirschbäume. Überall sieht man Menschen.

▶ 筆者は男性か女性か？

田: このテキストは，文章についてはともかく，日本語特有の単語や表現があって，そういう意味で難しかったですね。そして，内容は風景描写ですが，決して格調の高い文章ではなく，たぶん若い女性の書いたものだと私は思いました。

S: それはどういうところからですか。

田: 「春うらら，です」などという言い方は，男性はしませんね。「人もいっぱい」というようなところもそうですし，その他随所に，最近の若い女性の文だということを感じます。そういう意味で，最初の「隅田川のほとりを歩いた」のシュレヒトさんの訳は，少し文学的に過ぎるというか，高級過ぎるような気がします。

S: 私がこういう書き方にしたのは，gehen や spazieren ではちょっとつまらないのではないかと思ったからなんですが，そういわれてみると，たしかにそうですね。そういう日本語の Sprachebene についての判断は，田中さんがドイツ語のそれに対してそう

であるように，私には難しいですね。私はこの文の時制を現在にしましたが，過去でももちろんいいのです。

田: ですから，次の「春うらら，です」も，この舌足らずのような文の感じが出るように――出ているかどうか分かりませんが――動詞なしにしてみたのです。

S: 「うらら」の訳ですが，私の訳でいいでしょうか。warm をいれたのですが ...

田: 「うらら」は，空がよく晴れて，暑くも寒くもなく，穏やかな様子ですから，シュレヒトさんの訳の方がむしろいいと思います。ここで，「春うらら」と，古典的な言い方をしているのは，「春のうららの隅田川 ...」で始まる『花』という，日本人なら誰でも知っている有名な歌曲があるからです。

さて次の文章ですが，「両岸に」にシュレヒトさんは，an という前置詞を，私は auf を使っています。

S: 田中さんがなぜ auf にしたか。たぶん田中さんは，実際に隅田川の状況を知っていてそれが頭にあって，auf にしたのではないかと思うのです。つまり，例えば，川の両岸に堤防があって，その上に桜の木があれば，auf になるし，読む側もそう理解します。an は，堤防のようなものはなくて，まさに川岸に桜がある場合です。ただ一般的には，Ufer には an が普通です。

田: いや，私は隅田川に行ったことはないのですが，多分このテキストが載っていた新聞に写真が出ていたのでそれを見たのと，後で，堤防にあぐらをかいて，頭上の桜を楽しんでいるのか，といったくだりがあるので，それで auf を使ったんだと思います。自分の文章を改めていま見て，なんで auf にしたのだろうと思ってしまいました。確かに普通は an ですからね。

▶ beide は無冠詞のことが多い

田: それから，ここでは，隅田川の話をしていて，その或る橋から橋までの両岸ということですから，auf <u>den</u> beiden Ufern と定冠

詞をつけましたが，シュレヒトさんのは，an beiden Ufern と無冠詞になっています。どうしてですか。

S： auf (an) den beiden Ufern ということはもちろん出来ます。しかし beide の中には定冠詞の意味というか，役割がもう含まれているのです。ですからそれに定冠詞を付けると，くどい感じがするんです。例えば，Dort drüben stehen zwei Männer. Beide (Männer) kommen aus Deutschland. といった具合で，Die beiden (Männer) ... という必要はありません。

田: そうでした。思い出しました。beide は無冠詞のことが多い，ということは辞書にも出ていますし，私も実際に beide に定冠詞を付けて，直されたことがしばしばありました。

▶ von ... bis (zu) と zwischen

田: 次の「吾妻橋から桜橋までの」ですが，私は von ... bis zu としましたが，シュレヒトさんは zwischen ですね。

S： 日本文はたしかに「... から ... まで」となっていますが，ここでは起点と終点が特に重要ということではないと思います。ごく一般的に「... の間」という程度でいいのではないかと考えて zwischen にしたわけです。それに，von ... bis (zu) ですと，むしろ動作というか，或る種の動きが連想されるのです。例えば，Er läuft von A bis B. といった具合です。ここでは，桜の木が立っている，という静止の状態ですから，この場合はそういう意味でも zwischen の方が適切です。von ... bis (zu) を stehen といっしょに使えないというわけではありませんが，また使っていることも往々にあるでしょうが，私の語感からいうと，なんとなくしっくりしません。

▶ ungefähr はここではあまりに科学的

S： それから，「ざっと千本の桜」ですが，田中さんは「ざっと」を ungefähr とされましたが，ungefähr は少し科学的過ぎます。こういったテキストにはちょっと合わないんです。mehr als という私の訳もまた，厳密にいえば，正しい訳ではありませんね。いちばん

いいのは，ただ，... stehen tausend Kirschbäume でしょう。

田: etwa はどうですか。

S: ungefähr と同じことです。

▶ **Menschen と Leute**

田:「人もいっぱい」をシュレヒトさんは man sieht にし，私は es sind を使いました。そして，「いっぱい」をシュレヒトさんは，überall で表現しています。私がお聞きしたいのは，シュレヒトさんが「人」を Menschen にしたことなんですが。

S: 私の文で，Menschen の代わりに Leute を使ってももちろんかまいません。いま質問されて，私がなぜ Menschen にしたか，あらためて考えてみますと，ここでは，状況がつぎつぎと紹介されていますね。まず，散歩であり，春であり，隅田川であり，橋であり，岸，桜の木 ... という具合に，一つの絵がだんだんと出来上がっていくように描写が進んできて，ここで，全く新たな一要素が登場するわけです。つまり「人間もいます」，という意味で，敢えて Menschen を使ったのだと思います。ですから，私の文では，「人も」の「も」に当たる auch を入れていません。auch は Menschen とすることによって，表現されているわけです。

田: なるほど。たしかに，ここで Überall sieht man Leute. では，やはりなんとなく力がありませんね。

S: しかし，次にもう一度「人」が出てくるときは，今度は Leute を使います。

田: では，私の文で，Leute でなく Menschen にしたらどうでしょう。Es sind auch viele Menschen da. では ......。

S: うーん，ぴったりしませんね。Es sind ... da. はあまりに平板な，文学的でないといいましょうか，即物的な言い方ですから，田中さんの文ではやはり Leute の方がいいですね。

トウモロコシ，やきとりのにおいが風にのってくる。堤防にあぐらをかいて，コップ酒をグイとやっているおじさん。対岸の桜をめでているのか，頭上の桜を楽しむのか。

(田) Der sanfte Wind bringt den Geruch von geröstetem Mais und Geflügel-Grillspießchen herüber. Auf dem Deich sitzt ein Mann im Schneidersitz und trinkt Sake aus einem Glas in einem Zug aus. Ob er die Kirschblüten auf dem anderen Ufer bewundert, oder ob er die Blüten über seinem Kopf genießt?

(S) Der Wind trägt den Geruch von gerösteten Maiskolben und an kleinen Spießchen gebratenem Hühnerfleisch herüber. An der Ufermauer hat sich ein Mann im Schneidersitz niedergelassen und trinkt aus einem Glas genüßlich seinen Sake. Sind es die Kirschblüten am anderen Ufer, die er bewundert, oder die Blüten über ihm?

田: 最初のトウモロコシの文は，der Wind を主語にして，構文は全く同じです。動詞が herüberbringen と herübertragen と違うだけです。

それから「風」ですけれど，ドイツ語で Wind といった場合，どの程度の風のことをいうかよく分からないのですが，ここでは，そよそよと吹いている風のことですから，私は日本文にはない sanft を入れてみました。

S: まず動詞ですが，tragen の方がやや文学的といえるかも知れませんね。

▶ der Wind に sanft を入れたら ein sanfter Wind

S: 「風」ですが，sanft を入れたのはたいへんよいと思います。

ただ sanft を入れると，ein sanfter Wind の方がいいんですね。なぜだか分かりますか。

田: うーん，どんな風か，の答えとしては，ein sanfter Wind ですね ...

S: der sanfte Wind だと，その日に吹いているその柔らかい風，という意味です。ein sanfter Wind は，たまたまそのとき吹いた柔らかい風，ということです。と同時に，先ほどもいいましたように，いろんな情景を描写しているなかで，そのときふと吹いてきた風，という初登場を表す「不定冠詞」でもあるのです。

田: 日本語のまさに「一陣の風が ...」というところですね。

S: der Wind とした場合は，「風によって」運ばれてきた，という意味合いになって，手段としての風，ということになります。ですから，ここの訳としては，ein sanfter Wind が最適ですね。そうすると，ますます動詞は bringen でなく，tragen の方がいいということになります。

田: さて，「トウモロコシ」と「やきとり」の訳ですが ......。

S: むずかしいですね。まず「トウモロコシ」は，この場合 Mais だけではちょっと不十分ですね。Mais だと，ドイツ人はトウモロコシの実だけを考えますから，gerösteter Mais というと，実をとって，それを煎ったものになってしまいます。ですから，Maiskolben（トウモロコシの穂軸）としないと，あの日本でやるような食べ方は分からないと思います。

▶ 辞書の匂いがする Geflügel-Grillspießchen

田: 「やきとり」を私は，Geflügel-Grillspießchen としましたが，これは，辞書に出ていたのをそのまま使いました。

S: そうでしょうね。辞書の匂いがします。辞書に載っているのは，どういうものかという説明なんですね。ただ最近は，そういったその国独特のものの訳語について，いろいろ工夫した訳が見受けられます。ついこの間も，ある小さな辞書で見たのですが，「餃子」

を chinesische Ravioli と訳してあって，たいへん面白いと思いました。

田：　ちょっと待ってください，いま手元にある和独辞典で「餃子」を引いてみますから。eine chinesische Spezialität (Teigtaschen mit Füllung) と出ています。まさに説明ですね。

さて，次の「堤防にあぐらをかいて，コップ酒をグイとやっているおじさん」ですが，これにもかなり悩まされました。「堤防」を私は Deich としましたが …

S: Deich というと，人工的なものを連想しますね。

田: 「あぐらをかく」は同じ言い方ですが，動詞は，私は「座っている」という状態を表す sitzen にしましたが，シュレヒトさんのは，sich niederlassen という動作を表す動詞になっていますね。

S: ええーと，日本文はどうなっているのでしたっけ。

田: ただ「あぐらをかいて」です。

S: たしかに，まあ，sitzen ですね。sich niederlassen は，ある目的のために，という意味を含んでいます。ということは，ここでは，一休みして風景でも楽しもうと腰をおろす，といった雰囲気が出るので，この場合，sich niederlassen が適切ではないか思ったわけです。

田: そして，現在完了になっていますから，もう「座っている」ことになりますね。「コップ酒をグイとやっている」ですが，シュレヒトさんは，意図があってのことだと思いますが，「グイとやっている」をまったく違うふうに訳しましたね。

▶ おじさんはやけ酒を飲んでいるのではない

S: 「グイと」と genüßlich はもちろん違います。「グイと」は，飲み方の早さでもあり，量にも関係があるのだと思います。genüßlich は「楽しみながらうまそうに」ということですから，翻訳としては，ある意味で正しくないんですが，in großen Schlücken とか，in einem Zug とかいうのは，なんとなくこの情景の雰囲気に合

わないんです。

田: シュレヒトさんが，情景を美しく描きたいと思っていることは分かるのですが，「コップ酒をグイとやっている」は別に美しい情景ではないんです。

S: また翻訳の難しい問題にかかわってきますが，このおじさんは，桜見物よりお酒を飲むことの方が目的でここに来たのかも知れませんけれど，やけ酒を飲んでいるのではないわけでしょう。それで，in großen Schlücken とすると，ドイツ人には，このおじさんは，暗い，悲しい気持ちで飲んでいるような印象を与えるのです。そういう間違った印象を与えてしまうのは，やはり翻訳としてまずいと思うのです。

実は「コップ酒」も，始め私は訳さないでおこうと思ったのです。日本語としては，意味がありますが，お酒をおちょこで飲むということを知らない一般のドイツ人には特に意味がありませんから。しかし，それでは翻訳として逸脱し過ぎるのではないかと思い直して aus einem Glas は入れておきました。「グイとやっている」ですが，これは，一気に飲むことですか。

田: うーん，一気，ではないですね。私の訳だと，一気に飲み乾したことになりますね。そうすると，...und trinkt aus einem Glas in großen Schlücken ですね。

S: そうですね。

▶ おじさんにとって特別な意味を持つ sein Sake

田: このおじさんがお酒を楽しんでいるという様子を表現したいというシュレヒトさんの気持ちは，所有形容詞を付けた <u>seinen</u> Sake にも現れていますね。「例の」とか，「いつもの」とかいった意味だと思いますが。

S: この sein にはいろんなことが表現されています。いつもの，とか，彼にとって大切な，今朝から楽しみにしていた，とかいった彼にとって特別な意味を持った酒ということですね。

田: 最後の,「対岸の桜をめでているのか,頭上の桜を楽しむのか」は,私は,ob を使いましたが,シュレヒトさんは,es ist ..., der (die, das) ... の形,「... なのは,... である」という,われわれがいうところの,強調構文を使いました。なるほど,と思いました。

S: ob にしますと,筆者は本気で質問していることになってしまうのです。

田: ああ,そうですか。ここでは,別に答えを求めているわけではありませんからね。

ひざまくらのカップルもいる。くつ下にせった,ステッキのおじいちゃんが,風にふかれてのんびり遊歩道を歩く。

(田) Ein Liebespaar — einer hat den Kopf in den Schoß des anderen gelegt — ist auch zu sehen. Ein alter Mann in Socken und japanischen Sandalen mit Ledersohlen wandert gemächlich mit seinem Spazierstock im leisen Lüftchen die Promenade entlang.

(S) Auch ein Liebespärchen ist da. Der junge Mann hat den Kopf in den Schoß seines Mädchens gelegt. Ein alter Mann in Socken und Ledersandalen spaziert, von einem leichten Lüftchen umweht, mit seinem Stock gemächlich die Promenade entlang.

▶「ひざまくら」は誰が誰の膝に

田:「ひざまくらのカップルもいる」には泣かされました。結局,シュレヒトさんも私も,「カップルがいる」と「ひざまくらをしている」とに分けたわけですが,シュレヒトさんは,二つの文にしました。私は,ダッシュのなかにいれて,やや強引に一つの文にしまし

た。そして，ひざまくらというのは，だいたい，男性が女性の膝にするのが普通ですが，昨今は，逆の場合も多いにあり得るので，「一方が他方に」という言い方にしてみました。

S: ええ，分かりますが，einer は男性ですね，そして des anderen も男性です。

田: 倒錯の世界ですね。(笑声)

S: einer von den beiden とやれば，「一方が」ということがややはっきりしますが，それでもちょっと抵抗がありますね。einer は男性の不定代名詞ですから。私もいろいろ考えたのですが，やはり私がやったように明示しないと「ドイツ語」にならないんですね。

▶「せった」など日本独特なものの訳し方

田: 「せった」ですが，これもドイツにはないものですから，どう訳しても，ドイツ人はそのものをイメージすることは出来ないわけです。いちばんいいのは，„Setta" として，脚注をつけて説明すればいいのでしょうが，これは学術書ではありませんからね。

S: そういうことですから，私は Ledersandalen としましたが，Sandalen だけの方がむしろいいかも知れません。

田: Ledersandalen は違うと思います。「雪駄」というのは，竹皮草履の裏に牛皮を張りつけたものですから。それで，私は，japanische Sandalen mit Ledersohlen としたわけですが，どうせ分からないのだから Sandalen でいいというのは，この場合は必ずしもいえないと思うのです。といいますのは，ここでいっている「くつ下にせった」は，和洋折衷のおかしな取り合わせで，それを筆者はいいたいからです。in Socken und Sandalen ではそのおかしさは出ません。

S: なるほど。これは一般論ですが，japanische Sandalen といった類いの「japanisch- 何々」といった言い方が乱用されすぎているような気がするのです。そしてまた，この japanisch- は日本製のという意味にもとれます。deutscher Wein などは，ドイツ産のワイン

ということですからね。それで私は，この「japanisch- 何々」という言い方は出来るだけ避けるようにしているのです。

田: おっしゃることはよく分かります。「japanisch- 何々」という言い方は，西洋人がいい出した，西洋人向けの言い方ですが，先ほどシュレヒトさんが良い例として挙げた——それは japanisch- ではありませんでしたが—— chinesische Ravioli などは西洋人に分からせるという意味では功もあるわけですから，一概に否定するわけにもいかないと思います。ということで，この場合，japanische Sandalen で多少なりとも Socken とのコントラストは出るのではないかと思ったわけです。

文章についてですが，骨組みは全く同じですね。シュレヒトさんは，Ein alter Mann spaziert ... die Promenade entlang. で，私は，Ein alter Mann wandert ... die Promenade entlang. です。ただ，そこにかなりたくさんの修飾句が入ってくるわけですが，私の場合は，gemächlich を除いて全部前置詞と結びついた名詞が次から次へと並んでいるので，文章が単調で，めりはりがありません。

▶ 挿入句は副次的なインフォメイション

田: 「風にふかれて」をシュレヒトさんは，von einem leichten Lüftchen umweht, と挿入句にしたために，単調さを免れていますね。

S: ドイツ語の場合，いろんな要素を一つの文章の中に入れるときは，その要素の重要度を考えて，並列的にならないように工夫することが大切ですね。

田: 挿入句になっているものの方が，副次的なインフォメイションと考えていいですか。

S: だいたいそういえると思います。

続々と繰り出してくる屋形船の間を荷役船が行き交う。総

ガラス張りのデッキに，たくさんの人が立つ水上バスが滑るように進む。

（田） Unter den Vergnügungshausbooten, die eins nach dem anderen kommen, verkehren Frachtboote. Ein Rundfahrtschiff, auf dessen ganz mit Glas bedecktem Deck viele Leute stehen, fährt wie gleitend dahin.

（S） Durch die Kette von Vergnügungshausbooten schieben sich immer wieder Lastkähne. Ein Ausflugsboot, auf dessen mit Glas überdachtem Deck zahlreiche Passagiere stehen, gleitet durch das Wasser.

田:「続々と繰り出してくる」のところが，かなり違った訳になっています。

S: 田中さんは，「次から次へとやってくる」という言い方で，日本語に忠実な訳になっています。私は，少し自由な訳にして，durch die Kette von ... としたんですが。

田: durch die Kette von ... では，「連なっている間を」ということで，繰りだしてきた結果の状態ですから，「繰り出してくる」とはちょっと違いますね。

S: たしかにそうですね。私は，遠くから見た情景を描写してみたのです。

▶「行き交う」

田:「行き交う」は，私は verkehren，シュレヒトさんは sich schieben です。sich schieben はどんな様子をいうのでしょう。

S: sich schieben は，まず，ゆっくりした動き，それも軽やかでない動きです。そして，他のものを押し分けていくような感じで，私は，屋形船の間をゆっくりと押し分けて進んでいくというふうに理解したのです。

田: ということは，日本文の「行き交う」とはやはりちょっと違いますね。私の verkehren には往来するという意味がありますから，「行き交う」を表現していると思います。

S: 確かに sich schieben にはその意味は含まれていませんが，まあこの文章を読む人は，どの船もみんな一方方向に進んでいるとは考えないでしょう。

田: その情景が同じように頭に描ければいいわけですから，日本語の言葉どおりに必ずしも訳す必要はありませんが，この日本語の「行き交う」は，hin と her をはっきり言っているわけですから，これはやはり訳出したほうがいいと私は思います。

次の「水上バス」を，私は Rundfahrtschiff としましたが，シュレヒトさんは Ausflugsboot ですね。

S: 実際にどういうものなのか，私はよく知らないのですが，Rundfahrtschiff というと，コースの決まった定期観光船ですね。Vergnügungsboot は，チャーターして乗る自由なものです。

▶ mit Glas bedecktem Deck と mit Glas überdachtem Deck

田：「総ガラス張り」ですが，私は，ganz mit Glas bedecktem Deck としましたが，シュレヒトさんは mit Glas überdachtem Deck ですね。

S: bedecktem と überdachtem は，bedeckt- でもちろんいいのですが，次に来る名詞が Deck ですから，bedecktem Deck と重複するのを避けたのです。それだけのことです。

田: それから，「人」を私は Leute としましたが，たしかにシュレヒトさんのように，Passagiere の方がいいですね。「滑るように進む」がまた，fährt wie gleitend dahin と gleitet durch das Wasser と違いますが，これは言い方の違いということでいいのではないかと思いますけれど，読む側の受ける感じは違いましょうか。

S: おっしゃる通り表現の相違ということでいいと思います。強いていえば，gleitet durch das Wasser の方はやや視点が狭いとい

うのでしょうか，視点はその水上バスに固定されていますが，fährt gleitend dahin は，水上バスがだんだん遠退いていく様子を遠景として表現している，ということでしょう。いずれにしても大した違いはありませんね。

「セーヌ川みたいね」，そんなＯＬの会話が聞こえてくる。 （田） „Es sieht wie die Seine aus“, so ein Gespräch der Bürofräulein kommt mir zu Ohren. （Ｓ） „Wie an der Seine“, höre ich von irgendwoher ein Büromädchen sagen.

▶ „es“ には気を付けて

田: 私が，Es sieht wie die Seine aus. としたのは，岸から見た，水上バスなどが滑るように進んでいく隅田川の様子がセーヌ川のようだ，といっていると考えて，こうしたのですが，シュレヒトさんの Wie an der Seine. だと，自分たちがセーヌ川の畔にいるようだ，ということになりますね。解釈の問題ですが。

S: 田中さんの文では，es が何を指しているのかはっきりしないのです。コップ酒のおじさん，カップル，屋形船，水上バス，等々は，筆者の印象ですね。ところが，この「セーヌ川みたいね」は，ＯＬの印象です。ですから，「セーヌ川みたいね」はいままで筆者が描写してきたこととは，関係がないわけです。ここで es を使うと，それまで筆者が描写してきたことを指しているように受け取れるので，この es は具合が悪いのです。

田: なるほど。最後の「聞こえてくる」を私は，kommt mir zu Ohren としましたが，この言い方はちょっと違う意味の慣用句のようですね。例えば，噂が耳に入る，というような場合の「耳に入る」

という ……。

S: そうなんです。

田: ということは，ここでこれを使ったら，やはりおかしいですか。

S: そうですね ……。ただ，こういう慣用的な言い方というのは，しばしばその慣用的な意味にではなく，字句どおりの意味に使われることもありますから，前後関係から分かりますけれど。

田: それは日本語でも同じですね。

S: ですから，この場合もその意味で，許されるといえるかも知れませんが，翻訳として公にするようなものの場合は避けたほうが無難でしょうね。

▶「セーヌ川みたいね」は会話ではない

田: それから，私は，「そんなＯＬの会話が …」ということなので，ein Gespräch としましたが。

S: たしかに日本文では「会話」になっていますが，実際には，会話の中の言葉の端が聞こえてきた，ということですから，ドイツ語では Gespräch はこの場合大げさすぎますね。それからＯＬですが，Bürofräulein は古い言い方です。今は，Büromädchen が一般的です。

田: シュレヒトさんは，「聞こえてきた」を，von irgendwoher を使うことによって旨く表現されましたね。

課題 6　日本企業の西独進出

西独は日本と同様，自由体制の維持を „生命線“ とする国である。従って，市場開放もＥＣ内で先頭を切っている。例えば自動車について輸入車のシェアが 30%に達しても，防衛措置に出るよりむしろその分ドイツ車の輸出増大を図るという考え方に立っている。

日本の市場開放については，「やや遅きに失した」「流通経路が複雑過ぎる」といった注文は聞かれるが，総じて日本の体制を評価している。

日本企業の進出に対する地元の熱意は極めて強いが，西独企業が世界市場で日本製品と厳しいツバ競り合いを演じていることも事実である。しかし，経済界の対応は極めて好意的で，進出済みの日本企業からも悩みの声はほとんど聞かれなかった。

（石原秀夫，日本経済新聞，1990 年 2 月 10 日）

（田中） Die Bundesrepublik Deutschland ist, ebenso wie Japan, ein Staat, der die Aufrechterhaltung des freien Wirtschaftssystems als eine lebenswichtige Aufgabe ansieht. Sie steht folglich, was die Marktöffnung anbelangt, unter den Ländern der EG an

(W. Schlecht) Die Bundesrepublik Deutschland gehört— ganz gleich wie Japan — zu den Ländern, die die Beibehaltung des Systems einer liberalen Handelswirtschaft als lebensnotwendig betrachten. Was die Öffnung seiner Märkte

der Spitze. Dies spiegelt sich deutlich in ihrer Konzeption wider, auf der ihre Wirtschaftstätigkeit fußt, daß sie sich, auch wenn z.B. der Marktanteil der Importwagen 30 Prozent erreicht hat, darum bemüht, die Ausfuhr von deutschen Wagen zu steigern, statt eine protektionistische Gegenmaßnahme zu ergreifen.

Was die Marktöffnung Japans angeht, hört man in der Bundesrepublik zwar die Meinung, daß es die rechte Zeit verpaßt habe, bzw. daß die Marketing-Kanäle Japans zu kompliziert seien. Ich habe aber den Eindruck, daß das japanische Wirtschaftssystem im großen und ganzen geschätzt wird.

Die betreffenden Ortschaften in der Bundesrepublik kommen Projekten japanischer Firmen, sich dort niederzulassen, mit größtem

anbelangt, steht Deutschland zweifellos an der Spitze der EG-Länder. Man ist in der BRD z.B. der Überzeugung, daß es — selbst wenn der Marktanteil importierter Automobile ein Niveau von 30% erreicht hat — wichtiger ist, den Export deutscher Wagen zu intensivieren, als irgendwelche protektionistischen Maßnahmen zu ergreifen.

Zwar hört man auch in Deutschland Beschwerden über die zu spät erfolgte Öffnung des japanischen Marktes bzw. über das allzu komplizierte japanische Distributionsnetz; insgesamt aber wird das japanische System als durchaus positiv bewertet.

Japanische Unternehmen, die sich auf dem deutschen Markt etablieren wollen, sind dort überaus willkommen. Es darf in diesem Zusammenhang

Interesse entgegen, andererseits jedoch ist die Tatsache, daß deutsche Firmen auf dem Weltmarkt mit japanischen Waren einen heftigen Konkurrenzkampf führen, auch nicht zu leugnen. Deutsche Wirtschaftskreise nehmen aber japanische Firmen im allgemeinen sehr zuvorkommend auf, und ich begegnete kaum einer bereits in der Bundesrepublik tätigen japanischen Firma, die sich über irgendwelche Schwierigkeiten beschwerte.

jedoch nicht übersehen werden, daß sich deutsche und japanische Unternehmen mit ihren Produkten auf dem Weltmarkt einen erbitterten Konkurrenzkampf liefern. Deutsche Wirtschaftskreise kommen japanischen Unternehmen jedoch sehr entgegen, und von japanischen Firmen, die auf dem deutschen Markt bereits Fuß gefaßt haben, sind kaum irgendwelche Klagen zu hören.

西独は日本と同様，自由体制の維持を „生命線“ とする国である。従って市場開放もＥＣ内で先頭を切っている。

(田) Die Bundesrepublik Deutschland ist, ebenso wie Japan, ein Staat, der die Aufrechterhaltung des freien Wirtschaftssystems als eine lebenswichtige Aufgabe ansieht. Sie steht folglich, was die Marktöffnung anbelangt, unter den Ländern der EG an der Spitze.

(S) Die Bundesrepublik Deutschland gehört — ganz gleich wie Japan — zu den Ländern, die die Beibehaltung des Systems einer liberalen Handelswirtschaft als lebensnotwendig betrachten. Was die Öffnung seiner Märkte anbelangt, steht Deutschland zweifellos an der Spitze der EG-Länder.

▶ **まず単語について**

田: 今回は経済記事を取り上げてみたわけですが，最近よく耳にする経済用語もいくつか出てきます。まず，単語から始めましょうか。「自由体制」ですが，これはこの日本語をそのまま理解すれば，政治体制のことになるのですが，ここでは，経済体制のことをいっているので，Wirtschaftssystem と私は訳しました。シュレヒトさんもその意味で訳されていますが，das System einer liberalen Handelswirtschaft としましたね。

S: ここで問題になっているのは経済のなかでも貿易のことですから，さらに狭義に考えて，Handel をいれたわけです。

田:「自由」の frei と liberal には，何かはっきりした違いがありますか。

S: frei はごく一般的な「自由」ですが，liberal は政治的，思想

的な方向としての「自由」ですね。

田: 「維持」を私は Aufrechterhaltung にしましたが，シュレヒトさんは Beibehaltung を使っていますね。

S: どちらでもいいと思います。Aufrechterhaltung は「崩れないようにする」ということですが，Beibehaltung は「これからも引き続いて」という意味が含まれています。Beibehaltung の場合は，たとえば，なにか危機に直面して，というような特別な状況はないのです。

田: 「生命線」ですが，これは引用符のなかに入っていますから，比喩的に用いているわけですけれど，手相でいう生命線の Lebenslinie の他に，生活物資の供給路という意味で Lebensader という言葉もありますね。ここでは，生きていくために守っていかなければならない最重要な路線，というほどの意味ですから，私は，eine lebenswichtige Aufgabe としました。シュレヒトさんも大体同じですね。

S: 田中さんが Aufgabe を入れたのはたいへんいいと思います。

田: 「国」は，Land にしようか，Staat にしようか迷ったのですが，ここでは「国家」と多少大袈裟な言い方でもいいかと思って Staat にしましたが，シュレヒトさんはLand にされましたね。

S: Land の方が，柔らかい感じがします。ここでは，話題は政治ではなく経済のことですから，Land がいいでしょう。

田: 今度は文章ですが，「... 国である」を私は，動詞 sein を使い，シュレヒトさんは gehören zu です。

S: どちらでもいいですね。gehören zu は「そういう国々の中の一つである」という意味合いになります。

▶ 市場開放は先頭を切らない

田: 次の「従って，市場開放もＥＣ内で先頭を切っている」の文の組みたては，ほとんど同じです。

S: 私は自分の訳に必ずしも満足していないのです。というのは，「市場開放」となっていますから一応 Öffnung にしましたが，ここ

でいっているのは，開放の度合いのことですね。Öffnung は，ただ開放という行為ですから。

田: なるほど，そうすると an der Spitze と結びつきませんね。開放度が先頭を切っている，ならいいですけれど，「開放」が先頭を切っているというのは，たしかにおかしいですね。そういう意味もあって，「市場開放」を Marktöffnung と一語にしないで—— 一語にすると概念として強調されますから—— Öffnung seiner Märkte とされたわけだと思いますが，Märkte と複数にしたのは，いろんな分野の市場の，ということですか。

S: そういうことです。

田: 実は私も，「市場開放が先頭を切る」というのはおかしいということは気が付いて，「いかに市場を開放しているか，ということにおいて」と訳そうかと考えたのですが，結局，安直な言い方にしてしまいました。

S: ですから，そういう意味で，offen の質，有様を表現する Offenheit を使えばいちばんいいのですが，Offenheit は，「率直」とか「正直」とかいう意味で用いられるのが普通ですから，ここで使うのはちょっと具合が悪いのです。

▶ 必ずしも「従って」でない日本語の「従って」

S: そして，論理的でないといえば，それに関連して，次の日本語の「従って」もそうなんです。「自由体制の維持を生命線としている」ことと「市場開放で先頭を切っていること」との間には，「従って」といえるほどの因果関係はないんです。

田: おっしゃる通りです。それでシュレヒトさんは，私が使った folglich のような，konsekutiv を表す接続詞を用いなかったのですね。その代わりといいましょうか，zweifellos にしたのですね。

S: ええ，まあ，そういう風にしてみたのです。

例えば自動車について輸入車のシェアが30%に達しても，防衛措置に出るよりむしろその分ドイツ車の輸出増大を図るという考え方に立っている。

(田) Diese spiegelt sich deutlich in ihrer Konzeption wider, auf der ihre Wirtschaftstätigkeit fußt, daß sie sich, auch wenn z.B. der Marktanteil der Importwagen 30 Prozent erreicht hat, darum bemüht, die Ausfuhr von deutschen Wagen zu steigern, statt eine protektionistische Gegenmaßnahme zu ergreifen.

(S) Man ist in der BRD z.B. der Überzeugung, daß es — selbst wenn der Marktanteil importierter Automobile ein Niveau von 30% erreicht hat — wichtiger ist, den Export deutscher Wagen zu intensivieren, als irgendwelche protektionistischen Maßnahmen zu ergreifen.

田: 日本語の文に添って，検討してみたいと思います。「自動車について輸入車のシェアが30%に達しても」の部分の訳は，基本的には同じと言っていいですね。そして，同じように daß- 文章の中に挿入しています。「30%に達しても」のところで，シュレヒトさんは ein Niveau von を入れていますね。

S: これは，私の個人的な好みの問題なんですが，私は数字をそのまま挙げることになぜか抵抗があるのです。ですから，例えば，Hiermit überweise ich Ihnen einen Betrag von 1 000 DM. と普通はいうところを，私は Hiermit überweise ich Ihnen einen Betrag in Höhe von 1 000 DM. とします。

田: 「防衛措置に出る」の訳も全く同じですが，「... に出るよりもむしろその分ドイツ車の輸出増大を図る ...」のところが違います。

骨格だけでいうと，シュレヒトさんは es ist wichtiger, A zu tun, als B zu tun で，私は sie (die BRD) bemüht sich, A zu tun, statt B zu tun という言い方です。

S：これは，その前の主文章に関係していますね。私のは Man ist ... der Überzeugung, daß ... で，田中さんの主文章は，in ihrer Konzeption ..., daß ... ですからね。表現は違いますが，それぞれ日本文を正確に伝えていると思います。

▶「... という考え方に立っている」

田：最後に，「... という考え方に立っている」という主文章ですが，シュレヒトさんは，実に簡単に，Man ist ... der Überzeugung, です。

S：Man ist ... der Meinung ということですが，Meinung では少し弱いので，Überzeugung にしました。

田：「という考え方に立っている」ということは，「と考えている」ということですから，der Meinung sein で十分なんですね。man を主語にして，Man ist in der BRD der Meinung (Überzeugung), daß ... で言えるとは考えつきませんでした。結局，前にもいいましたように，起点言語のネイティブ・スピーカーである私は，日本語に囚われて，「考え方に立っている」という日本語の言い方に拘ってしまうのです。そこで私は，Dies spiegelt sich ...in ihrer Konzeption wider とやって，その「考え方」が何に関する考え方か，ドイツ語の場合ははっきりさせないといけないと考えて，Konzeption を説明する関係文をその後に付けたわけです。

S：この言い方でも決して悪くないですよ。

田：「輸出の増大を図る」というところを，シュレヒトさんは den Export intensivieren とされましたが，こういう intensivieren の使い方があるのですか。

S：うーん，まあ，結局これは，seine Bemühungen um einen größeren Export intensivieren ということなんですね。これだと冗

長な感じがするので，den Export intensivieren にしたということなんでしょうね。こういう現象はよくあるのです。

▶「その分」は訳さなかった

田： それから，少し細かいことなんですが，「防衛措置にでるよりもその分 ...」というところです。この「その分」をなんとか訳そうと思っていろいろ考えたのですが，結局考えつかなくて訳してないのですが，例えば，dafür などは駄目でしょうか。

S：dafür は「その代わりに」ですね。ここではあまり適当ではありませんね。dafür が「その分」に当たることもあるんですが，ここではちょっとまずいですね。この文章の場合は「その分」を訳さなくても，全体のなかで，十分その意味は入っています。

▶ z. B. の考え方

田： それから，この文章の最初に「例えば」がありますが，シュレヒトさんは，この「例えば」を最初にもってきて，Man ist in der BRD z. B. der Überzeugung, daß... とされましたが，これは，「自動車について」にかかる「例えば」ですから，私がやったように auch wenn の中に入れて，auch wenn z. B. der Marktanteil der Importwagen ... とすべきだと思いますが ......。

S：私のこの zum Beispiel は，「自動車について」にかかる zum Beispiel ではないんです。これは，前文にかかっているのです。つまり，前文で，西独は自由体制の維持を生命線としている国である，といっています。そのことは，「例えば，こういう場合にも見ることが出来る」という「例えば」なんです。これなども，前に話題になった「橋渡し」ですね。田中さんのいわれる「自動車について」の zum Beispiel は特に入れませんでした。その「例えば」の意味は selbst wenn という接続詞の中に入っていますから。

日本の市場開放については，「やや遅きに失した」「流通

経路が複雑過ぎる」といった注文は聞かれるが，総じて日本の体制を評価している。

（田） Was die Marktöffnung Japans angeht, hört man in der Bundesrepublik zwar die Meinung, daß es die rechte Zeit verpaßt habe, bzw. daß die Marketing-Kanäle Japans zu kompliziert seien. Ich habe aber den Eindruck, daß das japanische Wirtschaftssystem im großen und ganzen geschätzt wird.

（S） Zwar hört man auch in Deutschland Beschwerden über die zu spät erfolgte Öffnung des japanischen Marktes bzw. über das allzu komplizierte japanische Distributionsnetz; insgesamt aber wird das japanische System als durchaus positiv bewertet.

田: 日本語の文としては，全く自然なことですが，誰が日本の体制を評価しているのか，いわゆる主語がありません。

S: 受動形が使える好例ですね。

田:「日本の市場開放については」には，私はまた機械的に was ... angeht を使いました。すでに前にこの言い方を用いているので，多少とも重複の感を避けようと思いまして，——そのときは，was ... anbelangt でしたから——動詞だけを変えたのですが，やはりシュレヒトさんは，別の方法にしていますね。シュレヒトさんは，「やや遅きに失した」のなかに入れて，「日本の市場開放はやや遅きに失した」として処理しています。

S: そうですね。「何々については」の「何々」も前の文と同様「市場開放」ですし，それに was ... angeht (anbelangt) という言い方は，あまり面白い言い方ではありませんからね。

▶「遅きに失した」「流通経路が複雑すぎる」は注文か

S: ところで田中さんは「注文」を Meinung と訳しましたが，ちょっと弱いのではないでしょうか。

田: うーん，確かに「注文」は Meinung とはちょっと違うかもしれませんね。

S: 私の訳の Beschwerden も 100 パーセントではありませんが。

田: いや，そうともいえません。厳密にいえば，「やや遅きに失した」とか「流通経路が複雑過ぎる」というのは，注文ではありませんから。「注文」というのは，こうしてほしい，ああしてほしい，という要請ですからね。それで，私も考えて Meinung にしてみたわけです。「遅きに失した」「複雑過ぎる」は，いわば苦情ですから，Beschwerden が適切だと思います。

S: 日本語では，この場合「注文」といってもおかしくないんですか。

田: ええ，別にそんなにおかしくないですね。ただ，翻訳しようと思って，よく考えると，ちょっと変かなと思いますが。

▶「でさえも」の auch

S: 細かいことですが，私は Zwar hört man auch in Deutschland ... と，日本文にはない auch を入れましたが，この auch は「もまた」という意味ではないんです。「... でさえも」という意味です。つまり，ドイツは自国内のやり方を調整することによって対外的に対処してきたと，前の文ではドイツを誉めています。そのドイツが苦情をいっているというのは，ちょっと矛盾するのです。そこで，auch をいれるこによって「そういうドイツでさえも」ということになり，論理的に繋がるわけです。

田: なるほど。先ほどの「注文」を私が Meinung にしたことと多少関係があるのですが，日本文では，「やや遅きに失した」「流通経路が複雑過ぎる」が鉤カッコの中に入っています。これは，ドイ

ツ人がいっていること，つまり日本の経済活動に関するドイツ人の意見の代表的な事項を箇条書きのようにして紹介しているわけです。ですから，それはそのように訳した方がよいと私は考えたのです。それで，始めは，引用符に入れて，とも思ったのですが。

S：引用符に入れるのは，厳密にいえば，実際に誰かがいった言葉を引用するときですから，この場合は違いますね。

田：私もそう考えて，「遅きに失した」と「複雑過ぎる」を引用符の中には入れませんでしたが，一応文章にして，つまり二つの daß-文章にして並べてみたのですが，シュレヒトさんは名詞にして，一つの文章の中の一要素のように訳されました。

S：この daß- 文章もあまり綺麗でないんです。ここでは，daß A und daß B という二つの要素をもった二つの daß-Satz になっていますね。そもそも daß- 文章というのはあまりエレガントでないんです。ドイツ語をどこまでマスターしているかということは，いかに不必要な副文章を使わないで，いわゆる枠構造のなかで文を処理できるか，ということだと思うのです。

田：*Wem sagen Sie das, lieber Herr Schlecht!*（笑声）それについては，私も全く同意見です。同じことを私も，課題 4 のところで申しあげました。ただここでは，先ほどもいいましたように，原文では，鉤カッコのなかに入れて意見の紹介のように挙げてありますので，そのように訳したほうがいいのではないかと思ったわけです。それで私は，それぞれ文章にして，「遅きに失した」を ...daß es die rechte Zeit verpaßt habe としました。この es は Japan のことで，Was die Marktöffung Japans の Japans を受けているわけなんですが，2 格の名詞をこのように受けることはどうでしょう。やはり es としないで，Japan としたほうがいいでしょうか。

S：es で大丈夫です。

田：「流通経路」が Marketing-Kanäle と Distrubitionsnetz と訳が違いますが ......。

S: 田中さんの Marketing-Kanäle でももちろん結構です。

▶「総じて」の durchaus

田: 「総じて」ですが，この意味は，「細かいことは別にして，おおよそ」ということですから，im großen und ganzen としましたが，シュレヒトさんは，durchaus を使って durchaus positiv としていますね。そうすると，100 パーセント肯定的に評価しているということになって，ちょっと意味が違うのではありませんか。

S: いいえ，そうではないんです。

田: でも，durchaus は強調ではないんですか。つまり，völlig, vollkommen ということでしょう。

S: そういう意味ももちろんありますが，völlig, vollkommen, aber mit gewisser Einschränkung という意味もあるんです。

田: いま手元にある数冊の独和辞典をみる限りでは，「全く，徹頭徹尾，どうしても，等」で，「総じて」のニュアンスのある訳語や用例は載っていませんね。さて，その文章ですが，私は，それだけでは何かぶっきらぼうのような気がして，Ich habe aber den Eindruck, ... を前に置いたのですが。

S: これは必要ないんじゃないでしょうか。

日本企業の進出に対する地元の熱意は極めて強いが，西独企業が世界市場で日本製品と厳しいツバ競り合いを演じていることも事実である。

(田) Die betreffenden Ortschaften in der Bundesrepublik kommen Projekten japanischer Firmen, sich dort niederzulassen, mit größtem Interesse entgegen, andererseits jedoch ist die Tatsache, daß deutsche Firmen auf dem Weltmarkt mit japanischen Waren einen heftigen Konkurrenzkampf führen, auch nicht zu leugnen.

(S) Japanische Unternehmen, die sich auf dem deutschen Markt etablieren wollen, sind dort überaus willkommen. Es darf in diesem Zusammenhang jedoch nicht übersehen werden, daß sich deutsche und japanische Unternehmen mit ihren Produkten auf dem Weltmarkt einen erbitterten Konkurrenzkampf liefern.

▶「地元」とはどこか？

田: どういう文章に組み立てたらよいか，という点では，そんなに問題はなかったのですが，二つばかり困った個所がありました。一つは，「地元」をどう訳すか，つまり，「地元」というのはここでは，何のことをいっているのか。もう一つは，「西独企業が … 日本製品とツバ競り合いを演じている」というのは変ですから，これをどう処理するかということです。

S: 「地元」というのはどういう意味ですか。私はそんなに厳密に考えなかったのですが。

田: 自分の住んでいるところ，ということですが，或ることに直接関係のある地域という意味でもよく使われるのです。ここでは後者の意味ですので，それを訳出しようと思って，まあ，その通りのドイツ語になったわけですが。

S: そういうことでしたら，Gegend でしょうね。Ortschaft はちょっと違いますね。Ortschaft は小さな町や村ですから。

田: 私は，ここで言っているのはそういった Gemeinde だと思ったのです。

S: いや，そうではなくて，バイエルン州というような「州」のことをいっているのでないかな。このテキストは一部ですが，前の部分で「州」のことが話題になっていますから。そういうわけで，die betreffenden Gegenden ならいいと思います。ただ betreffend

はなくてもいいですね。

田: シュレヒトさんは，そこのところを auf dem deutschen Markt とされましたが，ここで言っているのは，いま申しあげたように，日本の企業が進出するその「地域」のことですから，少し一般的過ぎると思いますが。

S: ああ，そうですね。分かりました。そうすると確かに私の訳では，少し違いますね。

田: 「企業」は Unternehmen ですね。私は Firma と訳しましたが。

S: はい。Unternehmen と Firma の違いは，専門的な定義は別にして，言葉から受ける感じからいって，日本語の「企業」と「会社」の違いとほぼ同じと考えていいと思います。

▶「進出」は何と訳したらよいか

田: 「日本企業の進出に対する地元の熱意」も，よく考えてみると判然としませんが，「進出」は，「これからの進出」と解釈するのが順当ですから，私は，Projekt を入れて，「日本企業の進出するという計画を大いに歓迎している」という形のドイツ語にしました。シュレヒトさんも同様に解釈して，wollen を使って「進出しようとしている日本企業をたいへん歓迎している」としています。

それから，「進出する」は最近よく使われる言葉ですが，訳しにくい表現です。結局その地に工場や支店を開設して経済活動をし，地歩を固めるということですから，そのような意味の言葉を当てる以外ありません。私は sich niederlassen，シュレヒトさんは sich etablieren とそれぞれ違いますが，いずれも，いまいったような意味の言葉ですね。

さてその次が，最初に問題点として触れた，「西独企業が日本製品とツバ競り合いを演じる」という文章です。「西独企業が日本企業とツバ競り合う」なら問題ないのですが。これはなんとか工夫して訳さなければならないわけですが，私は，分かっていながら物ぐさを

して，そのまま訳してしまいました。さすがにシュレヒトさんは，そのまま訳しませんでした。mit を使って旨く処理しました。

S：deutsche und japanische Unternehmen liefern sich mit ihren Produkten ...einen ... Konkurrenzkampf です。

田：sich einen Kampf liefern という言い方は知りませんでした。この sich は相互代名詞ですね。

S：そうです。相互代名詞です。

田：「しかし，... も事実である」は，私は大体日本文どうりで，Die Tatsache ...ist auch nicht zu leugnen.，シュレヒトさんは Es darf ... nicht übersehen werden. です。こういう言い方なども，ドイツ語の表現自体は知っているのですが，それが適切なところで使えるかどうかということは，やはりネイテイブ・スピーカーとの交流のなかで身につけていく以外ないですね。

S：そういうことですね。

しかし，経済界の対応は極めて好意的で，進出済みの日本企業からも悩みの声はほとんど聞かれなかった。

（田） Deutsche Wirtschaftskreise nehmen aber japanische Firmen im allgemeinen sehr zuvorkommend auf, und ich begegnete kaum einer bereits in der Bundesrepublik tätigen japanischen Firma, die sich über irgendwelche Schwierigkeiten beschwerte.

（S） Deutsche Wirtschaftskreise kommen japanischen Unternehmen jedoch sehr entgegen, und von japanischen Firmen, die auf dem deutschen Markt bereits Fuß gefaßt haben, sind kaum irgendwelche Klagen zu hören.

▶ **辞書にはご用心**

田:「経済界の対応」のところを，この日本語の通りに「対応」という名詞を使って訳してみようと思いまして，「対応」を和独辞典で引いてみたのですが，出ているのはどの辞書でも Entsprechung だけでした。ここでいっている「対応」とはもちろん違います。

S: 名詞として考えられるのは，Behandeln という，動詞を名詞にした形ですが，適切ではありません。

田: それで結局動詞で表現することにしたわけですが，シュレヒトさんもやはり動詞で訳していますね。私は aufnehmen を用い，シュレヒトさんは entgegenkommen ですが，例えば，私の場合，Aufnahme を使うのはどうでしょうか。

S: Aufnahme でいいのですが，目的語が必要ですから，それを 2 格で入れると Die Aufnahme der deutschen Wirtschaftskreise der japanischen Firmen ... となって，意味が明確ではなくなってしまいますね。

田: aufnehmen は「受け入れる」という意味ですから，「好意的」——私は zuvorkommend にしましたが——を入れなければなりませんが，シュレヒトさんの場合は sehr entgegenkommen となっていて，「好意的」に当たる語はありません。ということは，entgegenkommen の中にはその意味は含まれているということですか。独和辞典で entgegenkommen を引きますと，「出迎える，受け入れる」と出ているだけですが。

S: entgegenkommen には，好意が含まれています。ですから，sehr entgegenkommen といえるわけです。田中さんは，その文章に im allgemeinen を入れていますが，日本文にはそれに当たる言葉がありましたっけ。

田: えー，ないですね。

S: そうですね。でも，むしろあった方がいいですね。私もいま田中さんの訳を読んで，いいな，と思いました。この場合 in der

Regel とか im allgemeinen といった語を入れて，断定的な言い方にならないようにした方がいいですね。

田: 最後の,「進出済みの日本企業からも悩みの声はほとんど聞かれなかった」は，シュレヒトさんの方が，むしろいわゆる直訳で，私の訳が意訳なんですね。ときどきこういうことがあるんですね。つまり,日本人の方が意訳をして,ドイツ人が直訳をするというケースが。日本人が日本文をドイツ語に訳したものを読む機会があまりないので，私だけのことかも知れませんが，私が意訳する場合は，まず，直訳したドイツ語がはたしてドイツ語として通用するかどうか自信がないときなんです。それからもう一つは，逆説的に聞こえるかも知れませんが，日本語の表現にこだわって，それをなんとか訳出しようとすると意訳になってしまうのです。

ここでも——考え過ぎと言われるかもしれませんが—— Klagen（あるいは Beschwerden）を hören するというドイツ語が可能なのかどうか自信がなかった，ということと，「悩みの声」の「声」を訳出しようとこだわったために，かえって，意訳になってしまったのです。つまり，「声」に Stimme はこの場合使えないだろうということは分かるので，せめて，「悩みを訴えている」と動詞で表現してみようと思って，こんな訳になってしまったわけです。

S: 苦労されたことは分かるのですが，この einer Firma begegnen はちょっと ……。

田: begegnen は人間でないとやはり駄目ですか。

S: kaum jemandem aus einer japanischen Firma ならまあなんとか。

田: それから，この課題文は筆者がドイツで見聞したことの報告ですから，「… 聞かれなかった」も筆者自身が「聞かなかった」ということなので，主語を ich にしてみたのですが ……。

S: 結構です。

▶「進出済み」とは？

田: ここにもまた「進出」という言葉が，「進出済み」という言い方で出てきています。私は tätig にしましたが，これでは単にもうすでに活動しているという意味で，「進出済み」とはちょっと違うのですけれど。

S: tätig している会社はもうたくさんあるわけですが，tätig していても現地ではいろいろな問題があるんです。「進出済み」ということは，そういう現地での問題を既に克服しているということですよね。

田: いや，「進出済み」には，そこまでの意味はないんです。「進出」という行為を済ませて，そこでもう経済活動をしているという意味です。ですから，tätig でもいいのでしょうが，それでは，現在の状態を表現しているだけで，進出という行為を完了しているという意味はないということなんです。シュレヒトさんの訳の Fuß fassen は，「確固たる地歩を占める，根をおろす」という意味で，完了形になっていますから，これでいいと思います。ということは，ここでも私が前に使った sich durchsetzen でもよかったということですね。

S: いずれにしても，田中さんも私も，「進出」の訳で苦労しました。「進出」という言葉は，軍事用語ですね。Eine Firma dringt vor. という言い方もあるにはありますけれど，ちょっと露骨な感じがします。経済用語の中には軍事用語が多いんですね。ドイツ語でもそうですが，ドイツではなるべくそれを避ける傾向があります。

課題 7　イタリアめぐり

雲の切れ目からローマを見下したときには，古い銅版画そっくりだった。うねったチベル河に橋がいくつかかかって，石の建物が群がって，緑の木立がレースのように覆っていた。飛行機が旋回するにつれてこの銅版画が傾いて，大きな坂になって，いまにも突きあたるのではないかと思われた。それがやがて平面に復した中に滑かに着陸すると，もうラジオのベルカントーがきこえていた。

（竹山道雄　「ヨーロッパの旅」新潮文庫より）

(田中) Als ich durch die Wolkenfetzen auf Rom hinunterblickte, sah es ebenso wie ein alter Kupferstich aus. Über den sich hinschlängelnden Tiber führen einige Brücken, hier und da stehen Gruppen von steinernen Bauten, und wie eine Spitzenstickerei bedecken grüne Wäldchen die alte Stadt. Mit dem Kreisflug der Maschine neigte sich dieser Kupferstich, wurde zu einem

(W. Schlecht) Als ich durch die Wolkenlöcher auf die Stadt Rom hinabblickte, erschien sie mir wie ein alter Kupferstich. Über den sich hinschlängelnden Tiber spannten sich mehrere Brükken, die steinernen Gebäude standen eng gedrängt zusammen, und über allem lag, wie eine Spitzendecke, das Grün kleiner Wäldchen. Mit zunehmender Schräglage des Flugzeugs begann auch der

riesigen Abhang, und es kam mir vor, als würden wir jeden Augenblick dagegenstoßen. Als er bald darauf die Horizontalebene wiedergewann, landete die Maschine wie gleitend, und schon hörte ich ein Belcanto aus dem Radio.

Kupferstich sich zu neigen, bis er zuletzt eine schräge Ebene bildete und ich glaubte, wir müßten jeden Augenblick dagegenstoßen. Als das Flugzeug wenig später auf der in die Waagrechte zurückgekehrten Fläche aufgesetzt hatte, war aus dem Bordlautsprecher auch schon ein Belcanto zu hören.

雲の切れ目からローマを見下したときには，古い銅版画そっくりだった。うねったチベル河に橋がいくつかかかって，石の建物が群がって，緑の木立がレースのように覆っていた。

(田) Als ich durch die Wolkenfetzen auf Rom hinunterblickte, sah es ebenso wie ein alter Kupferstich aus. Über den sich hinschlängelnden Tiber führen einige Brücken, hier und da stehen Gruppen von steinernen Bauten, und wie eine Spitzenstickerei bedecken grüne Wäldchen die alte Stadt.

(S) Als ich durch die Wolkenlöcher auf die Stadt Rom hinabblickte, erschien sie mir wie ein alter Kupferstich. Über den sich hinschlängelnden Tiber spannten sich mehrere Brücken, die steinernen Gebäude standen eng gedrängt zusammen, und über allem lag, wie eine Spitzendecke, das Grün kleiner Wäldchen.

田: 今回は，著述家の文章です。竹山道雄氏はもともと独文学者で，ゲーテやニーチェの研究家，翻訳家として知られていますが，文明批評家としても活躍しました。竹山氏は，日本の西欧研究家によくみられるような西洋一辺倒の人でなく，また時流に迎合することなく，常に公正，冷徹な目で世界を見ていた人でした。

▶ 情景描写を訳すのは，よい勉強になる

田: この文章は，紀行文の冒頭ですが，風景描写ですので，情景が目の当たりに浮かぶように訳さなければなりませんから，大いに勉強になります。

S: 最初の文は，大体同じ組みたて方になっていますね。

田: そうですね。全体として，今までのものより，問題は割合少なかったように思います。そういうわけですから，多少細かいところにも触れることにして，始めからいきます。

まず「雲の切れ目」ですが，私は Wolkenfetzen，シュレヒトさんは Wolkenlöcher と訳しました。私にもその違いは分かります。結局「雲の切れ目」をどう頭に描いたかの違いで，私は，綿を千切ったように浮かんでいる雲の間，と直感したのですが，シュレヒトさんは，大きな雲の切れ目，と理解したということだと思います。「雲の切れ目」となっているのですから，著者のいっているのは，Wolkenlöcher のことでしょうね。「見下ろす」は，私は hinunterblicken，シュレヒトさんは hinabblicken ですが，この hinunter と hinab の違いはいちど確かめたいと思っていました。

S: 違いはありません。ただ私の語感から言いますと，hinab の方が多少文学的という感じがします。

田: 次は，シュレヒトさんは Rom の前に die Stadt を補いましたが，これは何か理由があるのでしょうか。

S: 先ほど田中さんは，この文章が或る紀行文の冒頭だといわれました。私は，それは知らなかったのですが，冒頭の文ではないかなと思いまして，もしそうだとすると，Rom が突然出て来ると——もちろん Rom を知らない人はいませんが——読者はすぐには，イタリアのローマかどうか把握出来ないこともあるのではないかと考えて，多少インフォメイションという意味で，Stadt を入れました。

▶ aussehen と erscheinen

田: なるほど。この文の主文にあたる「そっくりだった」に，違う動詞，つまり，私は aussehen を，シュレヒトさんは erscheinen を使いましたが，これはまあ大体同じと考えていいでしょうね。

S: いえ，そうでもないんです。細かいことをいいますと，aussehen ですと，論理的でないといえないこともないんです。つまり，

als に始まる文は，過去における一回の出来事ですから，aussehen ですと，見下ろしたその時は古い銅版画のようだったけれど，その後はもうそうではなかった，という理屈も成り立つわけです。たまたま見下ろしたとき，自分には銅版画のように見えた，という主観的なことですから，sie (die Stadt) erschien mir の方が，まあ論理的といえるわけです。

それから，田中さんは，多分「そっくり」ということで，ebenso を入れたのだと思いますが，これも細かいことですが，この ebenso は，なにか前に述べたことに関連した ebenso (… と同様) ととれないこともないので，むしろない方がいいと思います。

田: 次の文は，かなり表現が違います。まず「橋が … かかって」ですが，動詞が，私は führen，シュレヒトさんは sich spannen です。これは，sich spannen の方がその様子が目に浮かぶようで，いいなあ，と思いました。

S: führen の方が機能的です。「橋がある」，だから渡ることが出来るということです。sich spannen は，情景描写的です。ただ sich spannen というとやや昔風の橋を思い浮かべますが，でも，über das Tal spannt sich eine Autobahnbrücke といいますから，かならずしも ……。

▶ einige と mehrere

田: 細かいことですが，「いくつか」を私は einige にし，シュレヒトさんは mehrere です。お聞きしたいのは，einige の方が少ない数，と理解していいのかということですが。

S: これは誤解されているので，はっきりさせておいた方がよい問題だと思います。まず，einige の方が mehrere より少ない数を表わすとはいえないということです。einige は「二，三の」というふうに日本では理解されているようですけれど，決してそうではないんですね。相対的なんです。例えば Diese Universität hat 40 000 Studenten. Einige dieser Studenten haben längere Zeit im

Ausland studiert. といった場合，二，三人ではありませんからね。einige と mehrere とを数で比べることは，たいへん難しいです。この文でも，どちらに訳しても変りはありません。

田: 次の「石の建物が群がって」ですが，この「群がって」を私は，私の日本語感覚がおかしかったのかも知れませんが，間違って理解していたようです。私は，寄り集まったものが数個所に点在しているように考えてしまったのです。

S: ああ，それで hier und da としたのですね。

田: そうなんです。シュレヒトさんの訳をみて，あれっ，と思いまして，先ほど広辞苑その他の国語辞典で「群がる」を調べてみたのですが，どれにも「一個所に多くのものが寄り集まる」と出ていました。ということで，シュレヒトさんの eng gedrängt zusammenstehen が正しいし，適訳ですね。実は私も，実際に空からローマを見下ろしたことがあって，石の建物が群がっているのは，一個所ではなかったように記憶していたものですから，ついいわなくていいことまでいってしまったということかも知れません。

S: 実は私もそこまで考えて訳したわけではないんです。たしかに石の建物がかたまってあるのは，実際には一個所ではありませんね。ですから，私の訳でも必ずしも一個所ということをはっきり言い表わしているわけではないんです。ただここでは，石の建物がかたまってある，というその様子をいっているだけですから，ただその通り訳したということです。

▶ Bauten と Gebäude

田: その「建物」ですが，私は Bauten，シュレヒトさんは Gebäude ですね。私が Bauten としたのは，Gebäude が，いわゆる家の形をしたものであるのに対して，Bauten は Tor とか Triumphbogen, Kolosseum とかいったもの，それらをすべて含めた総称になるかなと考えて，Bauten にしたのですが。

S: ああ，なるほど。Gebäude と Bauten との区別はおっしゃる

通りなんですが，Bauten は全てを含めた総称ではありません。ですから，Bauten というと普通の家などは入らないんです。そしてまた，Gebäude というと，田中さんの挙げたような歴史的な建造物は入りませんから，どちらも 100 パーセントじゃないんですね。

▶「緑の木立」は冗語か

田: 次は「緑の木立がレースのように覆っていた」です。シュレヒトさんの訳をみて，思い出したことがあるのです。十年以上前のことですが，日本語の詩をドイツ語に訳したことがあるんです。その中に「高い秋の空 ...」という一節がありまして，私はそれをそのままドイツ語に訳して，ドイツ人に見せたところ，そのドイツ人は「空はいつも高いんだ」といったのです。ここでも，私は，「緑の木立」を grüne Wäldchen とそのまま訳しましたが，シュレヒトさんは，das Grün kleiner Wäldchen とされていますね。「緑の木立」というのは，一種の Pleonasmus なんでしょうね。

S: そうですね。そういうことももちろん考えましたけれど，状況からいっても少し抽象的に訳した方がいいと考えてこう訳したのです。つまり，飛行機から見て Baum なのか，Wald なのか，ほんとうははっきり見えないわけです。見えるのは緑ですから。そういうこともあって，緑を主語にしたのです。

▶「覆う」と何も見えない

S: むしろここで，すこし抵抗があったのは，「覆っていた」なんです。「覆う」はドイツ語にすると田中さんが訳されたように，bedecken ですが，bedecken はカバーすることですから，そうするとなんにも見えなくなってしまうのです。そこで私は <u>über</u> allem <u>lag</u> と訳したわけで，この über が bedecken に当たるんです。

田: 私はその bedecken を使いましたが，「レースのように」がありますから，緑が町を見えなくなるように覆ってしまっている，とは受け取らないと思いますが。

S: まあ，そうですね。ただ bedecken という言葉は，それ自体

ですでに完全にカバーするという意味ですから，たとえ「レースのように」があっても，bedecken を使うことには抵抗がありました。wie eine Spitzendecke は，もうすこし文学的にいうと，gleich einer Spitzendecke ですね。その方がいいかも知れません。

田: そして，私は Spitzendecke ではなく，Spitzenstickerei としましたから，シュレヒトさんが拘っておられる bedecken の意味を多少とも和らげているのではないかと思います。それから，bedecken は他動詞ですから，目的語が必要なので，本文にはない die alte Stadt を補いました。

> **飛行機が旋回するにつれてこの銅版画が傾いて，大きな坂になって，いまにも突き当たるのではないかと思われた。**
>
> (田) Mit dem Kreisflug der Maschine neigte sich dieser Kupferstich, wurde zu einem riesigen Abhang, und es kam mir vor, als würden wir jeden Augenblick dagegenstoßen.
>
> (S) Mit zunehmender Schräglage des Flugzeugs begann auch der Kupferstich sich zu neigen, bis er zuletzt eine schräge Ebene bildete und ich glaubte, wir müßten jeden Augenblick dagegenstoßen.

▶「... につれて」の mit

田:「... するにつれて」は，課題 4 で，「情報の発達につれ」の場合，mit を使うと時間の経過が表現出来るという指摘があったのを思い出して，早速それを応用したのですが，そのときも，シュレヒトさんは，そこに immer größer werdend という現在分詞を基礎にした冠飾句を入れて，「... つれて」をよりはっきりさせていましたね。

S：そうですね。その折にもいいましたが，mit には微妙に違う用法がいろいろありますので，mit だけではちょっと紛らわしいことがあるのです。ですから mit を使うときは，その個所ではどういう意味で用いられているか，出来るだけはっきりさせておいた方がいいのです。

田：それでなにか現在分詞を入れようと思ったのですが，なかなか思い浮かばなかったのです。シュレヒトさんの zunehmend を見て，なるほどと思いました。私の場合，次の名詞が Kreisflug ですが，ここに zunehmend を入れても大丈夫ですか。

S：いいですよ。mit zunehmendem Kreisflug ですね。

田：その「旋回」ですが，私はその通り Kreisflug としましたが，シュレヒトさんは Schräglage とされましたが……。

S：Schräglage はたしかに「旋回」ではないんですが，「斜めに傾いた姿勢」ということですね。ここでは着陸するための準備態勢のことをいっているわけで，Kreisflug というと，ただ回って飛ぶことですので，次の「この銅版画が傾いて」に相応するのは Schräglage の方がいいと思ってこれにしたのです。

田：なるほど。ただ，日本語の「旋回」は回ることでもありますが，飛行機が曲線を描いて進路を変えることでもあるので，ここで旋回といっても，ただぐるぐる回るという意味だけではないんですね。

その次の「銅版画が傾いて」ですが，実は私もシュレヒトさんがされたように，beginnen を入れようかどうしようか大いに迷ったのです。結局いれなかったのですが。

S：必ずしも入れる必要はないですね。むしろ入れない方がいいかもしれませんよ。

▶ 並列にするか，帰着とするか

田：「大きな坂になって」ですが，私は「銅版画が傾いて」に並列的に続けました。シュレヒトさんは bis er zuletzt で繋ぎました。

S：その「大きな坂になって」ですが，田中さんの zu einem riesigen Abhang werden は，bildlich な表現ですね。私のは，いわば，物理学の言い方です。eine schräge (または schiefe) Ebene bilden というのは物理用語ですから。

田：「銅版画が傾いて」「大きな坂になって」とを，私は刻々と変る状況の描写ととらえて，別々にたたみかけるように訳してみたのですが，シュレヒトさんは，bis er zuletzt を用いて，後者を前者の帰着と捉えています。その方がドイツ人にとっては合理的なんでしょうね。

S：そうですね。

田：それから，これは正書法のことなんですけれど，シュレヒトさんの文の ..., bis er zuletzt eine schräge Ebene bildete und ich glaubte, ... のところですが，bildete と und の間にはコンマが必要なのではありませんか。主語が違いますから。

S：たしかに学校文法的にはコンマが必要なのですが，文体的にはない方がいいのです。といいますのは，bis から ich glaubte までは一気なんです。コンマを打ってしまうと，ここで切れてしまって迫力がなくなってしまうのです。

田：なるほど。それから，シュレヒトさんの訳のなかには，「大きな」がありませんが，これは意図的なんでしょうか，それともうっかり忘れたのでしょうか。

S：ああ，これは忘れたのですね。入れるとすれば，eine riesige schräge Ebene ですが，うーん，なぜかない方がいいんですね。Ebene の中にもうそれは含まれているのではないかな。「銅版画」は Ebene とは元来いいませんから。多分意図的に忘れたのかもしれません。(笑声)

▶ es kam mir vor では緊迫感に欠ける

田：次の「いまにも突き当たるのではないかと思われた」ですが……。

S: 田中さんは「思われた」を es kam mir vor とされましたね。もちろんこれでいいのですが，この場合ちょっとのんびりした感じがするんです。恐怖とまではいかないにしても，筆者は，本当に突き当たるのではないかと一瞬ドキッとしたのですから，es kam mir vor だとやや距離を置いた感じになるのです。私は，ich glaubte, wir müßten ...としました。この müßten にその一瞬の恐怖の気持ちが表わされているんです。

それがやがて平面に復した中に滑かに着陸すると，もうラジオのベルカントーがきこえていた。

(田) Als er bald darauf die Horizontalebene wiedergewann, landete die Maschine wie gleitend, und schon hörte ich ein Belcanto aus dem Radio.

(S) Als das Flugzeug wenig später auf der in die Waagrechte zurückgekehrten Fläche aufgesetzt hatte, war aus dem Bordlautsprecher auch schon ein Belcanto zu hören.

田: ここでは，また私の訳がかなり意訳になっています。それは，「平面に復した中に」の「中に」をどう訳したらよいか分からなかったからなんです。

S: こういうのは難しいですね。日本語ではこういった言い方をよくしますね。

田: それで，仕方なく，「その大きな坂が平面を取り戻したとき，飛行機は滑かに着陸した」というドイツ語にしたわけですが，私は，als er (der Abhang) ... die Horizontalebene wiedergewann という自分の訳が気に入っているんです。

S: ええ，状況がよく分かる面白い訳だと思いますよ。

田: シュレヒトさんは，その「中」を Fläche として，なんとか訳されました。

S: ええ，私のはもしかしたら，ちょっと無理をした訳だったかもしれません。

▶ nachdem と同じ意味の als

田: ひとつお聞きしたいのは，シュレヒトさんの als の文章の時制が，過去完了になっています。これはやはり，着陸したのと，ベルカントが聞こえてきたのは，同時ではなくて，多少の時間のずれがあるということででしょうか。

S: ええ，そういうことなんです。学校文法的にいえば，als でなくて nachdem なのでしょうが，nachdem にするほど時間の間隔がないことと，nachdem では車輪が滑走路に付いたその瞬間の緊張感や安堵の気持ちが出ません。ですから，動詞も landen ではなくて，aufsetzen を使ったわけです。als のこういう使い方もあるのです。

田: 最後の，「もうラジオのベルカントーがきこえていた」というのは，ちょっと実際にどういうことなのかはっきりしないのですが，シュレヒトさんは機内放送と理解されたようですね。

S: そうではないんですか。

田: よくわからないのですね。一応ラジオといっていますが，著者にとっては，それはあまり問題ではなく，機内放送のことなんでしょう。やはり，Bordlautsprecher がいいでしょうね。

S: それから，「ベルカント」は唱法の一種ですから，ein Belcanto hören といえるのかどうか，私は音楽の専門家でないので，ちょっと自信がないんです。

田: 全体に関した質問なんですが，「飛行機」をシュレヒトさんは Flugzeug を，私は Maschine を使ってきましたが，これはドイツ人が耳にした場合何か違いがありますか。

S: どちらでも同じですね。Maschine の方がモダーンな感じがします。

田: それからもう一つ。私は，最初の文，「雲の切れ目からローマ… そっくりだった」は過去形，次の文の「うねったチベル河 … 覆っていた」は現在形にして，そのあとは最後まで，過去形にしたのです。これは，意図的にしたのです。つまり，二つ目の文は景色の描写なので，現在形にしたのです。あとは，出来事を語っていますので，また過去形にしたというわけです。

S: そういう書き方もありますね。この場合いいと思いますよ。ちょっと全部通して読んでみましょう。… いいですね。現在形にしたところは，つまり，銅版画のようなローマの風景の説明ですから，この文章の前の文，つまり最初の文の終わりをピリオドでなくて，コロン（：）にすると，それがはっきりしてもっとよくなりますね。



課題 8　自己教育ということ

> 教育とは教えたり教えられたりすることではない。つまるところ自分で自分を発見する行為であって，他人に教えられて自分がにわかに新しく変貌するなどということはあり得ない。仮に一見そう見える変化が他人によって引き起こされたとしても，それはもともと自分の中にその素地があった証拠である。教育家は他人の中に変化を引き起こすための手援け，ないしは環境作りをする以上のことはなし得ない。人間は誰でも，結局のところ，自分自身を再体験するだけなのである。
>
> （西尾幹二　「日本の教育　知恵と矛盾」中央叢書より）

（田中） Bei der Erziehung handelt es sich nicht darum, etwas zu lehren oder gelehrt zu werden. Sie ist schließlich eine Handlung, um das eigene Selbst zu entdecken. Es ist ausgeschlossen, daß ein Mensch sich dadurch plötzlich völlig verwandelt, daß er von einem anderen gelehrt wurde. Auch wenn eine solche Veränderung von einem anderen hervorgerufen wurde, so

（W. Schlecht） Erziehung bedeutet nicht, zu lehren oder gelehrt zu werden. Erziehung besteht vielmehr darin, sich selbst zu entdecken, und es wäre falsch zu glauben, daß jemand, der von einem anderen gelehrt wurde, sich dadurch plötzlich verändert hätte. Auch wenn eine Veränderung auf den ersten Blick den Eindruck erweckt, als sei sie durch einen anderen her-

bedeutet dies den Beweis dafür, daß er bereits von Natur aus die Anlage dazu in sich hatte. Der Erzieher kann nichts weiter tun, als Hilfe zu leisten oder ein bestimmtes Milieu anzubieten, um in einem anderen eine Entfaltung zu ermöglichen. Was der Mensch tut, ist letzten Endes nichts anderes, als sich selbst immer wieder von neuem zu erleben.

vorgerufen worden, ist sie doch nur möglich gewesen, weil die Grundlage dafür in einem selbst vorhanden war. Die Rolle des Erziehers beschränkt sich darauf, Hilfe zu leisten bzw. geeignete Voraussetzungen zu schaffen, um eine Veränderung in einem anderen zu bewirken. Jeder Mensch tut nämlich nichts anderes, als sich selbst immer wieder neu zu erfahren.

教育とは教えたり教えられたりすることではない。つまるところ自分で自分を発見する行為であって，他人に教えられて自分がにわかに新しく変貌するなどということはあり得ない。

（田） Bei der Erziehung handelt es sich nicht darum, etwas zu lehren oder gelehrt zu werden. Sie ist schließlich eine Handlung, um das eigene Selbst zu entdecken. Es ist ausgeschlossen, daß ein Mensch sich dadurch plötzlich völlig verwandelt, daß er von einem anderen gelehrt wurde.

（S） Erziehung bedeutet nicht, zu lehren oder gelehrt zu werden. Erziehung besteht vielmehr darin, sich selbst zu entdecken, und es wäre falsch zu glauben, daß jemand, der von einem anderen gelehrt wurde, sich dadurch plötzlich verändert hätte.

田: 今日は評論文です。西尾幹二氏も先の竹山道雄氏と同様，独文学者で，専門はニーチェですが，文明評論家としても活躍中であることはシュレヒトさんもご存じですね。西尾氏の評論のいくつかは既に欧米数カ国語に訳されています。シュレヒトさんも二，三編ドイツ語に訳されましたね。

S: はい，訳しました。

田: 私も一編，シュレヒトさんの協力を得て訳したことがあります。ということで，二人とも西尾氏の論文については翻訳経験があるわけですが，その経験からいって，氏の文章は明快かつ論理的で，そのままドイツ語に置き換えても全く問題がないような表現と構築になっているということについては，シュレヒトさんも異論がない

と思います。ただ今回のは，シュレヒトさんにとって，ちょっと，はっきりしない個所があったようにお見受けしますが。

S：そうですね。一応私なりに解釈して訳しておきました。

▶ AはBである

田：では，初めからいきましょう。「教育とは ... ではない」は，「AはBである」の構文を使ってそれを否定文にすればいいわけですが，「AはBである」にはいろいろな言い方がありますね。まず，A ist B，それから，es handelt sich bei A um B ......。

S：A bedeutet B とか A stellt B dar ......。

田：ここでは，私が es handelt sich bei A um B を使い，シュレヒトさんは，A bedeutet B にしました。

▶ またまた冠詞について

田：私にとって問題なのは，また冠詞なんですが，シュレヒトさんは，Erziehung bedeutet ... と，Erziehung が無冠詞です。これは，関口在男氏いうところの，例えば „Eifersucht beweist Liebe.“ とか，„Gefühl ist alles.“ などにみられるような，名詞を力強く表現する「掲称的用法」ということでしょうか。

S：この Erziehung は動詞に近い意味で使っているのです。

田：あっ，なるほど。動作名詞ですね。動作名詞は大体無冠詞ですね。

S：次に来る説明も，zu lehren oder gelehrt zu werden と動詞による表現ですね。ですから Erziehung も「教育すること」という praktisch な意味が込められた方がいいわけです。

田：ただ，私の場合のように，es handelt sich um を使うと，やはり Erziehung に冠詞は必要ですね。

S：そうですね。その言い方ですと，やはり「教育」という概念になりますから。

田：「掲称的用法」という見方からいっても，es handelt sich um を使うと掲称的な意味は薄れますからね。「教えたり教えられたりす

ること」は，当然 zu-不定詞になるわけですが，私が lehren に etwas を付けたのは，文法的に 4 格目的語が必要かなと思ったからなのですが，これは不可欠ではないのですね。

S: obligatorisch ではありません。

田:「つまるところ自分で自分を発見する行為であって」ですが，「自分で自分を発見する」のところは，まあ大体同じような言い方になっています。「自分を」は，私が das eigene Selbst，シュレヒトさんが sich selbst です。私も sich selbst にしようかと思ったのですが，すこし硬い言い方にしてみようかと思ってこうしました。「自分で」は，selbst と訳せないことはありませんが，ドイツ語の場合，das eigene Selbst entdeckenで，もうその意味は含まれていますから，入れませんでした。シュレヒトさんも入れてませんね。

S: はい。そこまでいう必要はドイツ語の場合ないですね。田中さんの Handlung ですが，「行為」はたしかに Handlung で，そういえないことはないんですけれど，教育のように長時間をかけて成される行為については，ドイツ語では Handlung は適切ではないんですね。私は，「行為」という言葉を訳さないで，Erziehung besteht vielmehr darin, ... としました。

田: in etwas bestehen は，「(本質は) ... にある」，という意味ですが，事物の本質や真意，内容などを定義するときよく使う言い方ですね。

▶ ドイツ人と Ausgeschlossen!

田: さて，次の文ですが，主文の「... あり得ない」を，私は，es ist ausgeschlossen と，かなり断定的な言い方にしましたが，シュレヒトさんは，接続法を使って随分控え目な表現になっていますね。

S: ausgeschlossen はドイツ人が好んでよく使う言葉ですが，私はあまり好きな言葉ではありません。

田: 最近はあまり聞かなくなりましたが，二十数年前初めてドイツへ行ったときには，日常会話でもよく耳にしました。ドイツ人が

„Ausgeschlossen!“ というのを。

S: ドイツ人の中で生活するときは，この „ausgeschlossen“ 的生き方は必要なんです。そうしないと生きていけません。日本では，そういう自分を固守するような生き方は受け入れられませんね。柔軟でないと駄目です。ドイツへ時おり帰る度に，この違いを痛感します。

余談になりますが，こういうことがあったんです。私がかつて，ある日本の出版社で仕事をしていたとき，一人の若いドイツ人が私の課に入ってきました。私はかれにコンピュータの操作などいろいろ教えたのですが，あるときデータが全部消えてしまったのです。かれは私のところへとんで来て，データが消えてしまったんですが，どういうことでしょう，というんです。私には，データが消えてしまうのは，或るキイを押したからだと分かっていたので，あなたはこのキイを押したでしょう，というと，かれは，Nein, nein! Ausgeschlossen! というのです。まさにドイツ的です。まず自分を守ることが非常に大事なんです。日本人でしたら，「押した覚えはないんですけれど，もしかしたら，...」というような言い方をしますね。ドイツ人は，まず Nein! なんです。結局，かれがそのキイを押していたことは，あとで分かったのですが，とにかくまず，Nein, ausgeschlossen! なんですね。

田: われわれも，ドイツで交通事故を起こしたら，絶対謝ってはだめだ。謝ったら自分の非を認めたことになるから，とよく言われましたよ。

S: ドイツで生活すれば，やはりそうしなければなりませんね。

田: そこで，シュレヒトさんは，「... あり得ない」を断定的に訳さなかったわけですが ...

S: そして，es ist ausgeschlossen とか，es ist nicht möglich とかいうと，その Beweis をしなければならない，そういう立場に自分を置くことになるのです。まあ私としては，この程度の言い方が

いいのではないかと思ったわけです。

田:「他人に教えられて自分がにわかに新しく変貌するなどということ」というその副文章ですが，私の文の骨格は，まず主語を ein Mensch にして，「他人に教えられて」を「... 教えられることによって」という形にして，dadurch ... daß を使いました。シュレヒトさんのは主語を jemand にして，「他人に教えられて」を関係文にして jemand に続けています。そして主文との関係もあって，この副文は，非現実の接続法になっています。私が興味深く思うのは，シュレヒトさんが「他人に教えられて」を関係文にしたことです。私はそれは全く考えませんでした。「他人に教えられて」にはどうしても，instrumental の構文しか頭に浮かびません。

「変貌」ですが，このテキストには，あとにも「変化」という言葉が何回か出てくるので，それぞれ訳し分けた方がいいかなと思って，ここでは，verwandeln を使ってみたのですが，シュレヒトさんは verändern ですね。

S: verwandeln の方が強い感じです。全体が変わるということですね。

田: とすると，「変貌」には verwandeln が合っているように思います。

仮に一見そう見える変化が他人によって引き起こされたとしても，それはもともと自分の中にその素地があった証拠である。

（田） Auch wenn eine solche Veränderung von einem anderen hervorgerufen wurde, so bedeutet dies den Beweis dafür, daß er bereits von Natur aus die Anlage dazu in sich hatte.

（S） Auch wenn eine Veränderung auf den ersten Blick den

Eindruck erweckt, als sei sie durch einen anderen hervorgerufen worden, ist sie doch nur möglich gewesen, weil die Grundlage dafür in einem selbst vorhanden war.

▶「仮に一見そう見える変化」

田: 実は，始めに申しあげた，シュレヒトさんが誤解されたところがある文章というのはこの一節なのです。問題の個所は，最初の「仮に一見そう見える」のところです。シュレヒトさんは，「一見そう見える変化」を「一見他人によって引き起こされたかのように見える変化」と理解されたようですね。

S: そうではないんですか。

田: 「にわかに新しく変貌する」という変化のことなんです。

S: でも，もしそうだったら，「一見そう見える」とは言わないでしょう。

田: たしかにちょっと誤解を招きそうな表現ですが――実は私もはじめシュレヒトさんと同じように考えたのです――しかし，そう解釈すると，次の「他人によって引き起こされたとしても」が意味をなさなくなってしまいます。ですから，この「一見そう見える」は，eine solche Veränderung ということです。

S: ああ，なるほど。分かりました。

田: それに続く「それはもともと自分の中にその素地があった証拠である」ですが，まず，シュレヒトさんは，「証拠である」と訳さないで，「もともと自分の中にその素地があったが故にこそ，その変化が可能であった」という具合に訳していますね。

S: それは，前の「一見そう見える」の文章の解釈と関係があるのです。つまり，私が解釈したような文意だと，それは，「証拠」にはならないからです。仮にある変化が一見他人によって引き起こされたかのように見えても，それは即その人にもともとその素地が

あった「証拠」にはなりません。しかし，「その変化はもともと自分の中にその素地があったからこそ可能であったのだ」とすれば，筋が通ります。そういうことで，こういう訳になったわけです。

田: 私の文でしたら，「証拠」Beweis でいいですね。

S: 問題ありません。

教育家は他人の中に変化を引き起こすための手援け，ないしは環境作りをする以上のことはなし得ない。

(田) Der Erzieher kann nichts weiter tun, als Hilfe zu leisten oder ein bestimmtes Milieu anzubieten, um in einem anderen eine Entfaltung zu ermöglichen.

(S) Die Rolle des Erziehers beschränkt sich darauf, Hilfe zu leisten bzw. geeignete Voraussetzungen zu schaffen, um eine Veränderung in einem anderen zu bewirken.

田: 文章の骨組みは，「教育家は，... する以上のことはなし得ない」です。私は，当然，といいましょうか，nichts weiter tun können, als ... を使ったわけですが，シュレヒトさんは，「... に限定される」という逆からの言い方にしました。私はシュレヒトさんのこういう発想にいつも感心するのですけれど，敢えてお尋ねしますが，私がやったように訳すことも出来たであろうのに，なぜこういう逆からの表現にされたのでしょう。

S: うーん，私の感覚からいうと，必ずしも逆とはいえなんですけどね。

田: なるほどねぇ。シュレヒトさんは sich beschränken auf を使いましたので，「... なし得ない」のところは，主語を「教育者」ではなく，「教育者の役割」にして処理されたわけで，このへんは感心

するほかありません。その後の文構造は zu-不定句を使い，それに um ... zu を付けるというやり方で，同じです。

▶ 一つの単語が包含する意味内容が，日独ではかならずしも一致しない

S: そうですね。「環境作り ...」ですが，私は「環境」を Voraussetzung としました。田中さんの Milieu とは同じ意味ではないんですが，内容的には結局同じことだと思うのですけれど。「環境」をどう解釈するか，ということなんでしょうが，言ってみれば Milieu も一つの Voraussetzung なんですね。日本語の「環境」に当る言葉をここで使うのは，ドイツ語としてはちょっとしっくりしないのです。この場合，日本語の「環境」という言葉に拘る必要はないと思いますね。

田: Voraussetzung で，著者のいっていることを十分伝えていると私は思います。因みにこの Voraussetzung ですが，日本語は，これに「前提」という訳語を対応させているのですが，私の拙い翻訳経験からいって，なにかちょっと違うのではないかという印象をたびたび受けているのです。日本語で「前提」と言っているのを，Voraussetzung と訳して，ドイツ人にそのつど違った表現に直されたことが往々にしてあるのです。

S: あるでしょうね。私にも経験があります。いまちょっと具体的な例が思い出せませんが，日本語で「前提」となっているところを，Voraussetzung とは訳せないことがよくありました。それから，田中さんの ein bestimmtes Milieu anbieten ですが，この anbieten がちょっとひっかかるのです。原文も「環境作り」ですから，schaffen でいいと思うのですが，どうして anbieten にしたのですか。

田: たしかに，日本語は「環境作り」ですが，その意味するところは，環境をつくってやる，つまり，環境を与えてやる，提供してやる，ということですから，anbieten にしたのです。

S: ああ，なるほどね。そういうことであっても，anbieten は

ちょっと消極的ですね。つまり，anbieten だと，相手はそれを拒否することが出来る可能性を持っているのです。やはりここは，schaffen がいいと思いますね。それに，Milieu と anbieten とはドイツ語では，しっくり合わないのです。

田: ああ，そうですか。日本文はただ「環境作り」ですが，ドイツ語では ein Milieu anbieten だけでは物足りないというか，完全でないなような気がしたので，私は，ein bestimmtes Milieu と，bestimmt を入れました。

S: これは必要です。おっしゃる通りです。私も同じ理由で，geeignete Voraussetzungen としました。

田:「変化を引き起こす」は，私のは ... eine Entfaltung ermöglichen で，シュレヒトさんは ... eine Veränderung bewirken です。シュレヒトさんは「変化」を言葉通りに訳したわけですが，私は，教育ということに関連付けて，Entfaltung にしてみました。そうすると，動詞はどうしても ermöglichen ということになります。

S: そうですね。ここでは，私の方が直訳ということでしょうか。

人間は誰でも，結局のところ，自分自身を再体験するだけなのである。

(田) Was der Mensch tut, ist letzten Endes nichts anderes, als sich selbst immer wieder von neuem zu erleben.

(S) Jeder Mensch tut nämlich nichts anderes, als sich selbst immer wieder neu zu erfahren.

田: 前半の「人間は誰でも」のところ，なんで私は jeder Mensch と簡単に訳さなかったのか，いま不思議に思うのですが ......。

S: 田中さんの訳もいいドイツ語ですよ。ここで問題なのは，や

はり「再体験」ですね。

▶ erleben と erfahren

S: まず「体験する」ですが，ここでは erfahren がいいと思います。

田: シュレヒトさんは，このテキストをずっと読んできて，著者の言わんとしていることは分かった上で，erfahren がよいといわれるのですから，そうなのでしょうが，これも先ほどの Voraussetzung と同じような錯誤があるのかも知れません。われわれは，「体験する」は erleben であると，この日独両語を同意と思っているわけです。そして erfahren は，「経験する」という日本語を対応させています。そうすると，どうしてもここでは，erleben を使いたくなるのです。

S: 「体験する」が erleben でいい場合ももちろんあります。例えば，「私は数年アフリカで暮らしました。いろいろなことを体験しました。」この場合，„Ich habe vieles erlebt." でいいんです。多分，erleben は，日本語の「遭遇する」に近いのではないでしょうか。その対象は「出来事」で，それに対する対応は皮相的です。erleben は「知識」とか「学ぶ」とかいったことはあまり関係がないんです。erfahren は「身につける」ということです。

田: いずれにしても，erleben と erfahren とは，Synonym であることは間違いないわけですから，ちょっと Duden の Synonymwörterbuch でみてみましょうか。

erleben: durch etwas, was jmdm. meist von außen, oft auch plötzlich und völlig überraschend zustößt oder zuteil wird, betroffen und in seiner Empfindung beeindruckt werden.

erfahren: durch etwas, was mehr oder weniger in das eigene Leben eingreift, an Wissen und Kenntnis bereichert und in seinen Anschauungen beeinflußt

werden, oft erst nach einem gewissen Zeitraum, in dem sich eine Entwicklung vollziehen kann.

ということで，シュレヒトさんのおっしゃったことと同じですね。そうだとすると，erfahren:「聞いて知る，経験する，見聞する」，erleben:「身をもって知る，体験する，体得する」という独和辞典の訳とはちょっと違う，というより，まさに逆の感じさえします。ただ，いまふと思ったのですが，著者は，この Duden に出ているような意味において，ここで「体験」という言葉を使っているのではないかと。

S: うーん，しかし始めから述べてきたことと——少なくともドイツ語だと—— erleben ではどうしても合わないんですね。

▶「再体験」

田: 分かりました。そこで「再体験」ですが，これは，wieder erleben ではいずれにしてもおかしいのではないかと，私も思いました。wieder だと，かつて既に一度体験していて，もう一度ということになりますが，ここでいっているのは，そういうことではなくて，むしろ「改めて」といういうような意味ですからね。それで，von neuem にしました。

S: von neuem もやはり，もう一度ということですが，immer wieder が入っていますからいいですね。

田: シュレヒトさんも，immer wieder を入れていますから，同じように解釈されたのだと思いますが,「再体験する」ということは，自分自身を再三体験することだ，と解釈していいと思いますね。そして，シュレヒトさんは，von neuem でなくて neu にされましたから,「その度に新たに」ということで，われわれの解釈が正しいとすれば，いちばんいい訳ではないでしょうか。



課題 9　利己主義の相対化

近ごろの流行ものである公害さわぎにしても，要するに，自分の都合だけを考えての，利己主義の戦いということになる一面がある。車の排気ガスにしても，ゴミの処理にしても，自分の出す分は知らぬ顔で，他人の出す分だけ文句を言うというような場合が少なくない。日曜日や祭日に外出して，人ばかり多くて，何の見物も出来なかったといって，むやみに人が出るからいけないなどと言ったりするが，自分自身も出かけて行って，その人ごみをつくっていることには気がつかないことが多い。
車の混雑でも，空気の汚染でも，同じことである。

（田中美知太郎「全集 15」筑摩書房より）

（田中） Auch jener Lärm um die Umweltverschmutzung, der in der heutigen Zeit Mode geworden ist, weist schließlich den Charakter eines Konflikts des Egoismus unter den Menschen auf, daß jeder ausschließlich auf seinem eigenen Interesse besteht. In bezug auf das Problem der Auspuffabgase der Autos z.B. oder auch auf das der Müll-

(W. Schlecht) Auch bei dem in jüngster Zeit so verbreiteten Lärm um die Umweltverschmutzung findet sich letztlich ein Interessenkonflikt, indem jeder einzig auf seinen eigenen Vorteil bedacht ist. Ob Autoabgase oder Müllbeseitigung, es kommt nicht selten vor, daß wir vor dem von uns selbst verursachten Schaden

abfuhr können wir nicht selten den Fall beobachten, daß man sich über das, was andere verursachen, beschwert, wobei man die Tatsache nicht beachtet, daß man auch selbst zu dem Schaden beiträgt. Wir hören oft jemanden, der am Sonntag oder an einem Feiertag ausging, sagen, es habe von Menschen gewimmelt und er habe sich nichts ansehen können. Er beklagt sich darüber und kritisiert, daß allzu viele Leute ausgehen. Er kommt aber dabei oft nicht auf den Gedanken, daß er selbst ausgeht und dazu beiträgt, dieses Menschengedränge herzustellen.

Das Gleiche gilt auch für das Gedränge der Autos auf der Straße und die Luftverpestung.

die Augen verschließen, während wir die von anderen erzeugten Schäden anprangern. Wie oft beklagen wir uns darüber, daß wir uns, wenn wir an einem Sonn- oder Feiertag ausgegangen sind, vor lauter Leuten nichts ansehenkonnten. Wir schimpfen darüber, daß so viele Menschen unterwegs sind und übersehen dabei, daß auch wir, die wir ausgegangen sind, zu diesem Gedränge beitragen.

Nicht anders verhält es sich mit den Staus auf den Straßen und mit der Luftverschmutzung.

近ごろの流行ものである公害さわぎにしても，要するに，自分の都合だけを考えての，利己主義の戦いということになる一面がある。

（田） Auch jener Lärm um die Umweltverschmutzung, der in der heutigen Zeit Mode geworden ist, weist schließlich den Charakter eines Konflikts des Egoismus unter den Menschen auf, daß jeder ausschließlich auf seinem eigenen Interesse besteht.

（S） Auch bei dem in jüngster Zeit so verbreiteten Lärm um die Umweltverschmutzung findet sich letztlich ein Interessenkonflikt, indem jeder einzig auf seinen eigenen Vorteil bedacht ist.

田: これは，ギリシア学者，古典文献学者として有名な，田中美知太郎氏のエッセイの一部です。訳し終わって自分のドイツ文を読んで思ったのですが，全くおもしろくないんです。

S:「訳」としては，つまりドイツ語として，どこにも間違いやおかしいところはないし，そういう意味で全く破綻はありませんから，和文独訳の答案としたら 100 点ですが，たしかにエッセイという感じが欠けていると言えますね。

田: 上の文章にしても，私のは，ただ一字一句訳し並べているだけですね。「近ごろの流行ものである公害さわぎ」は，私は「流行ものである」を Mode werden の完了形にして，これを，Lärm を先行詞にした関係文にしました。シュレヒトさんは，「流行」を verbreiten として，その過去分詞を基礎にした冠飾句にしました。

S:「公害さわぎ」に Mode を結びつけるのは，ちょっとおかしいというか，合わないんです。

田: それは，日本語でも，ここで「流行」という言葉を使うのは，合わないといえば合わないのですが，そこに敢えて使ったところに，そういった一連の市民運動に対する著者の批判的態度が出ているのです。ですから，verbreiten だと「公害さわぎ」を皮肉っているという感じは出ないわけで，そういうところが，こういったエッセイを他国語に訳すときのむずかしさでもがあるのですね。

「利己主義の戦いという一面がある」なども，私は aufweisen を使って一字一句その通り訳しましたが，シュレヒトさんは，簡単に ein Interessenkonflikt とされて，日本語の語句を離れた訳ですが，この方がドイツ文としてはエッセイらしく簡潔でいいと思います。このへんのところに，私のドイツ文が冗長で，おもしろくないという原因があるのかも知れませんね。

▶ daß と indem

S: たしかに，こういったエッセイは，そういうことも考慮して，訳す必要がありますね。次の「自分の都合だけを考えての」という副文章ですが，田中さんは daß という接続詞を使いましたが，これは den Charakter を説明する daß- 文章ということだと思いますが——これでももちろん分かりますが——ドイツ人の語感からいうとぴったりしません。

田: シュレヒトさんは indem ですね。微妙な違いだと思いますが，今まで私がシュレヒトさんと共訳をしたり，私のドイツ語を直してもらったりしたときにも，私が daß としたところを，シュレヒトさんが indem に訂正された例がよくありました。その違いを説明していただけますか。

S: つまり，簡単にいってしまえば，この場合の daß は，「内容」の説明ですが，indem だと「理由」を説明することになるんです。「利己主義の戦いという一面がある」，それは，「どういう意味でかというと」という indem なんです。

田: なるほど。その「自分の都合を考えての」ですが，私は beste-

hen auf を使って，... daß jeder ... auf seinem eigenen Interesse besteht.（自分自身の利害だけに固執する）としましたが，むしろシュレヒトさんの，... indem jeder einzig auf seinen eigenen Vorteil bedacht ist の方が，日本語の通りですね。結局私は，auf et. bedacht sein（... を考慮する）という言い方が思い浮かばなかったということなんですが，どうしても，安直に自分の知っている言い方で，なんとか当てはめてしまうのです。

車の排気ガスにしても，ゴミの処理にしても，自分の出す分は知らぬ顔で，他人の出す分だけ文句を言うという場合が少なくない。

（田） In bezug auf das Problem der Auspuffabgase der Autos z. B. oder auch auf das der Müllabfuhr können wir nicht selten den Fall beobachten, daß man sich über das, was andere verursachen, beschwert, wobei man die Tatsache nicht beachtet, daß man auch selbst zu dem Schaden beiträgt.

（S） Ob Autoabgase oder Müllbeseitigung, es kommt nicht selten vor, daß wir vor dem von uns selbst verursachten Schaden die Augen verschließen, während wir die von anderen erzeugten Schäden anprangern.

▶ **「... にしても，... にしても」**

田: 今回のテキストは，どうも少し安易に訳してしまった感がしないでもありません。「車の排気ガスにしても，ゴミの処理にしても」など，当然，シュレヒトさんがやられたように，「...であれ ... であれ」の ob ... oder とか，ob ... ob とか，sei es ... sei es などを使う

べきでした。馬鹿の一つ覚えみたいに，in bezug auf では能がありませんね。

S：in bezug auf でももちろんいいのですが，das Problem は要りませんね。

田：そうですね。ob ... oder に続く文は倒置にはならないのでしたね。

S：はい，なりません。場合によっては，コンマでなく，ダッシュにしてもいいですね。

田：「... という場合が少なくない」を私はまた「場合」をも訳して，Wir können nicht selten den Fall beobachten, ... とし，シュレヒトさんは，Es kommt nicht selten vor, ... で，これなども，私の訳はドイツ語としては別に間違いではないのでしょうが，冗長な感じがします。

それを受ける daß- 文章の中の「自分の出す分は知らぬ顔で，他人の出す分だけ文句を言う」のところですが，私は日本文と順序を逆にして，「他人の出す分だけ文句を言う」を先に持ってきて，関係副詞の wobei で「自分の出す分には知らぬ顔」を繋ぐという形にしました。シュレヒトさんは，日本文の通りの順序で，「自分の出す分は知らぬ顔」を先に置いて，従属接続詞の während 使って，「他人の出す分だけ文句を言う」を配するという形になっています。

「他人(自分)の出す分」の「分」をどう訳すかが，私にとって多少問題だったところですが，das, was andere verursachen としました。シュレヒトさんは，はっきり Schaden としています。

S：その意味だということは明かですからね。

田：「知らぬ顔」は私は man beachtet nicht die Tatsache として，その Tatsache を説明する daß- 文章の中を「自分もその害を出している」にして，そこでは Schaden を使いました。シュレヒトさんは，「知らぬ顔」を vor et. die Augen verschließen で，これはもう語彙の問題で，勝負あった，です。「文句を言う」も私は，sich

über et. beschweren ですが，シュレヒトさんは，anprangern で，この場合ぴったりだと思います。

S: anprangern は，社会的に，つまり例えば，新聞などメディアを通じて非難することを言います。

田: ああ，そうですか。私がぴったりといったのは，その意味でではなく，sich beschweren よりずっと強烈というか，攻撃的だという感じをこの動詞から受けるからです。

S: それはその通りです。

▶ man と wir

田: これは細かいことですが，私は，日本文では主語のない，この daß- 文章の主語を man にしましたが，シュレヒトさんは wir にしましたね。

S: 修辞法として，自分も含めてといった言い方の方が，読者の反感を買わないですむということでしょうね。

田: それから，シュレヒトさんの文で，最初の vor dem von uns selbst verursachten Schaden では，Schaden が単数ですが，後の，die von anderen erzeugten Schäden のところでは，Schäden と複数になっているのはなぜですか。

S: 特に文法的な根拠はありません。単なるバリエイションです。

日曜日や祭日に外出して，人ばかり多くて，何の見物も出来なかったといって，むやみに人が出るからいけないなどと言ったりするが，自分自身も出かけて行って，その人ごみをつくっていることには気がつかないことが多い。

(田) Wir hören oft jemanden, der am Sonntag oder an einem Feiertag ausging, sagen, es habe von Menschen gewimmelt und er habe sich nichts ansehen können. Er beklagt sich darüber und kritisiert, daß allzu viele Leute

ausgehen. Er kommt aber dabei oft nicht auf den Gedanken, daß er selbst ausgeht und dazu beiträgt, dieses Menschengedränge herzustellen.

(S) Wie oft beklagen wir uns darüber, daß wir uns, wenn wir an einem Sonn- oder Feiertag ausgegangen sind, vor lauter Leuten nichts ansehen konnten. Wir schimpfen darüber, daß so viele Menschen unterwegs sind und übersehen dabei, daß auch wir, die wir ausgegangen sind, zu diesem Gedränge beitragen.

田: この文は，日本文では一つの文ですが，私はそれを三つの文に，シュレヒトさんは二つの文に分けました。そのへんのことも日本文をドイツ語に訳す場合，考えなければならない問題の一つです。ここでもシュレヒトさんは，主語をすべて wir にされていますが，その理由は先ほど伺いました。

まず，二人とも「日曜日や祭日に外出して，何の見物もできなかったといって」までを一つの文に訳しました。私は「こういうことをいっているのをよく耳にする」という言い方にして，Wir hören oft jemanden, der ..., sagen としましたが，シュレヒトさんは，そこを Wie oft beklagen wir uns, daß ... とされました。

S: この方が強い感じです。そして，本来はそうすべきではない，という気持ちがこの言い方で出るのです。

田: こういうところが，シュレヒトさんの独文を生き生きとさせ，私のそれを面白味のないものにしている所以だと思います。そして，シュレヒトさんは，何を sich beklagen しているかということを説明する，それに続く daß- 文章のなかに，「日曜日や祭日に外出して」を wenn-文章にして，挿入していますね。その挿入文が現在完了ですが，これは ......。

S:「外出して」そして,「(何の見物も)出来なかった」ですから。

▶ am Sonntag と an einem Sonntag

田: あっ,そうですね。私も同じでした。「日曜日や祭日に」を私は,まず,「日曜日」は普通の言い方で am Sonntag として,「祭日に」は,いろんな祭日があって,例えばその或る祭日に,というふうに考えて,an einem Feiertag としてみたのですが,シュレヒトさんは,an einem Sonn- oder Feiertag とされましたね。

S: 二つに分けることもないからですが……。

田: am Sonntag は「日曜日に」の一般的な言い方で,an einem Sonntag は「或る日曜日に」ということと理解していますが,それでよろしいですか。

S: 基本的には一応それでいいのですが,そこから,an einem Sonntag には,「日曜日のような仕事のない日に」,つまり「折角の日曜日に」といったニュアンスが出てきます。例えば,An einem Sonntag sollte man nicht arbeiten, sondern sich erholen. は,「折角の日曜日なんだから,仕事などしないで,休養しなくては」といった感じですね。

▶ 同じ動詞はなるべく避けたい

田: 次の「むやみに人が出るからいけないなどと言ったりするが」を私は一つの文で完結させましたが,シュレヒトさんも一応一つの文にして,その後を und で続けています。この文で私は sich beklagen を用い,それに更に kritisieren を加えました。シュレヒトさんは schimpfen です。それに続く「むやみに人がでるから」は,私はまた ausgehen を使いましたが,シュレヒトさんは,やはり言い方をかえて,unterwegs sein にしましたね。

S: 田中さんの場合は,前が ausging となっていますし,私の場合も ausgegangen で形が違っていますが,たとえ形は違っていても,同じ動詞の繰り返しはやはりなるべく避けた方がいいですね。unterwegs sein は「外出する」ではないんですけどね。家にいない

で外にいるということですが。

田: それでいいんです。ここでいっているのは,「人がたくさん出ていて」ということですから，まさに unterwegs sein です。

次の「自分自身も出かけて行って，その人ごみをつくっていることに気がつかないことが多い」ですが,「気がつかないことが多い」を，私はまた，Er (=jemand) kommt aber dabei oft nicht auf den Gedanken, daß ... などと，長い文章にしましたが，シュレヒトさんは，(wir) übersehen dabei, daß ... で，簡潔かつ完全ですね。「自分自身も出かけていって」の auch wir, die wir ausgegangen sind, ... というシュレヒトさんの処理の仕方もさすがという他ありません。

> **車の混雑でも，空気の汚染でも同じことである。**
> (田) Das Gleiche gilt auch für das Gedränge der Autos auf der Straße und die Luftverpestung.
> (S) Nicht anders verhält es sich mit den Staus auf den Straßen und mit der Luftverschmutzung.

田: Nicht anders verhält es sich mit ... などという言い方は思いつきません。読めばもちろん分かるんですけれどねぇ。

S: 田中さんの Das Gleiche gilt auch für ... もいいですよ。Luftverpestung は日常用語的ですね。全般的にいって田中さんがしきりに気にされているほど，田中さんの訳がよくないということはないですよ。

田: ええ，よくないというより，日本文がもっている虚飾がなく，平明で，柔軟な文体を再現出来なかった，むしろ悪文にしてしまったような気がするのです。今までのものが巧く訳せているとは思いませんが，いちばん不満の残る訳でした。

課題 10　日本の庭

八月末に，ドイツのハンブルク大学で日本の庭を研究している若い学者が訪ねてきたことがあった。彼は，龍安寺の庭と禅との関係，慈照寺の銀沙灘の抽象性を研究していると言っていた。私は，それは意味がないからやめた方がよい，それよりも庭師達に会って彼等の美意識でも研究した方がよい，と答え，京都在住の庭師を紹介しておいたが，庭の造形性と問う以前にそこに哲学的意味づけをしようというのだから，困った問題である。龍安寺の庭に万人が禅を感得したとしたら，この庭は上野公園の桜と同じである。私達が見なければならないのはこの庭をつくった職人の腕のたしかさだけである。

（立原正秋「日本の庭」新潮社より）

（田中）Es war Ende August, als mich ein junger deutscher Wissenschaftler besuchte, der sich an der Universität Hamburg dem Studium der japanischen Gartenkunst widmete. Er erzählte mir, daß er über die Beziehung zwischen dem Garten des Ryôanji-Tempels und dem Zen-Buddhismus, sowie über die

（W. Schlecht）Ende August besuchte mich einmal ein junger Wissenschaftler, der sich an der Universität Hamburg mit dem Studium japanischer Gartenkunst befaßte. Wie er mir erzählte, beschäftigte er sich mit der Beziehung zwischen dem Steingarten im Ryôanji und dem Zen-Buddhismus sowie

Abstraktheit des Ginsadan im Jishôji-Tempel arbeite. „Ihr Unternehmen hat doch keinen Zweck. Sie sollten es besser aufgeben. Stattdessen sollten Sie lieber japanische Gärtner kennenlernen und sich mit ihrem ästhetischen Bewußtsein beschäftigen“, so entgegnete ich ihm und stellte ihm einen in Kyoto ansässigen Gärtner vor. Das ist wirklich schlimm: Ohne sich zuerst einmal mit der architektonischen Gestaltung des Gartens auseinanderzusetzen, versuchte er, ihm eine philosophische Bedeutung zu verleihen. Wenn jeder in dem Garten des Ryôanji-Tempels den Zen-Geist erfühlen würde, dann unterschiede sich dieser Garten in nichts von den Kirschbäumen in dem Ueno-Park. Worauf wir bei diesem Garten achten müssen, ist nichts anderes als die Fähigkeit und das Können des Gärtners, der ihn gebaut hat.

dem Abstrakten im Ginsadan des Jishôji-Tempels. Ich entgegnete ihm, sein Vorhaben sei nutzlos, er solle besser davon ablassen. Ich riet ihm, stattdessen die Bekanntschaft von japanischen Gartenkünstlern zu machen, um sich mit ihrem ästhetischen Bewußtsein auseinanderzusetzen, und ich stellte ihm einen in Kyoto ansässigen Gärtner vor. Wie kann jemand nur auf die Idee kommen, in einem Garten eine philosophische Bedeutung zu suchen, ohne sich vorher mit Fragen seiner Gestaltung beschäftigt zu haben! Wenn jeder im Garten des Ryôanji den Geist des Zen verspürte, dann unterschiede sich dieser Garten in nichts vom Ueno-Park mit seinen Kirschbäumen. Was wir uns in diesem Garten vergegenwärtigen müssen, ist das handwerkliche Können derjenigen, die ihn geschaffen haben.

八月末に，ドイツのハンブルク大学で日本の庭を研究している若い学者が訪ねてきたことがあった。

(田) Es war Ende August, als mich ein junger deutscher Wissenschaftler besuchte, der sich an der Universität Hamburg dem Studium der japanischen Gartenkunst widmete.

(S) Ende August besuchte mich einmal ein junger Wissenschaftler, der sich an der Universität Hamburg mit dem Studium japanischer Gartenkunst befaßte.

田: 今回は，小説家の文章ですが，これは小説の一部ではなく，エッセイの一節です。立原正秋は，東洋の美の世界を追求した耽美的な小説を書く作家ですが，日本の伝統芸術に造詣の深い方です。

さて，最初の文ですが，「八月末に，... 若い学者が訪ねてきたことがあった」は，私もシュレヒトさんが訳されたように，日本文の通り，Ende August besuchte mich ein junger Wissenschaftler, ... としようかと思ったのですが，ちょっと趣向を変えて，Es war Ende August, als ... としてみたのですが。

S: 私は田中さんのこの訳をみて，いいなと思いました。話しの書き出しとして，たいへんいいと思います。

田: 全般的にいって，「研究する」という言葉がかなり頻繁に出てきます。先回でもシュレヒトさんが指摘されたように，なるべく同じ動詞は避けた方がいいということですので，私も，sich dem Studium widmen とか，über et. arbeiten とか，sich beschäftigen とかいろいろ使い分けたのですが，それぞれやはり多少意味が違うと思います。それらが，適切なところで使われているかどうかも，ここでの検討事項だと思います。

▶「研究する」に forschen を使い過ぎる傾向がある

S：そうですね。私の経験からいいますと，「研究する」というと，日本の方はほとんど，すぐ forschen, erforschen を使うんです。forschen はたしかに「研究する」という意味なんですが，相当深奥に迫った研究でないと用いません。ですから学生が，„Ich forsche jetzt über ... “ というのはちょっと大げさ過ぎます。

田：私は，この文では，sich dem Studium der japanischen Gartenkunst widmen を使いました。

S：いいと思います。sich widmen は intensiv に取り組んでいるということで，その取り組みかたの度合いも加味してます。私は，sich befassen にしました。対象が，neutral で logisch な学問なので，sich befassen がそういう意味で適切ではないかと思ったからです。

田：「日本の庭」は，シュレヒトさんも私も，japanische Gartenkunst なんですが，私は定冠詞を付けました。シュレヒトさんは無冠詞です。ここの無冠詞はどう理解したらよいのでしょう。

S：一つの学問分野として確立している場合は定冠詞をつけます。ここでいっている「日本の庭」はごく一般的なことですから，無冠詞がいいのです。

田：「ドイツのハンブルク大学」の「ドイツの」は，ドイツ語では必要はありませんから，シュレヒトさんも私も訳しませんでしたが，私は，「若い学者」の方には ein junger deutscher Wissenschaftler と，「ドイツ人の」を入れておきました。日本人がこの日本文を読んだ場合，この若い学者はドイツ人であるということはごく自然に考えるところですが――ですから著者も敢えて「ドイツ人の」とは言っていないわけでしょうが――字句通りに読めば，ドイツ人かどうかはっきりしません。ということで，ドイツ語訳では，私は「ドイツ人の」を入れておいたわけです。

S：　それは，訳者がそれを必要と判断するかどうかということ

ですね。この場合，テーマがドイツ人と日本人の考え方の相違ですから，入れておいた方が読者に対して親切かもしれませんね。

> **彼は，龍安寺の庭と禅との関係，慈照寺の銀沙灘の抽象性を研究していると言っていた。**
>
> （田） Er erzählte mir, daß er über die Beziehung zwischen dem Garten des Ryôanji-Temple und dem Zen-Buddhismus, sowie über die Abstraktheit des Ginsadan im Jishôji-Tempels arbeite.
>
> （S） Wie er mir erzählte, beschäftigte er sich mit der Beziehung zwischen dem Steingarten im Ryôanji und dem Zen-Buddhismus sowie dem Abstrakten im Ginsadan des Jishôji-Tempels.

田: シュレヒトさんも私も，「... と言っていた」から文章を始めたわけですが，シュレヒトさんの Wie er mir erzählte, ... をみて，ああ，こうしたほうがいいな，と思いました。「彼が私に話してくれたところによれば」というようなことですね。

S: Wie er mir erzählte, ... とした方が前の文章との結びつきがいいのですね。

田: その後の beschäftigte er sich と時称が過去になっているのは，時称の一致ということですか。

S: そうです。

田: ここでまた「研究する」が出てきますすが，私が über et. arbeiten で，シュレヒトさんが sich mit et. beschäftigen です。

S: arbeiten だと，いまそれについてなにか著作を計画しているという意味が含まれています。論文を書くとかいう目的があって，

という感じになります。

▶ die Abstraktheit と das Abstrakte

田：決定的に違うところは「抽象性」の訳ですが，私は die Abstraktheit で，シュレヒトさんは das Abstrakte です。これは形容詞の名詞化ですね。

S：そうです。むずかしい問題ですが，über die Abstraktheit des Ginsadan arbeiten というと，「銀沙灘に抽象性があるかどうか」研究するという感じですが，sich mit dem Abstrakten im Ginsadan beschäftigen だと，銀沙灘に抽象性があることは自明で，それを前提にしたうえで，「どのような抽象性であるか」といったようなことを研究するという感じですね。

田：それと関係があるのかもしれませんが，私は「銀沙灘の抽象性」を die Abstraktheit des Ginsadan と2格を使いましたが，シュレヒトさんは，mit dem Abstrakten im Ginsadan と im になっているのは……。

S：私は，銀沙灘というものが，具体的にどういうものなのかはっきり分からなかったのです。庭ですか。

田：いや，庭ではないんです。慈照寺の――一般的には銀閣寺の名で知られていますが――庭のなかにある円錐形をした盛り砂のことです。

S：そうすると私の訳は違いますね。私は庭のことかと思っていました。それで，im Ginsadan としたのです。いま私の訳をみて考えたのですが，理屈を付ければ，im Ginsadan とすると，「銀沙灘に表現されている抽象性」という意味にならないことはありませんね。訳したときはそのつもりではなかったんですが。

▶ Jishôji か Jishôji-Tempel か

田：書き方の問題ですが，例えば，「慈照寺」は，Jishôji-Tempel とするか，Tempel などつけないで，Jishôji だけにするべきか。

S：本当は Tempel なしのほうがいいと私は思いますが，やはり

読む人が分からないのは困りますから，Jishôji-Tempel という言い方も仕方がないですね。

田: 翻訳を読むドイツ人が Jishôji がお寺だということがわからないのはやはり困りますから，読者の理解ということを私は優先させて，Tempel をつけた方がいいというのが私の考え方です。

S: ただ，もう一度でてきたときには，今度は Tempel をつけないというやり方がいちばんいいと思います。

私は，それは意味がないからやめた方がよい，それよりも庭師達に会って彼等の美意識でも研究した方がよい，と答え，京都在住の庭師を紹介しておいたが，庭の造形性を問う以前にそこに哲学的意味づけをしようというのだから，困った問題である。

（田） „Ihr Unternehmen hat doch keinen Zweck. Sie sollten es besser aufgeben. Stattdessen sollten Sie lieber japanische Gärtner kennenlernen und sich mit ihrem ästhetischen Bewußtsein beschäftigen“, so entgegnete ich ihm und stellte ihm einen in Kyoto ansässigen Gärtner vor. Das ist wirklich schlimm: Ohne sich zuerst einmal mit der architektonischen Gestaltung des Gartens auseinanderzusetzen, versuchte er, ihm eine philosophische Bedeutung zu verleihen.

（S） Ich entgegnete ihm, sein Vorhaben sei nutzlos, er solle besser davon ablassen. Ich riet ihm, stattdessen die Bekanntschaft von japanischen Gartenkünstlern zu machen, um sich mit ihrem ästhetischen Bewußtsein auseinanderzusetzen, und ich stellte ihm einen in Kyoto ansässigen Gärtner vor. Wie kann jemand nur auf die Idee kommen,

in einem Garten eine philosophische Bedeutung zu suchen, ohne sich vorher mit Fragen seiner Gestaltung beschäftigt zu haben!

田: この個所はかなり，ドイツ文の組み立て方が違っています。私は，まず，「それは意味がないから ... 研究した方がよい」までの，著者がそのドイツ人にいった言葉を引用符に入れて，直接話法で冒頭にもってきました。といいますのは，日本文の「... と答え，... 紹介しておいた」と同じような運びにしたいと思い，そのためには，どうしても，「... と答え」(so entgegnete ich) が後に来なければならないので，こうしたのです。

S: 比較的短いエピソード風のテキストの中に，引用符に入った直接話法を入れるのはちょっと異質というか，全体としてのまとまった流れが損なわれるように私には思われます。間接話法にして，文の流れの中に組み入れた方が自然ですね。

田: たしかにそれはいえますね。さて，その文ですが，「それは意味がないからやめた方がよい」は，シュレヒトさんも私も，「それは意味がない」を先にもってきて，接続詞をなにも使わないで，その後に「やめた方がよい」を置いています。なぜそうしたか，記憶がありませんが，ドイツ語としてそれがいちばん自然でしょうね。その言い方はそれぞれ違いますが，問題はないと思います。ただ，「それは意味がない」の「それ」は，やはりなにかはっきりした名詞が必要ですね。シュレヒトさんは Vorhaben，私は Unternehmen としました。

▶ Gärtner, Maler など

田: 「庭師」ですが，これは造園家とかいったものではなく，職人のことをいっているのですが，シュレヒトさんの Gartenkünstlerは造園家の方ではないでしょうか。

S: Gärtner には庭師の意味もありますが，普通は野菜や，花などの栽培をする人や植木屋，園丁のことをいうんです。この課題文でいっている「庭師」は確かにいわゆる造園家のことではなくて，職人としての庭師ですが，最初に Gartenkünstler と言っておいた方が誤解がないと思ったからです。ですから，あとでは Gärtner になっているでしょう。

同じようなことが，Maler についてもいえます。Maler とは普通は画家のことではなく，ペンキ屋さんのことです。画家は Kunstmaler です。誤解の余地がない場合は，わざわざ Kunstmaler とは言わないで，Maler で済ませますけれど。

▶ **zielbewußt（目的志向）なドイツ人の思考法**

田: 「庭師達に会って」「彼等の美意識でも研究した方がよい」ですが，私はこの二つの部分を und で結びましたが，シュレヒトさんは，後の方を um ... zu- 不定句にしているのですね。日本語に直せば，「彼等の美意識を研究するために，庭師達に会った方がいい」ということになります。これはまさにドイツ人の zielbewußt といいましょうか，zielstrebig な思考法だと思いました。

S: 時間的な経過として理解しないんですね。「ある人に会って」そして「あることを体験する」のではなくて，ある目的があってある人に会う，というのがドイツ人の考え方です。

田: ここにもまた「研究する」が出て来ます。シュレヒトさんもまた別の動詞，sich mit et. auseinandersetzen を使い，私はここで sich mit et. beschäftigen を用いました。

S: 日本語では，同じ言葉を繰り返し使っても問題はないのですか。

田: 日本語でも，なるべく同じ言葉の反復はしない方がいいのですが，例えば，ここで繰り返し使われている「研究する」などはそれほど苦にはなりませんね。ただ，同じ言い回しは，日本文でもやはり極力避けるようにしています。

S: 紹介した「京都在住の庭師」は一人だったのか数人だったのか，日本語の場合はっきり分からないのですが，私は一人にしておきました。田中さんも一人と判断されたようですね。

田: 実は私もそのことは考えたのですが，別に理由はなく，一人ということにしておきました。数人だったのかもしれませんね。

▶「困った問題」に困った。

田: シュレヒトさんは，Ich entgegnete ihm を「それは意味がないからやめた方がよい」までにして，「それよりも ... した方がよい」については，改めて Ich riet ihm, ... といいなおされました。こうした方が明確ですね。私が困ったのは，次の「... 困った問題である」でした。ああでもない，こうでもないと考えたあげくが，この Das ist wirklich schlimm なんですが。

S: まあ，直訳ですね。

田: えっ，直訳ですか ......。Das ist の後に aber を入れて，Das ist aber schlimm. とした方がよかったかな。

S: いや，その aber は，相手が目の前にいて，その相手に対していうのでしたら，あった方が自然ですが，ここでは相手にいっているのではなく，頭の中で考えていることですから，aber はあってはおかしいんです。

田: なるほどね。この「困った問題」をシュレヒトさんがどう訳されるか興味があったのですが，Wie kann jemand nur auf die Idee kommen とされました。

▶「よくもまあ ... できたものだ」の Wie+können の定形

田:「よくもまあ ... できたものだ」に当るドイツ語として，「Wie+können の定形」という言い方があるということは知っていましたが，ここでそれが使えるということは思いつきませんでした。この表現には，あきれたり，驚いたり，愛想をつかした気分が出ていますものね。

S: そうです。相手の非常識を非難するようなときに使います。

▶ man と jemand

田: ただ，この jemand の使い方が私には難しい。man なら分かるし，使えるのですけれど。

S: 一般化ですから，man と同じです。ですから man でもいいんです。

田: ああそうですか。man なら日本人にも問題なく分かるのですが，jemand というと，私などは「だれかある人」という日本語が頭にこびりついているので，こういうところには使えません。なかなか一言でいうのは難しいと思いますが，この場合，man と jemand ではどんなニュアンスの違いがあるのでしょう。

S: man は一般化ですね。jemand はある特定な人を頭に描いています。ここでは「かれ」で，この jemand は er に近いのです。

田: さて，その「困った問題」というのは，「庭の造形性を問う以前に，そこの哲学的意味づけをしようとすること」なんですが，私もシュレヒトさんも構文は同じです。「以前に」のところに ohne ... zu を使いました。私は ohne ... zuerst einmal ... zu とし，シュレヒトさんは ohne ... vorher ... zu で，「以前に」を表現しました。そして，シュレヒトさんは vorher を使ったので，ohne ... zu を完了の zu- 不定句にしています。それから，「意味づけをしようとする」の「しようとする」は，私は er versuchte ですが，シュレヒトさんの場合は，「困った問題」のところで auf die Idee kommen とされて，この Idee で「しようとしている」を言い表わしています。

S: そういうことです。

田: ということで，構文についての発想はだいたい同じです。そのなかで用いている単語は少しずつ違いますが，特に二つの個所を取り上げて検討してみたいと思います。

一つは「造形性を問う」のところです。私のは，不定句で挙げますと，sich ... mit der architektonischen Gestaltung des Gartens auseinandersetzen ですが，シュレヒトさんのは，sich ... mit Fragen

seiner Gestaltung zu beschäftigen で，Fragen が入っています。Fragen がないとドイツ語としておかしいでしょうか。あるいは，シュレヒトさんがそこで使った動詞が sich beschäftigen だったので，この Fragen が必要だったということでしょうか。

S：Fragen はぜひ必要というわけではありません。Fragen があると，その庭の個々の部分の造形性，造形という問題に関連したいろいろなこと，といった意味になって，「造形性」が relativieren されます。動詞が sich beschäftigen だから Fragen が必要だったということではありません。

田：もう一つは，「哲学的意味づけをする」ですが，これはかなり考えました。結局，ihm eine philosophische Bedeutung zu verleihen としました。つまり，verleihen「与える」という動詞を選んだわけですが，シュレヒトさんは，in einem Garten eine philosophische Bedeutung zu suchen とされました。

S：解釈というか，見方の問題です。田中さんの言い方だと，哲学的意味など本当はないのに，と著者は思っているように取れます。

田：ああ，そうですか。哲学的意味など本当はないのにと，そこまで著者が考えているかどうか疑問ですがね。

S：私の et. in et. suchen にも婉曲的ですが，verleihen の場合と同様の意味が多少含まれています。言い方は違いますが，ほぼ同じ意味合いになっていると思います。

龍安寺の庭に万人が禅を感得したとしたら，この庭は上野公園の桜と同じである。

（田） Wenn jeder in dem Garten des Ryôanji-Tempels den Zen-Geist erfühlen würde, dann unterschiede sich dieser Garten in nichts von den Kirschbäumen in dem Ueno-Park.

（S） Wenn jeder im Garten des Ryôanji den Geist des Zen

verspürte, dann unterschiede sich dieser Garten in nichts vom Ueno-Park mit seinen Kirschbäumen.

S: ちょっと分かりにくい文でした。

田: こういうことなんです。もし誰もが龍安寺の庭を見て，そこに表現されている禅を理解したとしたら，龍安寺の庭は禅とは無関係で，大衆向けのお花見の上野公園の桜と同じだ，ということをいっているわけです。シュレヒトさんが分かりにくかったのは，「この庭は上野公園の桜と同じである」の個所ではありませんか。「庭」と「桜」とは比較対象としてはおかしいですから。

S: それもあります。

田: そして，西洋の論理からすると，その庭に万人が禅を感得したら，その庭はまさしく禅の精神を具現していることにほかならない，ということになるのでしょうか。

S: いや，そんなことはないんです。たぶん，「上野公園の桜と同じ」というところの脈絡がはっきりしなかったのですね。

田: 「上野公園の桜」は，万人向けの，世俗的のものの象徴として使った言い方なんです。結局，著者は万人を否定しているのです。確かに飛躍があって，diskursiv でない，逆説的なこの日本文は禅問答のようで分かりにくいかもしれませんね。われわれには，なんとなく，理屈抜きに直感的に分かるんですけれど。

S: 私は，「上野公園の桜」の公園を龍安寺の庭との比較対象にして訳しました。

田: 付帯描写の mit を使って ...vom Ueno-Park mit seinen Kirschbäumen ですね。

S: こう訳しても，この訳文は田中さんの説明されたような意味で，ドイツ人に十分理解されると思います。

▶ **冠詞の融合形について**

田: 冠詞に関するやや些末なことですが，私は，in dem Garten des Ryôanji-Tempels, von den Kirschbäumen in dem Ueno-Park ですが，シュレヒトさんは，im Garten des Ryôanji, vom Ueno-Park と前置詞と定冠詞の融合形になっています。定冠詞では指示性が強すぎるということでしょうか。

S: ここでは，そういうこととちょっと違います。im Garten des Ryôanji, vom Ueno-Park の方が既知の意味を持っています。つまり「いまわれわれが話題にしている」といった了解があります。in dem, von dem, のほうが距離を置いた感じなんです。

私達が見なければならないのはこの庭をつくった職人の腕のたしかさだけである。

（田） Worauf wir bei diesem Garten achten müssen, ist nichts anderes als die Fähigkeit und das Können des Gärtners, der ihn gebaut hat.

（S） Was wir uns in diesem Garten vergegenwärtigen müssen, ist das handwerkliche Können derjenigen, die ihn geschaffen haben.

▶ **「腕のたしかさ」**

S:「見なければならない」の「見る」をどう訳すか。「注意を払う」ということですから，田中さんの auf et. achten でいいですね。私は違う動詞を使いましたが，同じ意味です。

田: 私は，シュレヒトさんの使った sich et. vergegenwärtigen は，「思い浮べる」という日本語を対応させていたので，こういう意味で使えるとは思ってもみませんでした。

「腕のたしかさ」もなんて訳したらよいか，とくに「腕の」の訳し方が考えつきませんでした。シュレヒトさんの，das handwerkliche Können を見て，なるほどと思いました。ここでは著者は，重要なのは頭ではなくて腕なんだということを強調したいわけですから，これはなんとか訳出しなければならない言葉だったのです。「職人の」を私は，ここでは庭師のことをいっているので，des Gärtners としたんですが，シュレヒトさんは，derjenigen, die ... として，複数になっています。これは，一人ではないから，ということででしょうか。

S: まあ，そうですね。また，別に龍安寺の庭を作った庭師に限らず，もっと一般的にいっているともいえますが，この文では in diesem Garten になっていますから，ここではこの庭を作った人たち，ということになりますね。ここの複数，単数はそれほど大きな問題ではありません。

▶ Gartenbau という名詞はあるが，einen Garten bauen とはいわない

田: 「庭をつくった」ですが，シュレヒトさんは schaffen，私は bauen としました。「造園」という意味の Gartenbau という名詞がありますから，bauen の方がいいのではありませんか。

S: おっしゃる通り，Gartenbau という名詞はあるのですが，Er baut einen Garten. とは，うーん，あまりいわないんですね，不思議なことに。Gartenbauer という名詞もありますが，Garten に bauen という動詞は使わないんです。しかし，Er baut eine Gartenanlage とはいうのですけれど。どうしてでしょう。ごく一般的には，einen Garten anlegen というのですが，私が schaffen にしたのは，抽象的にというか，作品をつくる，創造するといった意味も含めて使ったのです。

田: なるほど。「腕のたしかさだけである」となっていますから，私は nichts anderes als を用いましたが，シュレヒトさんは，この

「だけ」を訳していませんね。

▶ müssen の効用

S: はい。「私達が見なければならないのは」を，Was wir uns in diesem Garten vergegenwärtigen müssen, としました。読者は，ここまで読むと，特に最後の müssen のために，緊張し，「それは何か」と期待するわけです。その期待に応える答えとしては，簡潔な sein で十分で——というよりむしろその方が効果的で——なまじ nichts anderes als などとすると，誇張が過ぎてかえって緊張感を損ねるのです。

田: いわれてみれば，確かにそうですね。

最後に内容について一言いわせていただきますと，私は，この著者のいっていることに共感を覚えるのです。西洋人は，なんでも体系化して，言葉で説明しないと気がすまない。

S: そうですね。

田: しかし，そもそも禅は体験するもので，そのモットーは，「言葉に頼るな」(不立文字)です。そして，日本の芸術は，茶道をはじめ，庭園もすべて禅と結びついています。ですから，日本の芸術は論理や言葉によって理解されるものではないのです。

S: それらはすべて，論理と言葉によって成り立っている西洋の哲学や美学，芸術の対極にあるということですね。

田: 禅や日本の芸術に関心を持つ西洋人は，このいちばん基本的な相違点を克服していないように思われてなりません。そういう意味で，この一節には大いに共感するわけですが，一方，西洋の芸術に携わっている日本人もまた，この相違点を克服していないように私には思えるのです。つまり，かれらは，「腕のたしかさ」だけを問題にして，西洋の芸術が依って立っている「言葉」や「論理」を軽視しています。かれらこそ「腕のたしかさ」を問う以前に，自分の専門とする西洋の芸術の歴史的，哲学的意味を言葉で把握して，それを言葉で語れるようにならなければならないと私は思うのですが。

課題 11　旅行者

旅行者の言うことなら，眉つばものだと，私は思っている。旅行者というのは，観光客みたいなもので，もっぱら金を使う人で，その國ではかせがない人のことである。

いくらながく海外に逗留しても，その國で働かず，邦貨を使って，それで暮らしているなら，旅行者である。留学生の多くがそれである。外交官がそれである。（中略）

観光客なら，ただ金を落として行くだけだから，どこの國でもちやほやする。手を出して，チップでももらったら，もっとちやほやする。

西洋人も日本人も，この点では同じである。いたる所でにこにこされ，西洋人は親切だ，人種的偏見はなかったと，帰って新聞雑誌に書かれても，本気にはできない。

その國で働いて，その國でかせいでごらん。偏見やら何やらが，あるかないかわかるだろう。

西洋人は，他人の私事に関心をもたないと，海外に遊んだほどの日本人ならみんな言うのは，それにひきかえ日本人はもちすぎると，非難するためである。

観光客に，何がわかるか。

（山本夏彦「日常茶飯事」中公文庫より）

（田中） Was ein Reisender berichtet, nehme ich mit Vorbehalt auf. Ein Reisender

（W. Schlecht） Was ein Reisender erzählt, sollte man — so glaube ich — mit Vorsicht

ist so gut wie ein Tourist, der in dem jeweiligen Land nur Geld ausgibt und nicht verdient.

Wie lange er auch im Ausland verweilen mag, er ist und bleibt ein Reisender, solange er in dem Land nicht arbeitet und solange er dort mit dem Geld seines eigenen Landes lebt. Die Mehrzahl der Studenten, die im Ausland studieren, sind damit gemeint, und auch Diplomaten gehören dazu.

Einen Touristen, der er ja ist, trägt man in jedem Land auf Händen, zumal er sein Geld dort läßt. Man trägt ihn noch zärtlicher auf Händen, wenn man ihm die Hand hinhält und Trinkgeld bekommt.

Westliche Menschen und Japaner sind in dieser Hinsicht völlig gleich. Man darf nicht ernst nehmen, wenn

genießen. Schließlich ist er ja nichts anderes als ein Tourist, der in dem Land, das er bereist, in erster Linie Geld ausgibt und nicht verdient.

Wie lange sich jemand im Ausland auch aufhalten mag — solange er dort keiner Arbeit nachgeht und solange er dort seinen Lebensunterhalt mit Geldmitteln aus seiner Heimat bestreitet, bleibt er ein Reisender. Hierzu gehören die meisten der Auslandsstudenten, hierzu gehören die Diplomaten.

Da sich alles, was ein Reisender tut, letztlich darauf beschränkt,Geld in einem fremden Land zu lassen, ist er, wohin er auch kommt, zu jeder Zeit willkommen. Gibt er, wenn man ihm die Hand hinstreckt, dazu noch reichlich Trinkgeld, ist er noch mehr umworben.

Was diesen Punkt anbelangt, sind die Menschen im Westen und in Japan völlig gleich. Man darf nicht alles für bare

jemand, der überall mit einem freundlich lächelnden Gesicht behandelt wurde, nach seiner Rückkehr in Zeitungen oder Zeitschriften schreibt, daß die westlichen Menschen freundlich sind, und daß dort kein Rassenvorurteil zu finden war.

Man arbeite und verdiene einmal in jenem Land! Dann wird man sehen, ob es dort ein Rassenvorurteil oder so etwas gibt oder nicht.

Die westlichen Menschen würden sich nicht in Privatangelegenheiten anderer einmischen, so sagen die Japaner alle, wenn sie einmal ins Ausland gereist sind. Sie wollen damit ihren Landsleuten vorwerfen, daß sie sich im Gegensatz dazu zu sehr für Privatangelegenheiten anderer interessieren.

Was kann ein Tourist schon verstehen!

Münze nehmen, was jemand, dem die Leute überall freundlich zugelächelt haben, zurückgekehrt von einer Auslandsreise in der Zeitung oder in einer Zeitschrift berichtet: daß die Menschen im Westen zuvorkommend seien, und daß er dort keinerlei Anzeichen für eine Rassendiskriminierung gefunden habe.

Um zu sehen, ob es in einem Land so etwas wie Vorurteile gibt oder nicht, muß man dort arbeiten, muß man dort seinen Lebensunterhalt verdienen.

Wenn Japaner, die das Ausland einzig von Urlaubsreisen her kennen, sagen, die Menschen in westlichen Ländern würden sich nicht in private Belange anderer einmischen, dann tun sie dies nur, um umgekehrt zu kritisieren, daß die Japaner sich zu sehr für die Privatsphäre anderer interessieren.

Was aber weiß ein Tourist schon über das Ausland!

旅行者の言うことなら，眉つばものだと，私は思っている。旅行者というのは，観光客みたいなもので，もっぱら金を使う人で，その国ではかせがない人のことである。

(田)　Was ein Reisender berichtet, nehme ich mit Vorbehalt auf. Ein Reisender ist so gut wie ein Tourist, der in dem jeweiligen Land nur Geld ausgibt und nicht verdient.

(S)　Was ein Reisender erzählt, sollte man — so glaube ich — mit Vorsicht genießen. Schließlich ist er ja nichts anderes als ein Tourist, der in dem Land, das er bereist, in erster Linie Geld ausgibt und nicht verdient.

田: シュレヒトさんももちろんお気付きでしょうが，このテキストは独特の文体を持っています。著者は，当代随一の文章家といわれています。最近は翻訳調の日本語を書く人が多いなかで，日本文のよさを余すところなく出した文章を書く方です。省略があり，飛躍があり，洒脱，軽妙で，痛烈です。ですから，翻訳するときもそれを生かしていかなくてはならないと思います。

S: それは大切なことだと思います。

▶「旅行者の言うことなら」

田:「旅行者の言うことなら」ですが，二人とも同じ文型を使い，動詞だけが違います。berichten と erzählen，これはどちらでもいいでしょうね。

S: そうですね。ただドイツでは，„Wenn einer eine Reise tut, so kann er was erzählen."「旅をすると何か話題が出来る」という，作家ゾイメ（1763—1810）の言葉が人口に膾炙されていることもあって，この場合 erzählen という動詞がいちばん一般的で，自然です。

田: この本の読者にはそういう間違いをする人はいないと思いますが,「言う」だからといって, sagen は駄目ですね。sagen だと旅行中に旅行者がいろいろいっていることも含まれてしまいますからね。

S: そうです。erzählen や berichten で, はじめて帰ってきてから, という意味になるわけですから。

▶ **「眉つば」**

田: 次の「眉つば」ですが, これは日本語独特の言い回しですから, 意訳する以外ありません。これも mit Vorbehalt aufnehmen と mit Vorsicht genießen と異なった訳になっていますが, どちらが強い感じですか。

S: mit Vorsicht genießen のほうです。

田: mit Vorsicht genießen のほうが,「眉つば」に近いですね, きっと。「眉つば」というのは, 用心して聞かなければならない, ということですから。

S: mit Vorbehalt aufnehmen でなくて, mit Skepsis aufnehmen にしてもいいですね。

田: なるほど。さて文章ですが, シュレヒトさんは, ... sollte man — so glaube ich —として, やや距離をおいた言い方になっていますが, 私は, nehme ich ... auf. とダイレクトな表現にしました。日本文も「私は」がかなり強調されているように読み取れますし, 直截的な言い方がこの著者の特徴ですから, ドイツ語としておかしくなければ, 私のダイレクトな言い方のほうがここではいいのではないかと思いますが ......。

S: そう思います。田中さんの訳はとてもいいです。私も, この「思っている」はそんなに重要だとは考えなかったので, 挿入句のようにしてみたわけです。

▶ **「旅行者みたいなもの」**

田:「旅行者みたいなもので」ですが, 私は so gut wie を使って

みました。

S: 私は nichts anderes als を使いました。そして，schließlich で文を始めました。というのは，この最初の文はいうなればかなり挑発的な内容というか，主張ですから，読む人は「何でだろうか」と緊張するわけです。それで，「なぜかというと，それは ...」という意味で，この schließlich で受けて，その緊張に応えているのです。ですから，その説明にあたる文章も，「観光客以外のなにものでもない」というような，やや強めの表現のほうがドイツ語としてはいいのです。その意味で，田中さんの文は，もちろんドイツ語としてはまったく正しいのですが，起伏に欠けて，やや平板な感じがします。

田: それに続く関係文ですが，「もっぱら金を使う」が，海外でお金を使う，という意味だということは日本語では自明なんですけれど，ドイツ語の場合は，どこでもっぱら金を使うのか，はっきりさせなければならないんですね。それで，私は，旅行したその「折り折りの」国で，という日本文にはない説明，in dem jeweiligen Land をいれました。シュレヒトさんのもやはりその説明が入っています。ただ，シュレヒトさんのは，もっとはっきりと，in dem Land, das er bereist となっていますが，in dem jeweiligen Land ではいけませんか。

S: 厳密にいいますと，前にすでにその旅行する国が挙げられていれば，in dem jeweiligen Land でいいのですが，いきなりこれが出てくるのはあまり感心しません。

田: なるほど。「もっぱら金を使う」の「もっぱら」を私は nur にしてしまいましたが，これはちょっと軽率でした。

S: 旅行中にはまあいろいろなことをするわけですから，nur ではいい過ぎですね。私は，in erster Linie にしましたが，vor allem とか，insbesondere, vornehmlich などでもいいですね。

田: 先ほどもいいましたように，この著者の文章は簡潔が特徴なんです。ですから，日本文にない説明的な文の挿入はなるべく避け

たいのですが，この in dem Land, das er bereist といった場所を示す言葉を取ってしまうことはまずいでしょうか。

S：なくても分からないということはありませんが，なにかほしいですね。例えば，ja でも入ればなんとかいけるかな ……。Schließlich ist er nichts anderes als ein Tourist, der ja in erster Linie Geld ausgibt und nicht verdient.。私が主文に入れた ja はそうすると取ったほうがいいですね。関係文の中の ja はとても含蓄のある ja なんです。つまり，この ja は，wie es typisch für einen Touristen ist, という意味を表す機能をもっているわけですね。

いくらながく海外に逗留しても，その国で働かず，邦貨を使って，それで暮らしているなら，旅行者である。留学生の多くがそれである。外交官がそれである。

(田) Wie lange er auch im Ausland verweilen mag, er ist und bleibt ein Reisender, solange er in dem Land nicht arbeitet und solange er dort mit dem Geld seines eigenen Landes lebt. Die Mehrzahl der Studenten, die im Ausland studieren, sind damit gemeint, und auch Diplomaten gehören dazu.

(S) Wie lange sich jemand im Ausland auch aufhalten mag — solange er dort keiner Arbeit nachgeht und solange er dort seinen Lebensunterhalt mit Geldmitteln aus seiner Heimat bestreitet, bleibt er ein Reisender. Hierzu gehören die meisten der Auslandsstudenten, hierzu gehören die Diplomaten.

田：最初の認容文のなかで私は主語に er を使いましたが，er で

すと，前文の Tourist を指していることになりますね。たぶん著者は，ここでは一般論としていっていると解釈できますから，er でないほうがいいかもしれませんね。

▶ 再び man と jemand について

田: シュレヒトさんは jemand を使っています。前の課題でもお聞きしましが，jemand と man との違いを，この場合ではどう違うか説明していただけますか。いくつかのケースで説明していただくと，だんだんはっきりとその相違が分かってきますから。

S: man ではこの場合あまりにも漠然とし過ぎます。ここでは，「例えば或る誰かが或る特定の状況で」という想定ですから，jemand がいいのです。

田: 動詞の verweilen と sich aufhalten とはどんな違いがありますか。

S: verweilen のほうが文学的な感じがします。このテキストはエッセイですので，sich aufhalten のほうが適切でしょう。

田: シュレヒトさんは，その認容文のあと，ダッシュ付きの solange に始まる副文章を置いて，それから主文章を配していますが，これは何か考えがあってこうされたのですか。

S: 主文章，つまり，結論を強調するためです。

田: solange に続く文章は，かなり表現が違いますね。

▶ 日本の円貨は外国では両替しないと使えない

S: 田中さんの表現のなかで，「邦貨で」のところを mit dem Geld seines eigenen Landes と 2 格を使っていますが，これは正確でないというか，論理的でないというか，適当ではありませんね。

田: といいますと …

S: 敢えていえば，日本の「円」をそのまま外国では使えないから，ということなのかもしれません。つまり 2 格を使うと，「自分の国の」があまりに直接的に「お金」を規定してしまうので，「円」をそのまま外国で使うという感じになってしまうのです。

田: なるほど。われわれには,「自分の国のお金で」といえば,それを両替するということは自明のことですけれど ....。とすると,ワン・クッション入れて,aus を使って aus seinem eigenen Lande とすればいいのですね。

▶ テキストに見合った文体を選ぶ

S: そうです。そして田中さんの solange の文章は,ドイツ語としては間違いはないし,意味内容も十分伝えていますが,ドイツ語として上等ではありません。いわゆる旨い訳とはいえません。簡単明瞭はもちろんいいのですが,テキストに合った格調の高いドイツ語にしなければなりません。この文はそのたいへん良い例だと思います。

そういう意味で,私は arbeiten といわないで,einer Arbeit nachgehen を使い,mit dem Geld ... leben としないで,seinen Lebensunterhalt mit Geldmitteln aus seiner Heimat bestreiten にした,と理解してください。

▶「... がそれである」

田: そのへんのところが,われわれがドイツ語に訳すとき,限界を感じるところですね。

次の「留学生の多くがそれである。外交官がそれである」ですが,私は,「それである」を不定代名詞の einer を使って,einer davon, einer von ihnen でいえないかといろいろやってみたのですが,なかなかうまくいきません。やはり私が訳したようにする以外ないのでしょうか。

S: ここでは,einer は無理ですね。こうする以外ないでしょうね。まあ言い方としては,in diese Kategorie fallen などともいえますが ......。

田: さもなければ,Die Mehrzahl der Studenten, ..., sind es. などでも駄目でしょうか。

S: es が何を指しているのかちょっと曖昧ですね。

田: シュレヒトさんは，gehören zu を二度繰り返していますが，これは意図的なんでしょうね。

S: そうです。強調のためでもあり，リズムも出てきます。

田:「留学生」をドイツ語では何といったらいいか，私はいつも困っていたのですが，Auslandsstudent という言い方があるとは知りませんでした。私のその文章の主語は die Mehrzahl なんですが，動詞は複数形の sind でよかったんでしたね。

S: die Mehrzahl は単数名詞ですから，文法的にいえば動詞は単数変化でなければならないわけですが，「多数」という意味内容から，動詞を複数変化にすることもできます。どちらも可能です。

田: Diplomaten ですが，私は無冠詞の複数形にしたのですけれど，シュレヒトさんが定冠詞つきの複数にした理由を聞かせてください。

S: 外国で生活する人々の職業はさまざまですが，そのなかの「外交官という特定のグループの人たち」と捉えて，定冠詞をつけた複数形にしました。

観光客なら，ただ金を落として行くだけだから，どこの国でもちやほやする。手を出して，チップでももらったら，もっとちやほやする。

(田) Einen Touristen, der er ja ist, trägt man in jedem Land auf Händen, zumal er sein Geld dort läßt. Man trägt ihn noch zärtlicher auf Händen, wenn man ihm die Hand hinhält und Trinkgeld bekommt.

(S) Da sich alles, was ein Reisender tut, letztlich darauf beschränkt, Geld in einem fremden Land zu lassen, ist er, wohin er auch kommt, zu jeder Zeit willkommen. Gibt er, wenn man ihm die Hand hinstreckt, dazu noch reichlich

Trinkgeld, ist er noch mehr umworben.

田: まったく違う構文になっています。私の訳はいうなら直訳ですが，シュレヒトさんのは，日本文を理解して，それをドイツ人の感覚でドイツ語に「直訳」——私は敢えてそれを意訳とは言いたくないのです——しているという感じがします。私としては，この文章の訳は，そんなに苦労しませんでした。

▶「観光客なら」

田: 多少頭を使ったところは，「観光客なら」の「なら」で，einen Touristen, der er ja ist, ... としてみました。

S: それでいいと思います。ただ少し硬い，というか，古風な感じがしますが，訳としては，この「なら」を十分伝えています。

田: シュレヒトさんもこの「なら」を，「観光客のすることというのは畢境海外でお金を落とすことだけだから」という意味のドイツ語に訳すことによって，表現されたのだと思いますが，説明的ですね。

S: そうですね。

田: それから，「どこの国でも」は，私は in jedem Land ですが，シュレヒトさんは wohin er auch kommt と認容文にしています。

▶「ちやほやする」

田:「ちやほやする」ですが，私は jn. auf Händen tragen を使いましたが，シュレヒトさんは，簡単にというか，willkommen sein にしています。

S:「ちやほやする」には，いろんな言い方があります。例えば，

... ist er überall (in jedem Land) gern gesehen (ein gern gesehener Gast)

... steht er überall hoch im Kurs.

... wird er überall willkommen geheißen.

田: そして，あとでもう一度「ちやほやする」が出てきますが，そのとき同じ動詞を使うか，別の言い方にするか。私は，意図的に同じ言い方にして，そこには「もっと」が付いていますから，zärtlicher を入れました。

S: zärtlich はあまり適切ではありません。zärtlich は「愛情こまやかに」というような意味で，子どもとか恋人に対して使います。ここの「ちやほやする」は，本当に愛情を感じてちやほやするのではありませんから，適切でないんです。もちろん意味は分かりますけれど。

▶「チップでももらったら」

田: シュレヒトさんは，「チップでももらったら」を挿入句のように，dazu noch reichlich Trinkgeld としていますが，なるほど，と感心しました。「チップでも」の「でも」が，これでよく出ていると思います。それから，この reichlich なども私には思い浮かびませんね。いわれてみればよく分かるのですけれど。

シュレヒトさんは，二度目の「ちやほやする」には違った動詞の umwerben を使いましたが，この umwerben は，「求婚する」とか「いい寄る」とかいった意味でしか知りませんでした。

S: もともとはそういう意味ですが，「ちやほやする」の意味でも使われます。例えば，den Kunden umwerben とか，den Käufer umwerben といった具合です。

西洋人も日本人も，この点では同じである。いたる所でにこにこされ，西洋人は親切だ，人種的偏見はなかったと，帰って新聞雑誌に書かれても，本気にはできない。

(田) Westliche Menschen und Japaner sind in dieser Hinsicht völlig gleich. Man darf nicht ernst nehmen, wenn jemand, der überall mit einem freundlich lächelnden Ge-

sicht behandelt wurde, nach seiner Rückkehr in Zeitungen oder Zeitschriften schreibt, daß die westlichen Menschen freundlich sind, und daß dort kein Rassenvorurteil zu finden war.

（S） Was diesen Punkt anbelangt, sind die Menschen im Westen und in Japan völlig gleich. Man darf nicht alles für bare Münze nehmen, was jemand, dem die Leute überall freundlich zugelächelt haben, zurückgekehrt von einer Auslandsreise in der Zeitung oder in einer Zeitschrift berichtet: daß die Menschen im Westen zuvorkommend seien, und daß er dort keinerlei Anzeichen für eine Rassendiskriminierung gefunden habe.

田: 今度は，文型としては，大体同じですね。

S: そうですね。最初の「この点では」は幾つかの言い方があります。in dieser Hinsicht, was diesen Punkt anbelangt (anlangt, angeht, betrifft) の他に，まさに日本語の通りの in diesem Punkt でもいいですね。。

田: was ... anbelangt は，われわれには，硬い感じがしますが，こういった軽妙な文章でも使えるんですね。その文章のなかに，偶然二人とも原文にはない，völlig をいれていますが，これがないと文のすわりが，なんとなく悪いのです。

S: おっしゃる通りです。

田: その次の文の「本気にはできない」ですが, et. für bare Münze nehmen という慣用句は知っていました。しかし，思いつかないんですね。知っていても使えなければ，知っているとはいえませんね。

▶ **得策不得策の dürfen**

田: ところで，ここの「できない」ですが，können ではなくて，

dürfen を用いるべきですね。このような dürfen の用法を，真鍋良一氏は，「得策不得策の dürfen」といっています。「... すると損だ」という意味に使うということです。

S： なるほど。その通りです。例えば，「この手紙だけは彼に絶対みせない方がいいよ」などという場合，Diesen Brief darfst du ihm auf keinen Fall zeigen. といいますね。

田: その副文章ですが，私のはwenn jemand ... schreibt, で，「もし，だれかが ... 書いたとしても」といういわゆる仮定文になっていますが，シュレヒトさんは，was jemand schreibt, で，「書いたものを」としています。鋭角的ですね。そしてそれに続く daß- 文章の前をコンマでなく，「：」にしたために，引き締まった感じになっています。それから，「にこにこされ」には zulächeln を使ったので，私のように behandeln という原文にない動詞を使わないですんでいます。

S： そして私は，「帰って」を zurückgekehrt von einer Auslandsreise と述語句にしました。

▶ in der Zeitung か in einer Zeitschrift

田: さあ，私が分からないのは，「新聞雑誌」をシュレヒトさんが，in der Zeitung oder in einer Zeitschrift と両方に単数型を用いて，Zeitung には定冠詞を，Zeitschrift には不定冠詞を付けていることです。

S： これは意識的にこうしました。といいますのは，新聞にももちろんいろいろな新聞がありますが，新聞という一つのメディアとして総体的に捉えることができます。ところが，雑誌には，まさにいろいろな種類の雑誌があって，総体的に把握出来ないのです。ですから，„die Zeitschrift“ という総体概念はドイツ語にはないんです。

田: そう言われてみれば，なんとなく分かるような気がします。私は両方とも無冠詞の複数形にしましたが，これでもよろしいです

か。

S: いいですが，細かいことをいえば，ここでは「頻度」ではなく「手段」が問題になっているわけですから，単数のほうがいいでしょうね。

田: 「西洋人は親切だ」の「親切」を私は機械的に freundlich にしましたが，シュレヒトさんは zuvorkommend を使っています。こういう簡単な単語もいろいろ使いわけるべきでしょうね。

S: 私が freundlich を使わなかったのは，その前にすでに freundlich を使っているからです。ここではどちらかというと hilfsbereit の意味だと思って，zuvorkommend にしました。

▶「人種的偏見」

田: 「人種的偏見」ですが，シュレヒトさんはそれに Anzeichen という語を付けましたね。

S: ええ。「人種的偏見」は，原則的にはヨーロッパには存在しないんです。例えば，南アフリカなどには「人種的偏見」がありますが，ヨーロッパには一応それはないわけなんです。それはちゃんと憲法に謳ってあるんです。ところが実際には，例えば，外国人労働者などに対して往々にして「人種的偏見」が示されています。ということで，そういう現実に即して，こう訳したわけです。

田: 「人種的偏見」のドイツ語ですが，Rassenvorurteil ではないですか。

S: あっ，「人種的偏見」ですか，日本語は。それでしたら，Rassenvorurteil です。Rassenvorurteil があって，その結果 Rassendiskriminierung（人種差別）が生じるわけですね。

田: Rassenvorurteil にしても，Anzeichen があったほうがいいですか。

S: そうですね。... keinerlei Anzeichen für ein Rassenvorurteil ... ですね。この Anzeichen は日本語にはどう訳しますか。

田: ええ，ちょっと適当なことばを思いつきませんが，「兆候」「片

鱗」とでも訳しましょうか ……。

その国で働いて，その国でかせいでごらん。偏見やら何やらが，あるかないかわかるだろう。 （田） Man arbeite und verdiene einmal in jenem Land! Dann wird man sehen, ob es dort ein Rassenvorurteil oder so etwas gibt oder nicht. （S） Um zu sehen, ob es in einem Land so etwas wie Vorurteile gibt oder nicht, muß man dort arbeiten, muß man dort seinen Lebensunterhalt verdienen.

▶「その国で働いてかせいでごらん」

田: はじめ私は，du か ihr に対する命令型にしようと思ったのですが，迷ったあげく，接続法第 1 式を使った要求話法にしたのです。

S: いきなり命令型が出てくると，読者はびっくりしてしまいます。

田: 日本語の文でも，こういう言い方はよく出てくるものではありません。この著者の，意表を突いた特徴的な語法で，その魅力の一つになっているのです。シュレヒトさんは結局，「偏見やらなにやらがあるかどうか分かるためには，その国で働いてみなくてはならない」という文章にされましたが，こうする外ないのでしょうか。

S: 命令文でなく，田中さんのやったような要求話法でも，ドイツ人にはちょっと異様な感じを与えます。

田: ……

▶「偏見やらなにやら」

S: 私がここで困ったのは，「偏見やらなにやら」の「… やらなにやら」です。それで，so etwas wie にしたのですが，ちょっと違う

かもしれません。どうでしょう。Vorurteile oder ähnliches とか Vorurteile oder was auch immer などという言い方も考えられますが，どれがいちばん日本語の語感に合っていますか。

田: 意味としては，Vorurteile oder was auch immer がいちばん近いと思いますが，なにか重い感じがします。日本語の「... やらなにやら」は軽いのです。軽いとはいっても，それなりの意味はちゃんと持っているのですが ......。ですから，so etwas wie でいいと思います。

こだわるようですが，やはり「... かせいでごらん」の文章は，シュレヒトさんがやったように訳す以外に方法はないんですか。「... してごらん」という言い方をなんとか表現出来ないものでしょうか。

S: 田中さんの man arbeite ... ! は一つの方法だと思いますが，要求話法のこの用法は古い言い方で，いまでは，例えば薬の使用説明書（Man nehme dreimal täglich eine Tablette.)とか，数学の問題の条件（Die Figur abc sei ein gleichschenkliges Dreieck.) を示すときなど以外はあまり用いません。いずれにしても，命令型はやはり避けたほうがいいですね。

西洋人は，他人の私事に関心をもたないと，海外に遊んだほどの日本人ならみんな言うのは，それにひきかえ日本人はもちすぎると，非難するためである。

観光客に，何がわかるか。

（田） Die westlichen Menschen würden sich nicht in Privatangelegenheiten anderer einmischen, so sagen die Japaner alle, wenn sie einmal ins Ausland gereist sind. Sie wollen damit ihren Landsleuten vorwerfen, daß sie sich im Gegensatz dazu zu sehr für Privatangelegenheiten anderer interessieren.

Was kann ein Tourist schon verstehen!

(S) Wenn Japaner, die das Ausland einzig von Urlaubsreisen her kennen, sagen, die Menschen in westlichen Ländern würden sich nicht in private Belange anderer einmischen, dann tun sie dies nur, um umgekehrt zu kritisieren, daß die Japaner sich zu sehr für die Privatsphäre anderer interessieren.

Was aber weiß ein Tourist schon über das Ausland!

▶「遊んだほどの」

田: 訳しにくいというか，悩まされるのが，「遊んだほどの」ですね。「遊ぶ」はそのまま訳せないのは自明ですが，「ほどの」をどうするかです。私は自分の訳に満足していません。結局，関係文にしないで wenn にしたことと，einmal を入れたことでなんとか感じが出るのではないかと考えたのが，せめてもの工夫です。

シュレヒトさんもやはり「遊んだほど」をなんとかしようとされていますが，Wenn Japaner, die das Ausland einzig von Urlaubsreisen her kennen, とかなりはっきりとその意味するところを具体的に説明しています。たしかにそういう意味なんですね。まあこうする以外ないんでしょうね。

S: そうですね。おっしゃる通り説明的ですが，einzig と von ... her で「遊んだほど」を表現してると思います。田中さんの訳でも，日本文の言わんとしていることは伝えていると思いますよ。

田: その代わりに，といっては変ですが，「... 日本人はもちすぎると非難するためである」のくだりは，私のほうがやや説明的で，シュレヒトさんは，日本文の通りになっています。日本文に忠実で，かつドイツ語として自然ならば，これにこしたことはないわけです。この日本文がシュレヒトさんがやられたようなドイツ語にすること

が出来るとは思いませんでした。「… するのは，… ためである」を wenn … dann と um … zu とで，この著者の特徴的な表現が過不足なくドイツ語になっています。

S：田中さんの訳も決して悪くないのですよ。

▶「他人の私事」に Interesse haben はいけません

田：「関心をもつ」は二人とも同じ sich einmischen と sich interessieren を使いました。この場合 Interesse haben はいけませんね。Interesse haben の場合は，関心を持つ対象がポジティブなものに限られると思いますが。

S：その通りです。

▶ „hingegen“ 考

田：「それにひきかえ」を私は，im Gegensatz dazu にしましたが，ここでは，hingegen は使えない理由を説明していただけますか。

S：hingegen にしますと，この daß- 文章の主文章に対しての hingegen になってしまうからです。im Gegensatz dazu なら，im Vergleich zu den Europäern の意味になって，いいわけです。

田：それでは，シュレヒトさんの文章に「それにひきかえ」を入れるとしたら，どうなるでしょう。

S：ええと，私も実は，「それにひきかえ」にはちょっとひっかかったのです。um umgekehrt zu kritisieren の umgekehrt を daß- 文章のなかにいれたほうがいいかもしれませんね。… um zu kritisieren, daß sich die Japaner umgekehrt zu sehr …と。

田：私は，シュレヒトさんの umgekehrt は，「それにひきかえ日本人は …」の「それにひきかえ」に当たるのではなく，西洋人は他人の私事に関心をもたない，と西洋人のことをいっているが，そういっているのは実は逆に日本人を非難するためなんだ，という意味の umgekehrt と理解したのですが。

S：そうですね。そうすると，um umgekehrt zu kritisieren はそのままにしておいて，daß- 文章のなかに im Vergleich zu を入

れて，daß die Japaner sich im Vergleich zu den Europäern … としてもいいですが，まあ im Vergleich zu den Europäern はなくても分かりますね。ちょっと文章が長くなりますから，なくてもいいんじゃないでしょうか。

田：それでは，仮に daß 文章の中に入れるとしても，im Vergleich zu ではなく，hingegen では駄目ですか。

S：ええ … ちょっと待ってください。… やっぱりおかしいですね。hingegen は，例えば A ist so, B hingegen ist so. という具合に主語が違わないと駄目です。ここでは主語が同じだから，おかしいのです。

▶ können の意味合い

田：最後の「観光客に，何がわかるか」は，それぞれ違った言い方になっていますが，これは，表現の相違ということでいいでしょうか。

S：そうですね。まあ，いうなら私のほうがエレガントな言い方といえるでしょう。特に，この場合の können はかなり失礼というか，軽蔑的です。

田：「日本語が話せますか」とたずねるとき，Sprechen Sie Japanisch？と聞くのがよい。Können Sie Japanisch sprechen? と聞くのは，あなたは多分話すことなど出来ないだろうが，という意味が言外にあるので，避けた方がよい，とよくいわれましたが，その können ですね。そうすると，私の訳のほうが，いいのかもしれませんよ。この日本語自体エレガントな言い方ではありませんし，軽蔑の気持ちを含んでいますから。

S：(笑声)

課題12　横たわる川

わざわざ出かけたというと大袈裟になるが，仕事がらみの旅行で時間があったので立ち寄ったといえばカドが立たない。そう思って乗り換えのM駅から各駅どまりの電車であと戻りして「家」を訪ねた。

何年になるだろうか。五年も経っていないのに十年ぶりのような気がする。どういうことが原因でいさかいが始まり，どういうことでそれがもつれたのか，はっきりしなくなるほど時間が経っているような気がする。たしか，いさかいの始まりはかれらの男の子のことだった。小学校の四年生か五年生ぐらいではなかったか。病弱というほどではないが，風邪ばかりひいているようだった。風邪をひくと扁桃腺が腫れて高熱が出る。それをおそれて，母親が過剰に大事にする。いわば，過保護過干渉のくりかえしになり，それが男の子を虚弱にした。

（富岡多恵子「横たわる川」より）

（田中） Wenn ich sage, daß ich extra gekommen bin, dann würde mein Besuch eine zu große Bedeutung bekommen, wenn ich aber meinen Besuch so begründe, daß ich gerade auf einer Geschäftsreise war und vorbeigekommen bin, da

（W. Schlecht） Zu sagen, ich hätte mich eigens aufgemacht, klänge übertrieben. Weitaus diplomatischer wäre es zu sagen, ich sei geschäftlich unterwegs gewesen und hätte zufällig die Zeit gehabt vorbeizukommen. Derlei

ich zufällig Zeit hatte, dann wird er sicher keine unnötigen Schwierigkeiten bereiten. Solche Gedanken im Kopf fuhr ich von der Station M, wo ich umsteigen mußte, mit dem Personenzug ein Stück zurück und besuchte das „Haus".

Wie viele Jahre ist es her? Mir scheint, daß es schon zehn Jahre her wäre. Tatsächlich aber sind noch keine fünf Jahre vergangen. Es kommt mir vor, als wäre schon eine dermaßen lange Zeit vergangen, daß es mir nicht mehr klar ist, aus welchem Grunde es damals zum Streit kam und warum dieser immer verwickelter wurde. Ich glaube aber, daß die Ursache des Streites jedenfalls mit dem Jungen zu tun hatte. War er seinerzeit in der vierten oder fünften Klasse? Es wäre zuviel gesagt, daß er schwach und kränklich war, aber er schien fast immer erkältet zu sein. Und wenn er sich er-

Gedanken gingen mir durch den Kopf, als ich am Bahnhof von M. in den Personenzug umstieg und die Strecke, die ich gekommen war, ein paar Stationen zurückfuhr, um ihr *Haus* zu besuchen.

Wie viele Jahre sind wohl vergangen seit meinem letzten Besuch? Dieser liegt noch keine fünf Jahre zurück, aber schon kommt es mir vor, als seien es zehn. Aus irgendeinem Grund war es damals zu einem Streit gekommen, der—warum weiß ich nicht mehr—immer verwickelter wurde. Das Ganze aber—so erscheint es mir jetzt — liegt so lange zurück, daß ich mich nicht mehr genau zu erinnern vermag, was der Anlaß dazu war. Wahrscheinlich war es die Sache mit dem Jungen. Er muß damals in der vierten oder fünften Klasse der Grundschule gewesen sein. Nicht unbedingt kränklich,

kältet hatte,waren seine Mandeln entzündet, und er bekam hohes Fieber. Die Angst davor veranlaßte seine Mutter, ihn zu sehr zu verwöhnen. So kam es zu dem Teufelskreis, daß sie den Jungen verhätschelte und sich übermäßig um ihn kümmerte, was zur Folge hatte, daß er so schwächlich wurde.

erweckte er doch stets den Eindruck, als sei er das ganze Jahr über erkältet. Und wenn er erkältet war, schwollen seine Mandeln an, und er bekam hohes Fieber. Um zu verhindern, daß es dazu kam, kümmerte sich seine Mutter unablässig um ihn, weit mehr als nötig war. Diese ständige übertriebene Fürsorge und Bemutterung war es dann auch, was den Jungen so schwächlich machte.

わざわざ出かけたというと大袈裟になるが，仕事がらみの旅行で時間があったので立ち寄ったといえばカドが立たない。

（田） Wenn ich sage, daß ich extra gekommen bin, dann würde mein Besuch eine zu große Bedeutung bekommen, wenn ich aber meinen Besuch so begründe, daß ich gerade auf einer Geschäftsreise war und vorbeigekommen bin, da ich zufällig Zeit hatte, dann wird er sicher keine unnötigen Schwierigkeiten bereiten.

（S） Zu sagen, ich hätte mich eigens aufgemacht, klänge übertrieben. Weitaus diplomatischer wäre es zu sagen, ich sei geschäftlich unterwegs gewesen und hätte zufällig die Zeit gehabt vorbeizukommen.

田: 最後のテキストは小説の一節です。シュレヒトさんはこの小説をすでに翻訳されたのですね。

S: はい，そうです。私は富岡多恵子さんの作品が好きで，この他にもすでに翻訳したものがあります。この「横たわる川」は近くドイツで出版される Japanische Erkundungen II（日本現代文学作品集）の中に取り上げられまして，私が翻訳しました。

田: そうですか。シュレヒトさんがこの小説をすでに訳されているということは，この部分のシュレヒトさんの訳を拝見して，すぐにわかりました。これはその小説の冒頭ですね。

S: そうです。冒頭です。

田: それでは，初めからいきましょう。ここには，「大袈裟」とか「カドがたつ」とか，問題のある日本語が出て来ますが，まず構文は，私がお定まりの wenn- 文章です。シュレヒトさんは zu sagen

と始められましたが，これはどういう形なのでしょう。

▶ 小説の冒頭は読者を惹きつけるような書き方で

S：Es klänge übertrieben zu sagen, ich hätte mich eigens aufgemacht. ということで，副文章にすれば，Wenn ich sagen würde, ich hätte mich eigens aufgemacht, klänge das übertrieben. ですね。あまり一般的な言い方ではないんですが，小説の冒頭などは，読者を惹きつけるために，こういった変わった言い方もまた効果があります。

田：私にはそのへんの工夫はないのですが，wenn ich sage, ... dann würde ... という具合に，本来ならば，wenn ich sagen würde, と，この wenn - 文章も接続法にしなければならないところですが，それを，敢えて直接法にしてみたのですが，これはまずいでしょうか。

S：接続法の方がいいかも知れませんけれども ......。

田：それは，文法的にいってですか，それとも様式的にですか。

S：両方なんですが，ただこの場合，直接法になっていることによって，主人公が考えている心の葛藤が反映されて，いいと思います。

田：私もそういうふうに考えてこうしてみたのが，多少の工夫なんですが。

▶「大袈裟」と「カドが立つ」

田：さて，「大袈裟になるが」ですけれど，これは私も随分考えたのです。

S：難しいですね。

田：こういうのは，後の「カドが立つ」もそうですが，結局どうドイツ語に訳しても完全ではないわけで，どこかで妥協しなければならないのでしょう。私は，... dann würde mein Besuch eine zu große Bedeutung bekommen. とやや説明的に訳してみました。

S：ウエイトが重すぎるという意味ですね。 Er (der Besuch)

bekommt zuviel Gewicht. とか Er (der Besuch) steht zu sehr im Mittelpunkt. などともいえますね。私は，übertrieben としました。日本語に近いと思います。

田: うーん，実は私も übertrieben にしようかと初め思ったのですが，ここでいう「大袈裟」は，誇張するという意味の「大袈裟」(übertrieben) とはちょっと違うんで，むしろ，aufdringlich の意味なんですね。つまり「押付けがましい感じを相手に与える」ということなんですね。それで，übertrieben は少し違うのではないかと思ったのです。

もう一つの問題,「カドが立たない」ですが, 私は keine unnötigen Schwierigkeiten bereiten とし，シュレヒトさんは es wäre diplomatischer zu sagen としました。これは先ほどもいったように，このドイツ語でなければならない，といえる決定的な言い方はないわけですけれど ……。

S: そういうことですね。どちらも言わんとしていることは表現されていると思います。ここでは私は，文体的なことに，つまり，語の配置に配慮しました。Zu sagen, ..., klänge übertrieben. として，そのすぐあと，Weitaus diplomatischer wäre es zu sagen, ... と対称的になるようにしたわけです。

田: リズムがありますね。ちょっと前に戻るんですが，シュレヒトさんは「出かけた」を，sich aufmachen とされました。確かに sich aufmachen は，weggehen の意味ですから，日本語でいう「出掛ける」ですが，ここでいっている「出かけた」は，「出掛けて来た」という意味ですから，ちょっと違うように思うのです。つまりこれは，その家を訪ねたとき，その家の人にいう言葉なんです。そうすると，sich aufmachen ではおかしいように思うのですが，ドイツ語としてどうなんでしょう。

S: 別におかしくないですね。もちろん，おっしゃる通り，その家に行って，その家の人に言う言葉としてはおかしいですけれど，

これは，この人が頭のなかで考えていることですから。ですから，視点は「出掛ける」自分に置かれているわけです。それに，sich aufmachen には，weggehen の意味ばかりでなく，um zu einem bestimmten Ziel zu kommen という意味も暗に含まれているのです。いずれにしてもドイツ語としてまったく問題ありません。

▶ **「仕事がらみの旅行」**

田: 「仕事がらみの旅行」は，私も auf einer Geschäftsreise，シュレヒトさんも geschäftlich unterwegs で，「仕事上の旅行の途上」ということです。「仕事がらみ」というのは，厳密にいうと，私的な旅行と仕事上の旅行をドッキングさせた旅行ということなんですね。小説ですから，あんまり説明的になっても，全体の流れを損なうと思って敢えて訳出しなかったのですが，なにか簡単なドイツ語で言えませんでしょうか。

S: geschäftlich zu tun haben などを使って言えないことはありませんが，一言でこれに当るドイツ語はないですね。

田: 多少言葉の綾という感じもありますからね。「仕事がらみの旅行で時間があったので立ち寄った」ですが，私は，ich war gerade auf einer Geschäftsreise（私はちょうど仕事上の旅行の途上であった），ich bin vorbeigekommen（立ち寄った），da ich zufällig Zeit hatte（たまたま時間があったので），という形ですが，ich bin auf einer Geschäftsreise vorbeigekommen, da ... とするのは駄目ですか。

S: それは全く非論理的です。Geschäftsreise では時間はないわけですから。

田: あ，そうですか。シュレヒトさんは，ich sei geschäftlich unterwegs gewesen（私は仕事上の旅行の途上であった），und hätte zufällig die Zeit gehabt vorbeizukommen（そしてたまたま立ち寄る時間があった）という訳し方をしたために，コンパクトな文になっています。「時間があったので立ち寄った」と「立ち寄る時間が

あった」とは，多少ニュアンスは違いますが，まあ結局同じことですね。

そう思って乗り換えのM駅から各駅どまりの電車であと戻りして「家」を訪ねた。

（田） Solche Gedanken im Kopf fuhr ich von der Station M, wo ich umsteigen mußte, mit dem Personenzug ein Stück zurück und besuchte das „Haus“.

（S） Derlei Gedanken gingen mir durch den Kopf, als ich am Bahnhof von M. in den Personenzug umstieg und die Strecke, die ich gekommen war, ein paar Stationen zurückfuhr, um ihr *Haus* zu besuchen.

▶「そう思った」のはいつか

田:「そう思って …」のところですが，シュレヒトさんの訳は，Derlei Gedanken gingen mir durch den Kopf, als ich … zurückfuhr, … ですね。つまり，「あと戻りしたとき，頭をよぎった」ということになりますが，そういう考えはすでに頭に中にあったのであって，あと戻りしたときそう思ったのではないのです。そういうことですので，私は solche Gedanken im Kopf と副詞句にしたのです。

S: この als は，かならずしも「ちょうどそのとき」という全くの同時をいつも意味するわけではないんで，かなり幅があるのです。

田: そこへもってきて，主文の derlei Gedanken gingen mir durch den Kopf という言い方には，in dem Moment の要素が含まれていると思うんですが。

S: まあ，そうですね。

▶「家」を訪ねた

田: それから，ちょっと気になっていることがあるので，それをまず申しますと，「家」を訪ねた，のところが，シュレヒトさんのは ihr *Haus*（彼らの，あるいは，彼女の家）となっていることなんです。これは，私が始めにいいましたように，この小説を先まで読んで初めて分かることで，この段階では，この「家」がどういう家なのか，誰の家なのかは，全く不明です。

S: 翻訳をする場合，翻訳者は作品を最後まで読んで，その作品の全体の内容を把握して翻訳を始めるわけですね。

田: それはもちろんそうですけれど，この冒頭の部分を日本人が読んだとき，この「家」は誰の家なのか分かりません。翻訳も，その分からないままの状態をやはり伝えるべきだと思うのですが。

S: たしかにそうですね。そうすると，ここでは，... um das *Haus* zu besuchen. にするということですね。ただ，das Haus とすると，ドイツ語ではかなりミステリー風になるんですね。

田: ミステリー風でいいのですよ。そこが作者の狙いなのです。この日本文でも，ミステリーっぽいのです。だから，「家」と鉤カッコの中に入れていて，作者は読者が，どういう家なのかな，と緊張することを期待しているのです。

S: なるほどね。

田: 私自身ここまで読んだとき，この人とその「家」との関係はどういうのかな，多分この人はかつてこの「家」に住んでいた人で，あるいは，離婚でもして，その「家」を出た人ではないかと，思いをめぐらしたわけです。そして，読み進んでいくと，どうもそうではない，ということが分かっていくわけで，だんだん糸がほぐれるように判明していくのですね。ですから，ドイツ人の読者もそれと同じように読んでいくように訳すべきではないかと思いますが。

S: それはたしかにそうですね。ただ，Haus が *Haus* とイタリックになっていますね。そのために，この ihr のウエイトはかなり落

ちて，影が薄くなってドイツ人はほとんどこれに注意を向けません。

田: この ihr は「彼等の」ですか，「彼女の」ですか。

S:「彼等の」です。なるほどね ... ここまで読んだかぎりでは，「彼女の」ともとれますね。うーん，そうですねぇ。やはり最後まで読んでいるために，ついこういう訳になってしまったのですね。ただ，ドイツ語として，das Haus とするのは抵抗があるのです。そして，das (ein) Haus besuchen という言い方はドイツ語ではあり得ないのです。jenes Haus ならまだなんとか。

田: 日本語からいうと，jenes Haus にも抵抗があります。私はこの鉤カッコのついた「家」から，この家はたいへん封建的は家なのかとも思いました。つまり読者は，この「家」からいろんなことを想像するのです。いまふと考えたのですが，この「家」を die Familie と訳したらどうでしょう。この「家」は，決して建物のことをいっているわけではありませんし，ドイツ語で das (ein) Haus besuchen が具合が悪いのは，Haus が建物を意味するからだと思いますから。

S: 語学的には，die (eine) Familie besuchen なら全く問題はありません。しかし，この場合，まだそれがはたして Familie なのかどうか分からないし，田中さんのいう謎めいた感じも失われてしまいますね。この課題文だけで考えると，たしかに ihr Haus には問題があるかも知れませんが，小説全体の中でみると，そんなに問題はないように思います。

田: 或る意味ではやむを得ない訳なのかも知れませんね。

「あと戻りして」ですが，私は ein Stück zurückfuhr としました。シュレヒトさんは，die Strecke, die ich gekommen war, zurückfuhr で，ドイツ語の，そしてドイツ人の明確さを感じるのですが，私のような言い方では，ドイツ語として不十分ですか。

S: いえ，そんなことはありません。

田:「乗り換えのM駅から」を私は，von der Station M, wo ich umsteigen mußte としましたが，シュレヒトさんは，... am Bahnhof

von M. umstieg で,「M駅で乗り換えて」です。このへんの訳し方は翻訳者の裁量ですし，ドイツ語として，シュレヒトさんの訳の方が自然なのでしょうから，問題にすることではないでしょう。

▶ 再びドイツ人の zielbewußt な思考法を示す um ... zu- 不定詞

田: そして,「あと戻りして『家』を訪ねた」のところですが，これは課題 10 の「庭師達に会って」「彼等の美意識でも研究した方がよい」の個所で，私が「庭師達に会ってそして彼等の美意識でも研究した方がよい」と und で結んだのに対して，シュレヒトさんは，um ... zu で処理されて,「彼等の美意識を研究するために庭師達に会った方がいい」という形の文にされたケースと全く同じですね。

ここでも私は，ich fuhr ...zurück und besuchte das Haus.「あと戻りして」そして「家を訪ねた」ですが，シュレヒトさんのは，ich fuhr ... zurück, um ihr *Haus* zu besuchen.「家を訪ねる」ために「あと戻りした」です。後戻りするのは家を訪ねるためですからね。後戻りすることと，家を訪ねることの関係をきちっと捉えているんですね。zielbewußt な思考法です。これはわれわれ日本人がドイツ語を書く場合，もちろん喋るときも，心しておかなければならないことですね。

何年になるだろうか。五年も経っていないのに十年ぶりのような気がする。

（田） Wie viele Jahre ist es her? Mir scheint, daß es schon zehn Jahre her wäre. Tatsächlich aber sind noch keine fünf Jahre vergangen.

（S） Wie viele Jahre sind wohl vergangen seit meinem letzten Besuch? Dieser liegt noch keine fünf Jahre zurück, aber schon kommt es mir vor, als seien es zehn.

田:「何年になるだろうか」の訳もシュレヒトさんはまた話を先取りして，本文にはない seit meinem letzten Besuch を入れています。

S: 論理的にいって，「何年経つ」ということは，「いつから」があって初めて表現として成り立つのであって，「いつから」がないと，摑みどころのない宙に浮いた表現になってしまいます。

田: それは，日本語でも同じです。ドイツ語ほどの不満感はないのかもしれませんが，「何年になるだろうか」というのは，日本語としても完全ではありません。ですから，読者は「いつからか」と疑問に思い緊張します。

▶ 翻訳者の責任

S: たしかに，私は，読者があまり迷わないように気を配り過ぎたかもしれません。

田: これを読む日本の読者も迷っているのですから，その同じ状態にドイツの読者も置かれるべきであって，解説をしてしまったら，翻訳者として越権行為だと思います。

S: 翻訳家の責任という問題になると思うのですが，私は，自分には二つの責任があると考えているのです。

一つの責任は，原作に対しての責任です。内容を変えたり，削除したり，付け加えたりすることは，許されません。もう一つは，その翻訳を読む人たち，私の場合はドイツ語圏の読者，に対する責任ですね。即ち，読者が理解出来るように訳さなければなりません。ドイツの読者は，日本の読者にはないハンディキャップを持っているのです。例えばこの小説のなかにはドイツの読者には分かりにくいさまざまな状況，関連事項があります。そういうこともあって，おそらく私はほとんど無意識に，そのハンディキャップを取り除いて，日本の読者と同じ状態にもっていこうという意志が働いたということでしょう。

田: 後の部分については分かりませんが，この冒頭部分に関する限りでは，ドイツの読者にとって，ハンディキャップになるところはないと思います。翻って，ドイツの小説を日本語に訳す場合，同じことがいえると思います。日本の翻訳者は，注を付けてハンディキャップを解決し，訳のなかにそれを取り込むことはしていませんね。

S: たしかに田中さんのおっしゃることは正しいでしょう。この冒頭の部分は日本の読者が受けるような曖昧模糊とした印象をそのままドイツの読者にも与えるべきかもしれませんね。翻訳という仕事はたいへん孤独な作業なんです。といいますのは，翻訳する者は二つの世界の間に立たされ，その両方に制約されているからです。そういう意味で，いまわれわれがやっているようなやり方は，まことに理想的な方法ですが，またたいへん贅沢なことで，普通はこういうことは希であって，翻訳者は一人で二つの世界の間に立って仕事をしなければなりません。

田: ただ，こういうことはいえるかもしれません。欧米語を日本語に翻訳する場合は，日本人はすでに西欧の論理や思考法に慣れていますし，日本人も場合によっては西欧の思考法で物事を考えていますから，シュレヒトさんの指摘されたようなハンディキャップはほとんどないといえますが，日本語を欧米語に訳す場合は，欧米人はまだ日本人の論理や思考法に慣れていませんから，その穴を埋めることを翻訳者は余儀なくさせられるということはあるでしょうね。

どういうことが原因でいさかいが始まり，どういうことでそれがもつれたのか，はっきりしなくなるほど時間が経っているような気がする。

(田) Es kommt mir vor, als wäre schon eine dermaßen

lange Zeit vergangen, daß es mir nicht mehr klar ist, aus welchem Grunde es damals zum Streit kam und warum dieser immer verwickelter wurde.

（S） Aus irgendeinem Grund war es damals zu einem Streit gekommen, der — warum weiß ich nicht mehr — immer verwickelter wurde. Das Ganze aber — so erscheint es mir jetzt — liegt so lange zurück, daß ich mich nicht mehr genau zu erinnern vermag, was der Anlaß dazu war.

田: 文の組み立ては，かなり違っています。そのことはまた後で触れるとして，ちょっと目についたことを先に聞きます。「いさかいが始まり」は，シュレヒトさんも私も zu et. kommen を使っていますが，私は es kommt zum Streit ですが，シュレヒトさんは，es kommt zu einem Streit です。zu einem Streit と不定冠詞にしたのはなぜですか。

S: それは，後に関係文が来ていることと関係があります。つまり，どういういさかいか，というと，「だんだんもつれてしまった，そのようないさかい」ということで，性質を表す不定冠詞です。

田: 文の組み立て方ですが，シュレヒトさんは文を二つにしたんですね。

S: そうです。「どういうことが原因でいさかいが始まり，どういうことでそれがもつれたのか」までを，「何か或る原因があっていさかいが始まって …」と思い出すような，確認するような形にして，文を一応そこで切りました。

田: そして，そういった諸々のことを das Ganze ともう一度いいなおして，「そういったことすべては何が要因であったか思い出せないくらい時間が経っているような気がする」というふうに二つに分けたのですね。なるほど。なかなか凝った訳ですね。

S: 田中さんのは，素直な訳ですね。いい感じだと思います。特に「どういうことでそれがもつれたか」を，..., warum dieser immer verwickelter wurde. としたのはいいですね。

> **たしか，いさかいの始まりはかれらの男の子のことだった。**
> **小学校の四年生か五年生ぐらいではなかったか。**
> (田) Ich glaube aber, daß die Ursache des Streites jedenfalls mit dem Jungen zu tun hatte. War er seinerzeit in der vierten oder fünften Klasse?
> (S) Wahrscheinlich war es die Sache mit dem Jungen. Er muß damals in der vierten oder fünften Klasse der Grundschule gewesen sein.

▶ 日本語の「たしか」と「たしかに」

S: 「たしか」を wahrscheinlich と訳したのですが，wahrscheinlich では弱すぎるという感じをお持ちかと思いますが ……。

田: いや，「たしか」は本来は可能性の高い推量を表す言葉かもしれませんが，一般には，私の語感からいうと，そんなに強い確信を表す副詞ではないと思います。「たぶん」といったくらいの意味で使われることが多いのではないでしょうか。「たしかに」「たしかな」になりますと，これは「きっと」「疑う余地のない」という意味で，高い確信を表しますけれど。

S: 「たしか」という日本語は私にとって，いつもどう訳したらいいか困っている言葉です。

田: ですから，「たしか」は wahrscheinlich でいいのです。それで，私もそれと同程度の推量を表わす動詞 glauben を使いました。

S: glauben はかなり弱い推量なんです。「思い違いかもしれない

が」の意味を含んでいます。ですけれど，田中さんが daß-Satz の中に jedenfalls を使ったのは，たいへんいいですね。「いろんな理由はあったけれども，いずれにしても」ということで，glauben の弱さをこの jedenfalls で補強しています。

田: 「男の子のことだった」を die Sache mit dem Jungen と，こういう言い方で簡単にいえるのですね。

次の「小学校の四年生か五年生ぐらいではなかったか」ですが，私はどうして「小学校の」を訳さなかったか，はっきり覚えていないのですが，あるいは四年生，五年生は小学校以外にはないから，ということだったかもしれません。

S: ドイツの場合は状況が違いますから，やっぱり，in der vierten oder fünften Klasse der Grundschule とはっきりしておいた方がいいですね。

田: そうですね。それに日本文には「小学校の」となっているのですから。たぶん訳し忘れたのだと思います。私は，「... ぐらいではなかったか」を自問するようなかたちで，War er seinerzeit in der vierten oder fünften Klasse? としましたが。

S: 私は，「はっきりとは覚えていないけども，たしか，...」という感じで，憶測・推量の müssen を使って，Er muß ... gewesen sein. としました。もちろん田中さんがやったように，自問する修辞的疑問文を使うのも結構ですが，ここでは少し強すぎるように思います。

田: 強い!?

S: 強いというのは，疑問文にすると，話者の確信のなさが強く表現されるということです。

▶「『家』を訪ねた」再論

田: シュレヒトさん，いまちょっと気がついたのですが，前の文章なんですが「いさかいの始まりはかれらの男の子のことだった」のところを私は——うっかりしてだと思いますが—— mit dem Jungen としましたが，シュレヒトさんも mit dem Jungen なんで

すね。こここそ，mit ihrem Jungen とすべきではないでしょうか。

S：うーん，これも冒頭の ihr *Haus* のところと関係があるんです。結論を先にいってしまいますと，ここでは，mit dem Jungen の方がいいのです。最初「家」が出てきて，それについては何も説明されていません。そして，ここへきて，「男の子」が登場して，読者にだんだんとインフォメイションが与えられていきます。私は最初のところで，先取りして，ihr *Haus*「かれらの家」としましたから，ここでは mit dem Jungen でいいし，その方がすっきりします。

田：mit dem Jungen とすると，理屈をいえば，この男の子はその「家」の家族の子ではない，とも取れないことはありませんね。

S：文法的にはそうですけれど，われわれはこういうことを考える必要があるんです。つまり，翻訳者は最初から一文一文，熟慮しながら訳していきます。しかし，読者は，翻訳者とは全く違った読み方をしているということです。例えば，読者はここで mit dem Jungen に出会っても，前に出てきた「家」と関係のない男の子だとは考えません。読者は分析などしないで，次から次へと新たなインフォメイションを追っていくだけです。

田：ただ，日本語の場合，読者はこの「かれらの」という言葉によって，ああ，この人，つまり話し手は，この「家」の家族ではなかったのだということが分かるのです。ですから，日本文では，この「かれらの」は重要なインフォメイションなんです。そうすると，最初の「家」を die Familie にしておくと，mit ihrem Jungen としても，この ihr は Familie を受けて，首尾一貫するのですがねぇ。

病弱というほどではないが，風邪ばかりひいていたようだった。風邪をひくと扁桃腺が腫れて高熱が出る。

（田） Es wäre zuviel gesagt, daß er schwach und kränklich war, aber er schien fast immer erkältet zu sein. Und wenn

er sich erkältet hatte, waren seine Mandeln entzündet, und er bekam hohes Fieber.

(S) Nicht unbedingt kränklich, erweckte er doch stets den Eindruck, als sei er das ganze Jahr über erkältet. Und wenn er erkältet war, schwollen seine Mandeln an, und er bekam hohes Fieber.

▶「Aというほどではないが」の nicht unbedingt A

田:「... というほどではないが」を私は, es wäre zuviel gesagt, daß ... としました。

S: もちろん, 日本語の意味するところは伝えていますが, 少し回りくどい言い方ですね。ここは, 私がやったように, nicht unbedingt A, (macht er doch den Eindruck B.) という言い方が, 常套句ともいえる言い方です。

田: こういう言い方は, なかなか辞書では探せませんから, たくさんドイツ語の文章に接して, あるいは, ドイツ人との会話を通じて, 自分のものにしていく以外ありませんね。

▶「... ようだった」

田: それに続く「風邪ばかりひいていたようだった」ですけれど, この「... ようだった」は断定を避けた日本語特有な言い方ともいえますが, この「... ようだった」から, この語り手は, この男の子を第三者として距離を置いて見ているという感じを受け, そういう関係にある人だということが分かります。そういうことが, この scheinen で言い表わされているでしょうか。

S:「風邪ばかりひいているようだった」は, もちろん er schien fast immer erkältet zu sein. で文句なくいいのですが, scheinen はあまりに一般的な言い方ですから, 私は文学作品らしく違った言い方にして, er erweckte ... den Eindruck, als sei er ... としてみま

した。

田: その scheinen や den Eindruck erwecken で，いまいったような距離を置いた感じが出ていますか。

S: 出ていると思いますよ。

田: 「風邪ばかりひいている」の「… ばかり」を私は，fast immer で訳しましたが，シュレヒトさんも，同じように temporal な表現で，das ganze Jahr über と，日本語でいう「年がら年中」に当る言い方にされました。

それをおそれて，母親が過剰に大事にする。いわば，過保護過干渉のくりかえしになり，それが男の子を虚弱にした。

（田） Die Angst davor veranlaßte seine Mutter, ihn zu sehr zu verwöhnen. So kam es zu dem Teufelskreis, daß sie den Jungen verhätschelte und sich übermäßig um ihn kümmerte, was zur Folge hatte, daß er so schwächlich wurde.

（S） Um zu verhindern, daß es dazu kam, kümmerte sich seine Mutter unablässig um ihn, weit mehr als nötig war. Diese ständige übertriebene Fürsorge und Bemutterung war es dann auch, was den Jungen so schwächlich machte.

田: この部分の訳は，全く違ったドイツ語になっていっています。たいへん興味深いので，一つ一つ逐語訳的に検討してみることにします。

「それをおそれて，母親が過剰に大事にする」ですが，これを私は，die Angst davor（それに対する不安が）seine Mutter（かれの母親に）ihn zu sehr zu verwöhnen（かれを過剰に甘やかすことを）veranlaßte（誘発した），という訳し方です。

S：私のは，daß es dazu kam（そうなることを）um zu verhindern（阻止するために）seine Mutter（かれの母親は）unablässig（絶えず）kümmerte sich um ihn（かれの面倒をみた）weit mehr als nötig war（はるかに必要以上に），です。田中さんの訳で気になるのは，「大事にする」を verwöhnen にしたことです。verwöhnen は「甘やかす」ことですから，ちょっと違うと思います。

田：次の「いわば，過保護過干渉のくりかえしになり」は，私は，so kam es zu dem Teufelskreis（そうすることで悪循環になった）daß sie den Jungen verhätschelte und sich übermäßig um ihn kümmerte（彼女が男の子を甘やかし，そして，過剰に干渉するという），です。そして次の「それが男の子を虚弱にした」は，was zur Folge hatte, daß er so schwächlich wurde（そのことが，かれがそのように虚弱になったという結果をもたらした）としました。

S：私の訳は，was den Jungen so schwächlich machte（男の子をかくも虚弱にしたことは）war diese ständige übertriebene Fürsorge und Bemutterung（それは，とりもなおさず，この絶え間ない母親の過剰な保護と世話であった）という言い方です。

田：なるほど。シュレヒトさんのこの文では，es ist ..., der (die, das) ... といういわゆる強調構文の変型ですね。

S：そうですね。diese ... Fürsorge und Bemutterung が一種の主語ですから，動詞は war ではなくて，waren でなくてはならないわけです。そして waren にすると，関係代名詞は，was でなくて，die にならなくてはならないのですが，まず，Fürsorge と Bemutterung は同意語の反復で，一つのまとまりと考えていいと思います。そして，関係代名詞も die ですと，二つの名詞をそれぞれのものとして受けることになりますが，was は，二つの名詞を一つのまとまりとして把握していることになりますので，この場合，私の書いたようなやり方がいちばん適切だと思います。

田：よく分かります。最後に「それが男の子を虚弱にした」のと

ころですが，私は，... was zur Folge hatte, daß er so schwächlich wurde としました。この daß- 文章を，... daß sie (seine Mutter) ihn schwächlich machte としたら，まずいですか。

S：それはおかしいですね。そうすると，母親が意図的に男の子を虚弱にしたことになってしまいすから。

田：なるほどね。確かにそうですね。

S：文学作品を訳した感想はいかがですか。

田：日本の小説は常に人間関係が中心テーマで，その中で葛藤する人間同士の感情や微妙な心理が描かれます。この作品などもその典型ですが，そういった意味で，評論文などの翻訳のときには出て来ない問題が出て来て面白かったです。

文学作品の翻訳はやはり起点言語のネイティブ・スピーカーには無理で，目標言語のネイティブ・スピーカーにまかせるべきですが，共訳という形をとれば，起点言語のネイティブ・スピーカーもそれなりの役割を果たすことが出来ると思いました。それは当然ドイツ文学を日本語に翻訳する際にもいえることです。

和 文 索 引

ア行

カ行

サ行

タ行

ナ行

ハ行

マ行

ヤ行

ラ行

ワ行

Nachwort

"Ist Japanisch schwer?" — Wie oft schon wurde mir diese Frage gestellt, wie oft schon habe ich diese Frage zu beantworten versucht!

Um ehrlich zu sein - auch jetzt, nach so vielen Jahren intensiver Beschäftigung mit der japanischen Sprache, weiß ich keine befriedigende Antwort auf diese Frage zu geben. Was mir im Laufe der Zeit jedoch deutlich geworden ist, ist die Tatsache, daß weniger das Erlernen der Sprache selbst Schwierigkeiten bereitet. Lautstruktur, grammatische Struktur, lexikalische Struktur ..., dies alles sind Dinge, die mehr oder weniger festen Regeln folgen, und die jeder, der etwas guten Willen zeigt und über die nötige Ausdauer verfügt, meistern kann. Viel schwieriger zu lernen ist, *wie* man etwas sagt, *wie* man etwas ausdrückt. Denn hier kommen Unterschiede in der Denkstruktur zweier Kulturen zum Tragen, die zu verstehen und zu überwinden weitaus komplizierter ist. Wenn ich etwas grammatisch richtig, aber auf einem deutschen Denkansatz basierend auf Japanisch auszudrücken versuche, wirkt das Gesagte nicht selten unnatürlich. Dieses Moment des Unnatürlichen wird stärker, je weiter zwei Kulturbereiche voneinander entfernt und je ausgeprägter die kulturellen Interferenzen sind. Daß es für einen Deutschen einfacher ist als für einen Japaner, Englisch zu lernen, liegt nicht allein an der engen Verwandtschaft der beiden Sprachen. Genauso ausschlaggebend ist, daß die Art und Weise des Denkens bei Deutschen und

z.B. Engländern eine größere Ähnlichkeit aufweist.

Was die unterschiedliche Denkart anbelangt, zeigt diese sich nirgendwo deutlicher als bei der Übersetzung, wenn es gilt, zum Teil schwierige Sachverhalte und komplexe Zusammenhänge von einer Sprache (Denkweise) in eine andere Sprache (Denkweise) umzusetzen. Wer also mehr von einer Fremdsprache kennenlernen möchte als nur ihre äußere Struktur, tut gut daran, sich mit Fragen der Übersetzung auseinanderzusetzen. Ich selbst unterrichte seit mehreren Jahren auch Kurse, in deren Mittelpunkt Probleme der Übersetzungstechnik stehen, und ich verschweige nicht, daß ich in diesen Klassen mindestens ebenso viel gelernt habe wie meine Studenten : aus den Fehlern nämlich, die meine Studenten machen, wenn sie ins Deutsche übersetzen. Diese Fehler haben mir gezeigt, wie Japaner bestimmte Dinge in einer bestimmten Situation ausdrücken. Dies hat mir für meine eigenen Studien sehr viel geholfen.

Übersetzen ist keineswegs leicht. Es geht ja nicht nur darum, bestimmte Fakten grammatisch richtig und unter Berücksichtigung der Unterschiede in der Denkart von einer Sprache in eine andere Sprache zu übertragen; ebenso wichtig ist, daß man sich darüber im klaren ist, welche Intention der zu übersetzende Text enthält. So muß ein literarischer Text anders übersetzt werden als ein Text eher technischen Inhalts, genauso wie ein journalistisch gefärbter Text, übersetzt man ihn im Stil einer wissenschaftlichen Arbeit, seinen Reiz verlieren wird. Wie jeder Text einen bestimmten Charakter hat, so muß auch jede Übersetzung den jeweiligen Charakter eines Textes widerspiegeln.

Wenn mich ein Freund bittet, ihm einen Brief zu übersetzen, übersetze ich natürlich anders, als wenn ich gebeten werde, einen Werbetext in eine andere Sprache zu übertragen. Im letzteren Fall kommt nämlich ein Moment dazu, das bei dem Brief nicht im Vordergrund stand: die Wirkung, der Effekt. Hier kann es sogar passieren, daß der Text in der Ausgangssprache nur das grobe Gerüst liefert, um das herum der neu entstehende Text in der Zielsprache aufgebaut wird.

Ein extremes Beispiel bildet weiterhin die literarische Übersetzung. Bei dieser kommt es ja nicht nur darauf an, den Inhalt, d.h. den Ablauf einer Handlung, die Beschreibung einer Landschaft, die Beziehung zwischen zwei Personen und ähnliches korrekt wiederzugeben — nicht weniger wichtig ist es, auch die besondere *Atmosphäre* eines Werkes in die andere Sprache zu *übersetzen*. Ich möchte sogar noch einen Schritt weitergehen, indem ich behaupte, daß auch das ästhetische Erlebnis, das dem Leser bei der Lektüre eines Werkes zuteil wird, in der Übersetzung erhalten bleiben muß. Wenn ein sprachliches Kunstwerk in der Übersetzung kein sprachliches Kunstwerk mehr ist bzw. als solches erkannt wird, hat der Übersetzer schlechte Arbeit geleistet. Dies zeigt, welch hohen Ansprüchen der Übersetzer genügen muß, wie groß seine Verantwortung ist.

Das vorliegende Buch ist weder ein Lehrbuch noch ein Leitfaden für das Übersetzen aus dem Japanischen in das Deutsche. Es soll vielmehr dazu anregen, sich mit Fragen der japanisch-deutschen Übersetzung zu beschäftigen. Das Buch ist aus einer spontanen Idee entstanden, und die meisten Antworten auf die im Laufe der

Gespräche gestellten Fragen sind ebenso spontan wie die Fragen selbst. Das Buch erhebt keinen Anspruch, einem bestimmten System für die Übersetzung zu folgen oder gar ein solches zu schaffen. Viele der angesprochenen Themen werden nur an der Oberfläche berührt und behandeln einen oder einige wenige von zahlreichen möglichen Aspekten, so daß eine umfassende Klärung in den meisten Fällen nicht möglich war. Auch die Übersetzungsvorschläge selbst stellen keineswegs in jedem Fall die beste aller Möglichkeiten dar. Im nachhinein muß ich sogar sagen, daß ich mich bisweilen dem Originaltext mehr als nötig verpflichtet fühlte. Wäre die Übersetzung losgelöst von diesem Projekt entstanden, wäre sie womöglich freier, mithin flüssiger geworden.

Vielen der Aussagen in diesem Buch liegt jedoch die langjährige praktische Erfahrung der beiden Autoren zugrunde, die es möglich machte, manchmal zu Ergebnissen zu kommen, wie sie in Lehrbüchern, Wörterbüchern und anderen für die Übersetzung relevanten Nachschlagewerken nicht zu finden sind. Ich glaube deshalb, daß das Buch dem Leser — und ich nehme an, daß es sich bei diesem um einen grundsätzlich an Fragen der Übersetzung Interessierten handelt — wichtige Anregungen für seine eigene Übersetzungstätigkeit geben kann. Für mich immer wieder interessant, wenn nicht gar faszinierend, ist die Vielfalt der Sprache, die Fülle der Möglichkeiten, Dinge auszudrücken und in einen sprachlichen Rahmen zu fassen. Die Beschäftigung mit Fragen der Übersetzung führt zweifellos dazu, die Sinne für die Sprache und ihre Schönheit zu schärfen. Daß sie uns darüber hinaus einen Einblick in eine andere Kultur, in eine andere Denkweise und nicht selten sogar in eine Welt gewährt, in der

völlig andere Wertvorstellungen herrschen, muß sie für uns um so wertvoller und attraktiver machen.

Tokyo, im Frühjahr 1991
Wolfgang E. Schlecht

著者略歴

田中　敏（たなか　さとし）

1935年生．1957年慶応大学経済学部卒．

1966年ミュンヘンのゲーテ・インスティトゥート　ドイツ語師範科卒．

東京ゲーテ・インスティトゥート講師を経て，現在明星大学教授．

主要著書

「西洋との対話」(日独対照)

「Zwischen Ost und West」(独文エッセイ集)

Wolfgang E. Schlecht（ヴォルフガング E．シュレヒト）

1950年生．1980年東京外国語大学日本語学科卒．

1982年東京大学大学院国語国文学研究科修了．

出版社勤務を経て現在早稲田大学助教授．

主要訳書

上田秋成「春雨物語」

富岡多恵子「結婚」

日野啓三「天窓のあるガレージ」

和文独訳のサスペンス

——翻訳の考え方——

1991年4月25日　第1刷発行

1995年3月25日　第3刷発行

著　者 ©　田　中　　敏
W. E. シュレヒト

発行者　藤　原　一　晃

印刷所　新興印刷製本(株)

発行所　101 東京都千代田区神田小川町3の24
電話 03-3291-7811(営業部) 7821(編集部)　株式会社白水社

振替 00190-5-33228　Printed in Japan　加瀬製本

ISBN4-560-00447-1

ISBN4-560-00447-1 C3084 P2200E
定価2200円【本体2136円】

